

指導と評価に生かす記録

令和3年10月

文 部 科 学 省

まえがき

幼児教育の質を支えているのは、幼児が出会う人々との関りや、用事が生活する環境の豊かさです。そうした豊かさを生み出すためには、日々の実践を多様な視点から振り返り、幼児の発達を理解を深め、指導の改善を行うことが大切であり、その基盤となるのが記録です。

本資料では、専門性を高めるための記録の在り方や、その記録を実際の指導や評価にどのように生かしていくのかなどについて実践事例を取り上げて解説をしております。平成3年の初版刊行以降、幼稚教育の動向を踏まえた加筆修正が重ねられてきました。今回、平成29年3月に告示された幼稚園教育要領において、育みたい資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに示されたことや、カリキュラム・マネジメントの充実、幼児の発達に即した主体的・対話的で深い学びの実現、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続等の観点から改訂が行われたことを踏まえ、記述内容を見直しました。

各園では、記録を通して幼児理解を深め、カリキュラム・マネジメントにより質の高い教育を提供することが求められています。本書を手掛かりに先生方の資質能力の向上や研修の充実等に取り組まれることにより、一人一人の幼児に、持続可能な社会の創り手としての基礎を培うことができるよう期待しております。

むすびに、ご協力いただいた作成協力者の各位に深く感謝の意を表します。

令和3年10月

文部科学省初等中等教育局幼児教育課長

大 杉 住 子

目 次

はじめに 幼稚園教育の質向上を支える教師の専門性.....	1
1. 学校教育としての幼稚園教育	2
(1) 生涯にわたる人格形成の基礎	2
(2) 学校教育のはじまりとしての幼稚園教育 において育みたい資質・能力	2
(3) 幼稚園教育において育みたい資質・能力が形成されている幼児の幼稚園 修了時の具体的な姿としての「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」 ...	4
(4) 教育の質の保障と向上	6
2. 教師に求められる専門性	8
(1) 幼稚園教師に求められる資質能力	8
(2) 幼児理解を深めるための記録と省察.....	11
コラム 非常時における幼児の学びの保障	13
第1章 専門性を高めるための記録の在り方	17
1. 教師の専門性と記録	18
(1) 幼稚園教育の特性と記録	18
(2) 保育の過程と記録	19
(3) 幼児理解と記録	19
2. 保育の記録の意義と生かし方	22
(1) 幼児理解を深めるために	22
(2) 幼児理解を基に次の保育を構想するために	23
(3) 教師と幼児との関係を省察し、教師自身の幼児の見方を振り返るために .	24
(4) 他の教師と情報を共有し、自分の保育を見直すために	27
(5) 幼児の学びの軌跡を残し、保護者との連携に生かすために	27

第2章 実践者のための記録の実際	29
1. 記録を書いてみよう	30
事例1 遊びの記録を書いてみよう	30
事例2 一人の幼児を追って書いてみよう	32
事例3 1日の記録を書いてみよう	33
2. 記録の取り方の実際	36
(1) 記録の様式と実際	36
①名簿に書き込む記録	37
②一定の枠組みを決めて書く記録	40
③日案に書き込む記録	42
④学級全体の遊びを空間的に捉える記録	43
(2) 様々な記録の方法	46
3. 記録からの読み取りの実際	48
(1) 一人の幼児としての育ちを読み取る	49
(2) 幼児の人間関係の育ちを捉える	52
(3) 教師の指導を振り返る	55
(4) 環境の意味を読み取る	59
(5) 学級の育ちを捉える	61
(6) 特別な配慮の必要な幼児を理解し支援を考える	66
第3章 記録を指導や評価の実際に生かす	71
1. 記録を通して幼児理解を深める	72
2. 記録を指導や評価に生かす(実践事例)	74
(1) 記録から指導の過程を評価する	74
事例1 「鬼の面作り」A児の姿から(5歳児2月)	74
事例2 水族館遠足から水族館ごっこへ(4歳児11月)	78
事例3 “わくわく造形展”に向けての活動(5歳児11月～12月)	82
(2) 教材研究に生かす	88
事例1 幼児の発達に応じた教材を準備する(3歳児・5歳児5月下旬～6月)	88
事例2 遊びのイメージを実現するために(4歳児12月)	93
事例3 コマ回しの取組から(5歳児1月中旬から2月中旬)	97

(3)	記録を指導計画の改善に生かす	103
事例1	保育の過程の評価が次の指導計画へとつながる (5歳児4月下旬)	104
事例2	教師からの刺激を受けて (3歳児5月中旬～6月初旬)	107
(4)	記録を評価に生かす	113
事例1	考えを出し合って応援する仲間 (5歳児2月)	113
事例2	グループの協同的活動を学級全体の活動につなげる (5歳児10月)	118
事例3	記録を指導要録に生かすために (5歳児6月と翌年の2月)	123
事例4	記録を基に小学校教師と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につ いて理解を深める (5歳児6月)	130
(5)	記録を園内研修に生かす	139
事例1	担任の記録を基に～一つの場面を多くの目で理解する～ (4歳児7月)	139
事例2	話合いの音声記録を通して～教師の自己理解が深まる～ (3歳児9月)	142
事例3	他の教師の記録を通して (3歳12月)	146
事例4	幼稚園教育において育みたい資質・能力と「幼児期の終わりまでに育っ てほしい姿」の理解を深める	149
事例5	教育目標に向かう幼児の姿について記録の具体的な幼児の姿から考える (4歳児5月)	154
事例6	ビデオ等映像記録を通して	159
(6)	保護者との連携に生かす	164
事例1	記録を介して保護者と教師とで幼児理解を深める (4歳児7月) ...	165
事例2	写真を用いたお便りを通して幼児の育ちや学びの軌跡を伝える	169
	第3章に記載している事例一覧	174
	参考資料	177
1	教育基本法 (抄)	178
2	学校教育法 (抄)	179
3	学校教育法施行規則 (抄)	180
4	幼稚園教育要領	181

本資料の活用にあたって

【本資料の主な対象者】

本資料は、専門性を高めるための記録の在り方や、記録を実際の指導や評価にどのように生かしていくのかなどについて解説したものです。

本資料は主に幼稚園の教師を対象としていますが、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても同様であり、幼保連携型認定こども園の保育教諭等においても、特に満3歳以上の園児の教育及び保育を充実させていく上で、ご参考にさせていただけるものと考えています。また、保育所においても本資料を適宜ご活用いただきたいと思います。

【本資料の構成】

はじめに、幼稚園教育において育みたい資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、教師に求められる専門性などについて述べた後に、第1章では、教師の専門性と記録、保育の記録の意義と生かし方について述べています。

第2章では、実践者のための記録の実際として、記録の取り方の実際、記録からの読み取りの実際などについて述べています。

第3章では、記録を指導や評価に生かしていく上での手掛かりとなるようにいくつかの具体的な事例を紹介しています。なお、紹介している事例は、あくまでも一つの実践事例であることを考慮の上、参考としていただきたいと思います。また、本資料に掲載している事例や記録については、可能な限り原文を尊重して掲載していることから、国の法令等とは異なる表記や統一が図られていない表記も含まれています。

各幼稚園等や各教師、各自治体において、本資料が積極的に活用され、幼児期の教育の一層の充実が図られるよう期待しています。

はじめに

幼稚園教育の質向上を

支える教師の専門性

1. 学校教育としての幼稚園教育

学校教育では、「心身の発達に応じて、体系的な教育が組織的に行われなければならない」とされ、そのはじまりとして幼稚園が位置付けられています。幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものです。したがって、学校教育全体で育成を目指す資質・能力について、「学校教育のはじまり」として、幼児期にふさわしい生活を通して幼稚園教育において育みたい資質・能力が形成されるように努めること、そして、常に教育の質の向上に努めることが大切です。

(1) 生涯にわたる人格形成の基礎

教育は、子供の望ましい発達を期待し、子供のもつ様々な可能性に働き掛け、その人格の形成を図る営みです。幼児一人一人のもつ様々な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、幼児一人一人が自らの興味や関心、能力に応じて環境に関わり、それにに応じて環境からの応答を受け取るといった相互作用を繰り返すことで具現化されていきます。幼児は、環境と関わり、体験を深め、そのことが幼児の心を揺り動かし、次の活動を引き起こしていくのです。そうした体験の重なりが幾筋も生まれ、幼児の将来へとつながっていきます。

(2) 学校教育のはじまりとしての幼稚園教育において育みたい資質・能力

幼稚園は学校教育法に規定された学校の一つであり、小学校などと同様に、公の性質を有しており、そこで営まれる学校教育は、一部の人々の利益のために行われるものではなく公共的な性格を有しています。もとより、学校教育は、幼稚園から大学に至るまで、教育を受ける者の心身の発達の段階に応じて、体系的、組織的に行われるものです。社会に出てからも学校で学んだことを生かせるよう、学校教育全体を通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」をバランスよく育てていきます。幼稚園においても、幼児期の発達の特性を踏まえ、幼稚園教育において育みたい資質・能力である「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」を育てていきます。「知識及

び技能の基礎」とは、具体的には、豊かな体験を通じて、幼児が自ら感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりすること、「思考力、判断力、表現力等の基礎」とは、具体的には、気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること、「学びに向かう力、人間性等」とは、具体的には、心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとすることです。

これらの資質・能力は、実際の指導場面において、それぞれを個別に取り出して指導するのではなく、遊びを通しての総合的な指導の中で一体的に育むよう努めることが重要です。幼稚園教育においては、遊びを展開する過程で、幼児は心身全体を働かせて活動するため、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていきます。遊びを通して総合的に発達を遂げていくのは、幼児の様々な能力が一つの活動の中で関連して同時に発揮されており、また、様々な側面の発達が促されていくための諸体験が一つの活動の中で同時に得られているからです。幼児期は諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのです。

また、幼稚園では、小学校以降の学校教育とは異なり、教科書等の教材を使わず、遊具などの環境を工夫して設定し、教師が幼児一人一人に応じた適切な援助を行いつつ、遊びを中心とした幼児の主体的な活動を通して、生きる力の基礎を育成する教育を行っています。幼児期の教育においては、幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことを重視しています。その際、幼児が環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになることが大切です。教師は、このような幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めることが重要です。

こうした幼児期の教育の特質を十分に踏まえ、幼稚園教育を通して、幼児に資質・能力が育まれていくことが大切です。

(3) 幼稚園教育において育みたい資質・能力が形成されている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿としての「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

幼稚園教育において育みたい資質・能力が形成されている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」であり、これらの資質・能力は、幼稚園教育要領の第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して育まれていきます。教師は、幼児の活動の様子から幼児の姿を捉えます。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児の姿を捉え、どのような資質・能力が育っているのかを読み取っていくとき、その手掛かりとなります。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は到達目標ではなく、幼児の自発的な活動としての遊びを通して、資質・能力が幼児一人一人の発達の特性に応じて育っていく中で、幼児の姿として現れていくものであり、全ての幼児に同じように見られるものではありません。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、特に5歳児後半に見られるようになる姿ですが、5歳児に突然見られるようになるものではありません。3歳児、4歳児の時期から、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意した結果として見られる姿なのです。そのことを再確認する必要があります。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、どのような資質・能力が幼児に育っているのかを読み取っていくことは、幼児の行動にはこういう意味があると決めつけて解釈することではありません。教師には、一人一人の幼児と触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとする姿勢が大切です。幼児を理解することが全ての保育の出発点であり、幼児を理解するためには、教師が幼稚園生活の全体を通して幼児の発達の実情を的確に把握することや、一人一人の幼児の個性や発達の課題を捉えることなどが大切です。こうした教師一人一人の営みが、質の高い幼稚園教育を支えているのです。

(参考) 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(幼稚園教育要領(平成29年3月31日告示)より抜粋)

1 幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、この章の第1に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

2 1に示す資質・能力は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである。

3 次に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである。

(1) 健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

(2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

(6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

(4) 教育の質の保障と向上

学校としての幼稚園は、3歳以上の幼児を対象として、「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」を目的としており、小学校以降の生活や学習の基礎を培っています。そのため、幼稚園は質の高い幼稚園教育を展開しなければなりません。そもそも、学校は、学校教育法において「教育水準の向上に努めなければならない」とされています。そのためには、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育ていけるよう、目の前の子供たちの姿を踏まえながら不断の見直しを図ることが求められます。つまり、PLAN（計画）DO（実践）CHECK（評価）ACTION（改善）の「PDCAサイクル」を通じた学校教育の改善・充実の好循環を生み出していくことが大切なのです。

幼稚園では、幼児期の特性を踏まえた教育を展開しており、これを充実させていくことが質の高い教育につながります。幼稚園教育は、環境を通して行う教育を基本とし、①幼児期にふさわしい生活の展開、②幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導、③幼児一人一人の発達の特性に応じた指導に留意し、幼児一人一人が発達に必要な体験を得られるようにしています。このような幼稚園教育の基本を十分に理解し、PDCAサイクルの好循環を通して、組織的かつ計画的に各園の教育活動の質、向上を図る「カリキュラム・マネジメント」が大切です。

そのためには、まず、教師は幼児一人一人の特性を的確に把握し、幼児を理解することが基本となります。幼稚園教育の特徴は、教師があらかじめ幼児一人一人の発達に必要な体験を見通し、各時期の発達の特性を踏まえつつ、教育課程に沿った綿密な指導計画を作成して、継続的な指導を行うところにあります。しかし、指導計画の作成や一人一人の幼児理解は、誰にでもできるものではありません。教師は、指導計画の作成や日々の指導に当たり話し合ったり、研究会や研修会等に参加したりして、常にその専門性を高めるようにしています。

このように、幼稚園においても、小学校以降の学校教育と同様に専門性をもった教師が、意図的、計画的に、また組織的に幼稚園教育を行いつつ、学校教育を担う施設としての責任を果たそうとしているのです。したがって、幼稚園においては、集団性、

意図性、計画性などの学校教育としての特性や、小学校以降の生活や学習の基礎を培うものとしての役割等を踏まえつつ、幼児期にふさわしい生活が展開され、適切な指導が行われるよう、組織的、発展的な指導計画が作成されることが大切なのです。そして、幼児期にふさわしい生活を通して、幼児に「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が育まれていくようにすることが重要なのです。

幼児理解は、幼稚園教育においてとても重要であり、各園の教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントにおいても中核となります。そもそも、幼児は自ら発達に必要なものを獲得しようとする力をもっています。幼稚園教育では、その力を十分に発揮できるような環境を構成することが重要であり、だからこそ、幼児の中に何が育とうとしているのかなどの視点をもって計画を立て、幼児が興味や関心、必要感に基づいて主体的に活動し、充実感や満足感を味わえるような保育を行うことが大切です。そして、幼児理解に基づいた評価を通して幼児の実態を捉え、教育課程の実施状況を評価して、その改善を図っていきます。

カリキュラム・マネジメントの中核となる幼児理解に当たっては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて進めます。この姿は、幼児期にふさわしい生活を通して「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が育まれている、幼児の幼稚園修了時の具体的な姿です。幼児は総合的に発達しており、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は絡み合って幼児の姿として現れます。

幼児の教育活動の質の向上のために、幼児理解、教育課程の編成と指導計画の作成、保育の展開、家庭や地域との連携などが有機的につながり合い、PDCAサイクルの好循環を生み出していくことが重要です。そして、それを支えるのは、幼稚園の教師一人一人であり、その総体である組織としての幼稚園であることを忘れてはなりません。

2. 教師に求められる専門性

今日、子供を取り巻く環境変化がめまぐるしく、それを捉えることも予測することも困難な時代になってきています。学校教育にあっては、こうした様々な変化に子供一人一人が自己を発揮し、積極的に向き合いながら、他者と協働して創造的に課題を解決していく教育の実現が期待されています。各学校には、将来を見据えた社会に開かれた教育課程の編成を通して、育成すべき子供の資質・能力を明らかにし、学校種間の接続を強めながら、各々の学校種の実践や教育の成果をつなげていくことが求められています。そのために、教師一人一人が日々の実践の中でその専門性を十分に発揮し、また、資質能力の一層の向上を図りながらその役割を果たしていくことが切望されています。

(1) 幼稚園教師に求められる資質能力

学校教育における教師には、教育基本法第9条において、「自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」、「その使命と職責の重要性にかんがみ、その身分は尊重され、待遇の適正が期せられるとともに、養成と研修の充実が図られなければならない」とされています。教師一人一人に求められる資質能力を自ら絶えず高めていくことは、学校種にかかわらず全ての教師に求められているのです。

それでは、幼稚園教師に求められる資質能力とはどのようなものなのでしょうか。

「幼稚園教員の資質向上について一自ら学ぶ幼稚園教員のために一」（幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書 平成14年）では、幼稚園教師に求められる資質として、「幼児を理解し、総合的な指導をするために必要な資質」、「幼稚園を取り巻く環境が大きく変化する中、新たに幼稚園教員に求められるようになってきた資質」を挙げています。さらに、その資質を向上させるための手掛かりとして、幼稚園教師に求められる専門性のうち、重要なものについて次のとおり示しています。

- ・ 幼児理解・総合的に指導する力
- ・ 具体的に保育を構想する力、実践力
- ・ 得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性

- ・特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力
- ・小学校や保育所との連携を推進する力
- ・保護者及び地域社会との関係を構築する力
- ・園長など管理職が発揮するリーダーシップ
- ・人権に対する理解

中央教育審議会では、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(平成27年12月 中央教育審議会答申)において、これからの時代の教師に求められる資質能力として、「これまで教員として不易とされてきた資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力」などを挙げています。また、「大学が教職課程を編成するに当たり参考とする指針(教職課程コアカリキュラム)を関係者が共同で作成することで、教員の養成、研修を通じた教員育成における全国的な水準の確保を行っていくことが必要」とされました。

この答申を受けて「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」(平成29年11月)では、「教職課程コアカリキュラム」が作成されました。これは全国全ての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示しています。これらを踏まえた幼稚園教師の教員養成課程は次のような構成となっています。

○領域及び保育内容の指導法に関する科目

- イ 領域に関する専門的事項
- ロ 保育内容の指導法(情報機器及び教材の活用を含む。)

○教育の基礎的理解に関する科目

- イ 教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想
- ロ 教職の意義及び教員の役割・職務内容(チーム学校運営への対応を含む。)
- ハ 教育に関する社会的、制度的又は経営的事項(学校と地域との連携及び学校安全への対応を含む。)
- ニ 幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程
- ホ 特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解

- へ 教育課程の意義及び編成の方法（カリキュラム・マネジメントを含む。）
- 道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目
 - イ 教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）
 - ロ 幼児理解の理論及び方法
 - ハ 教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法
- 教育実践に関する科目
 - イ 教育実習
 - ロ 教職実践演習
- 大学が独自に設定する科目

幼稚園教師には、こうした教職課程を通して得た学びを日々の保育に生かしていくとともに、日々の保育、時代の変化や自らのキャリアステージに応じた研修等を通して理論と実践を往還しながら学び続けていくことが求められています。その際、幼稚園教育において大切にすべきことは何かといったことを「幼稚園教育の基本」から絶えず問う姿勢が大切です。

幼稚園教育要領に示されているとおり、幼稚園教育の基本は「環境を通して行う教育」であり、幼稚園で展開される生活や指導の在り方は幼児期の特性にかなったものである必要があります。このため、幼稚園において、「幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」、「遊びを通しての総合的な指導が行われるようにすること」、「一人一人の特性に応じた指導が行われるようにすること」を特に重視しなければなりません。

その際、教師が幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければなりません。また、教師が幼児の活動の場面に応じて様々な役割を果たし、幼児の活動を豊かにする必要があります。その意味では、保育の源泉は教師一人一人の幼児理解にあり、幼児を見、捉える目を日々養うことが大切です。そこから幼児の主体的な活動が確保される環境の構成が大切なのです。

幼稚園教師として、日々、幼児の姿から学び、たゆまぬ努力を続けることが、自らの資質能力を高めることにつながるのです。

(2) 幼児理解を深めるための記録と省察

幼児理解とは、幼児と直接触れ合いながら、その言動や表情から思いや考えなどを推察し受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとすることです。正に幼稚園教育の根幹であり保育の出発点なのです。この幼児理解を深め、一人一人に応じた指導を行うためには「省察」が不可欠です。なぜなら、「省察」とは、一般には「自分自身の言動を省みて、そのよしあしを考えること」ですが、保育という営みの中では、「幼児の姿や幼児の視点から教師自身の指導の過程を省みて」という意味もあるからです。省察は、計画通りにできた、あの子はうまくできなかった、などという教師中心の振り返りではありませんし、幼児の側に立った振り返りのようであっても、幼児の気持ちを今日の一コマの保育場面だけから決め付け、読み取るものでもありません。教師は、明日はこうしてみよう、いや、やはりこの方がいいかもしれない、などと幼児の姿を浮かべながら明日の保育に思いを巡らし、幼児と関わる中で保育の方向性が適していたか振り返りながら確認し、また翌日の保育へと方向性を修正していくのです。

日々省察するということは、幼児の思いを受け止め、昨日の幼児の姿だけでなく、これまでの幼児の経験を捉え幼児理解を深めつつ、これまでの保育を振り返りながら幼児の発達を見通し明日の保育へとつなげていく端緒となる重要なものなのです。省察を行う際に、日々の幼児の言動、幼児の気になったことや印象に残るエピソードなどに関係するようなメモや写真など、「記録」情報は貴重な材料となります。「記録」は取り方によって見えてくる幼児の姿も異なるため、園として、担任として、今、幼児の何を理解する必要があるのかといったことを踏まえ、「記録」を取ることが大切です。そのときに知りたいことが明確であっても、記録を取るということはそう簡単なことではありませんが、この「記録」を生かすことは、幼児一人一人を理解するための重要なヒントを与えてくれますし、省察を深めていくためには必要です。質の高い記録を取り省察を深めていくということは、幼稚園教師にとって必要な専門性であり、幼児理解を深めながら資質能力を向上させ、実践力を高めていくために必須のことなのです。

実際には、幼稚園教育の特性として、教師は記録に基づく省察を通して、まずじっくりと幼児と、環境の一つである教師としての自分を見つめ直します。その教師は幼

児に最も近いよき理解者である反面、それが幼児をありのままに見ることを難しくしている場合もあります。そうしたことも考え合わせながら、その省察を基に複数の教師がそれぞれの意見を出し合いながら一人の幼児のよさを多面的に捉え、省察を更に重ねていくのです。教師同士が集まり、互いの実践や保育観を伝え合うことで、一人一人の幼児を通して幼児理解が一層深まり指導の在り方に幅が生まれていきます。幼稚園教育は教師一人だけで行うものではありません。日々の保育は一人の幼児のために全ての教師が自己の専門性を十分に発揮し生かし合うことで成り立っており、そうすることが幼稚園教育の特性でもあるのです。

質の高い幼稚園教育の実現に向けて、教師同士が日々の遊びや生活の中における幼児の姿について記録を基に語り合う中で、幼児一人一人の理解を深め発達に必要な体験を各教師が共有しながら、自ら保育を振り返ることが大切です。他の教師と協働しながら、記録を取り省察するという経験を積み重ね、教師として学び続ける姿勢こそが教師の専門性として必須の幼児理解を更に深め、教師一人一人の資質能力をより高次のものにしていくのです。

コラム 非常時における幼児の学びの保障

令和2～3年度、各幼稚園では、新型コロナウイルス感染症対策を講じながら幼児の健やかな成長を促す活動をどのように展開していくのかについて試行錯誤し、非常時における幼児の学びの保障の在り方について考える年であったといえます。非常時においても幼児の学びを保障していくためには、幼児の周囲にある環境には何があるのか、その環境がもつ幼児にとっての教育的価値とは何か、幼児の発達に必要な体験とは何かについて、常に考えることが大切です。

また、教育課程に係る教育時間の活動にとどまらず、家庭との連携の在り方についても検討していく必要があります。特に、幼児は身近な大人である保護者の影響を強く受けるため、保護者が安定した気持ちで幼児を育てていくことは、幼児の健やかな成長にとって重要であることを踏まえ、保護者の不安な気持ちを受け止めつつ、子育ての支援を充実させることも求められています。

非常時における幼児の学びの保障のために、どのような視点が大切なのでしょうか。それは、幼児を取り巻く環境がどのように変化するかといったことによりますが、ここでは飛沫^{まつ}や接触によって感染する感染症対策を講じながら幼児の健やかな成長を促す活動の例で考えていきましょう。

1. 感染症対策を踏まえた幼児の生活と幼稚園での活動

(1) 幼児の生活の変化を踏まえた幼稚園での活動の工夫

日常生活全般を通じて、地域の感染状況等を踏まえた感染症対策を講じることが求められています。こうした状況下では、外遊びの時間が減り家庭で過ごす時間が増えているかもしれません。また、保護者と一緒に商店街で買い物したり公共交通機関を使って海や山に出掛けたり、地域の催し等へ参加したりする機会が減ったりするなどしているかもしれません。そうしたことにより、体を動かす機会、他の幼児や地域の人と触れ合う機会などが減っている可能性もあります。そうした現状を踏まえ、園庭等での体を動かす遊びを積極的に取り入れるなどの活動が考えられます。また、幼稚園においても、これまでと同様に園での行事に地域の方々を招いたり地域に出掛けて行ったりはできないかもしれませんが、オンラインや手紙を通じて関わることも考えられます。電車や列車などの絵本を取り

上げることで、乗り物への興味や関心を引き出すことも考えられます。幼稚園だけでなく、家庭や地域での幼児の生活の現状を踏まえ、幼児が興味や関心を広げ、発達に必要な体験を得ていくことができるような活動の工夫が求められます。

(2) 密集に配慮しつつ幼児の興味や関心に応じた遊びの工夫

幼児は遊びの天才です。どこでも、何を使っても遊ぶことができます。廊下、遊戯室、テラス、園庭等、園内の様々な場所について、幼児の遊び場として活用できないか考えてみましょう。幼児の遊び場を増やすことで、幼児が一か所に集まることを避けることができます。しかし、密集を避けた遊びの場所を提示するだけでは幼稚園教育とは言えません。そこには、幼児が自ら興味や関心をもって主体的に関わり、遊びに没頭できるような環境の構成が必要です。

幼児の遊び場を分散させても、多数の幼児が同じ遊びに興味や関心をもってしまいかもしれません。同じ遊具や用具を同じ遊び場に置くのではなく分散させたり、教師がさりげなく声を掛けて違う遊び（遊び場）に興味や関心をもつように促したりすることが考えられます。また、園庭の各所に遊びのコーナーを設置して、時々、内容を変えることで「今日は何があるのだろうか」とワクワクしながら遊ぶことができるでしょう。

密集に配慮した遊びや生活の工夫では、ICT機器の活用も考えられます。例えば、1枚の大きな画用紙に複数の幼児が協力して絵をかくような活動では、幼児が密集してしまいます。絵をかく際に、ネットワークでつながったタブレットパソコンを使って幼児が絵をかき、その絵をプロジェクター等に映すことによって、密集を避けつつ、幼児同士が思いを共有しながら協力して絵をかくことができます。もちろん、紙や絵の具を使って絵をかくことは、素材の特性などを知る貴重な体験です。絵をかくという活動を通して、紙や絵の具などの素材と触れ合う体験を重視するのか、幼児同士が試行錯誤したり協力したりする体験を重視するのかによって、活動内容は異なります。ICT機器は、当事者が遠隔にいても言葉を交わしたり協力したりすることが可能です。そのような特性を生かして、オンラインで、小学校の児童との交流を楽しんだり、地域の方と一緒に竹トンボを作って地域の方から遠くまで飛ばす工夫を聞きながら、誰が遠くまで飛ばせるか競争したりする活動なども考えられます。幼児が必要な体験を得ることができるよう、ICT機器の活用も含め、様々な工夫を行う必要があります。

(3) 集団を通じた教育の工夫

遊び場を分散させるということは、小集団で遊ぶということになります。多くの幼児が共に遊ぶのとは異なり、一人一人の幼児がより濃密に関わる機会ともなるかもしれません。多くの幼児の中では自己発揮しにくかった幼児も、小さな集団の中では自己発揮しやすいかもしれません。

これまで学級単位で行っていた活動を小集団で行う工夫をすることも考えられます。製作活動であれば、目的やテーマは学級単位で共有しつつ、グループごとに取り組みます。絵本の読み聞かせを通して、イメージを共有し製作活動へ展開させることも一つの方法です。製作しようとする絵本の場面や必要な材料はグループごとに異なることが予想されます。複数日かけて活動する中で、各グループの工夫や進捗状況をその他のグループにも伝えていきます。他のグループのよいところを認め、自分たちの活動にも取り入れようとする姿につなげたいものです。共通のイメージをもった各グループの製作物が並ぶことで、たとえ学級の全員が揃うことが難しい状況でも一体感を感じられることが期待されます。

小集団での活動が複数日にわたって展開される場合、いつ、どのグループがどのような活動を行っていたかを記録し、他のグループに教師が伝えられることもあります。また、仲の良い幼児と必ずしも登園日は重ならず、直接関われない場合もあるかもしれません。そのようなとき、教師が仲立ちし、相手に気持ちを別日に伝えてもいいでしょう。活動自体だけでなく幼児の気持ちも記録しておくことで、直接的に関わっていなくても学級としての仲間意識を育むことができます。

2. 家庭と連携した幼児の育ちの保障

(1) 保護者の不安な気持ちに寄り添った子育ての支援

保護者と幼児との家庭での時間が増える中、保護者はストレスを感じたり、幼児との関わり方に不安を感じたりすることがあります。そうしたときに、家庭向けに動画を配信したり、家庭でもできるように新聞などを使った簡単な製作を幼稚園で取り上げたりするなど、幼児が家庭での遊びのヒントとなるような情報を保護者に提供することが考えられます。また、感染症対策を講じつつ幼児と保護者が一緒に遊べる場として園庭を開放することなども考えられます。さらに、幼児との関わり方に不安を感じている保護者には、オンライン等による相談会を開催したり、保護者をつなぐ掲示板を園に設置したりすることも考えられます。も

ちろん、幼児の送迎時などの保護者の様子から、保護者の話を聞く機会を設けることも考えられます。

(2) 保護者に幼稚園での幼児の様子を伝達

幼児の幼稚園での生活の様子を知ることは、保護者が幼児の発達や幼稚園教育を知るだけでなく、保護者の安心や子育ての喜びにつながります。

保護者の参観行事が例年よりも減少する中、幼稚園で幼児がどのように過ごしているかを保護者は理解しづらい状況です。お便りや電話、限定公開でインターネット上に幼児の活動の様子を配信、送迎時に保護者が見ることができる場所に園での生活の様子の写真を掲載するなど様々な方法で幼稚園の保育を今まで以上に伝えていく必要があります。

また、幼稚園で今後予定している活動を伝え、その活動（遊び）の導入を家庭で保護者と一緒に行ってもらい、家庭内で共通の期待につなげていくことも考えられます。その際には、遊びの展開の仕方や声掛けについても保護者に伝えることが大切です。幼児がやりたがらなければ無理強いする必要はないこと、保護者が戸惑うと想定される反応への対応方法にも触れておくといよいでしょう。これらの取組を重ねていくことで、保護者は、幼児との関わり方の理解を深めていくことが考えられます。

非常時の中でこれまでと同じ教育や子育ての支援は難しくなってしまうかもしれません。そして、現状に応じた教育や子育ての支援は何であるかを模索しなければならないという社会的要請に応えることは容易ではないかもしれません。しかし、常に幼稚園教育の基本に立ち返り、学び考え続ける教師の姿勢があれば、どのような状況に置かれようとも幼児の学びが止まることはないはずで、また、非常時における経験は、これまでの保育を見直す契機ともなり、今後の保育の一層の充実にも資することでしょう。

第1章

専門性を高めるための記録 の在り方

1. 教師の専門性と記録

(1) 幼稚園教育の特性と記録

教師は、幼児一人一人の内面を理解し、信頼関係を築きつつ、集団生活の中で発達に必要な体験を幼児が自ら経験として積み重ねていくことができるような環境を構成し、活動の場面に応じた適切な指導を行うことが必要です。また、指導の過程における記録については、教師が自らの指導を振り返り、指導の改善に生かしていくために、全ての学校教育段階でも重要視され、特に幼稚園教育においては、幼児の発達の理解と教師の指導の改善の両面から重要な役割を担っています。

幼児はその発達の特性から、自分の気持ちや考えなどを十分に言葉で表現することができない場合があります。幼児の言動は思考や言語に至る前の感覚や感情に多く依拠しています。その現れはときに弱く、教師が捉えきれず、見逃してしまうこともあります。また、幼稚園教育において育みたい資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、見て分かるような形で現れるとは限りません。したがって、教師は幼児の行動の小さな手掛かりに気を留めて、幼児の内面を推し量ることによって初めて理解できることが多いといえます。そのため、幼児の行動を「記録」することを通じて、幼児理解を深めていくことが一層重要になります。

さらに、幼稚園教育の基本は幼児一人一人の発達の特性に応じることです。幼児の心の状態や教師が設定した具体的なねらいが幼児の姿にどのように現れているのか、個別に捉えなければなりません。また、教師の目の前に現れる幼児の姿は、教師との関わりの下に現れている姿である以上、教師は幼児だけでなく、教師自身の考えていたことや関わり方などについても記録する必要があります。記録は、保育の評価を行う際に、実際の活動の場面を設定したねらいや内容を基に分析して、次の指導計画作成の際のねらいや内容の設定に生かしていくための根拠となります。

このような特性をもつ幼稚園教育においては、「記録」が幼児理解や指導の中で重要な役割を担います。記録を取り続けることによって初めて、日々の保育の質を高めることが可能になります。

(2) 保育の過程と記録

幼稚園における指導は、「幼児理解に基づく指導計画の作成」「環境の構成と活動の展開」「幼児の活動に沿った必要な援助」「保育の評価に基づいた新たな指導計画の作成」を経て、それが翌日の保育に反映され展開されるという1日を単位とした循環の中で行われます。また、この過程は、組織的に、週、月、年の単位でも繰り返されます。これらの各過程において、記録するという作業が重要な役割を担います。

幼児理解は、幼児との応答の中でもたらされ、記録を通して、更に理解が深まり、次の保育の構想につながります。そして、長期の指導計画を背景にして、より具体的な幼児の生活に即した短期の指導計画である週案や日案を作成し、ねらい、内容に沿った環境を構成します。これらを踏まえて、教師は当日の保育を幼児と共に展開し、幼児一人一人に応答しながら柔軟に指導を行い、その中で環境の再構成なども行います。また、保育終了後に、幼児の育ちを振り返りながら、教師自身の援助や環境の構成について記録に基づき評価を行います。評価は個々に行われるだけでなく、園内研修などで記録を共有しながら同僚と協働的に行われることもあります。それらが新たな幼児理解につながり、教師一人一人が成長していく機会になっています。記録を取ることは、教師自身の保育を自覚し、更に改善していくために不可欠なものといえます。こうした一連のPDCAサイクルを通して、互いを高め合い、よりよい教育を目指す「カリキュラム・マネジメント」を支えているのも記録なのです。

(3) 幼児理解と記録

幼児を理解し、総合的に指導するために必要な資質を向上させることは、幼稚園の教師に求められる専門性として重要なものとなります。その専門性を高めるためには、保育を省察する力とその省察を基に具体的な保育を構想し、実践する力の育成が必要です。そして、その育成には学び合い協働し合う教師集団の形成が求められています。

○幼児理解と総合的指導力を高めるために

幼児は、自発的な活動である遊びを通して、心身全体を働かせ、様々なことを体験し、それが相互に関連し合いながら総合的な発達を遂げていきます。教師には、このような幼児の発達の姿を理解し、幼児の言動や表情から思いや考えなどを推察し、そ

の幼児のよさや可能性を捉えようとするといった幼児理解が求められます。幼児の行動を全て共感し受け入れることは簡単なことではありません。また、幼児の言動や表情から幼児の思いや考えが理解し難いこともあります。しかし、幼児の行動の意味を考へることによって、その行動の奥にある幼児の内面を推察し、幼児のもつ課題に気づき、援助していくことは可能です。幼児の感覚や感情を理解するには、幼児の何気ない言動を見逃さずに捉え、その意味を考へることが必要です。そのため有効な手段の一つが、幼児の行動について記録を取り、それを省察することです。特に、言動の意図が理解困難な幼児については、より一層意識的に記録を取り、省察する必要があります。その際、教師の応答を含めて検討することによって、新たな発見をすることもあります。

また、遊びを通した総合的な指導を行うためには、幼児の遊ぶ姿を多面的に捉える必要があります。同じ遊びでも、幼児によって体験していることが異なるからです。そして、教材研究や環境の構成を行いながら、その遊びの特性を深く理解することや、それと幼児一人一人の課題やねらいとの関連性を把握し、発達に必要な体験となるように指導していくことも求められます。幼児の主体性を引き出しながら幼児同士の関係が豊かになっていくような指導を行うためにも、遊ぶ姿を具体的に捉えた記録を基にして一人一人の幼児にとっての遊びの意義を捉えることが必要です。このように、教師が総合的に指導する力を発揮するためには、内面の理解はもとより、幼児と応答しながら進めてきた保育の展開を省察とともに記録し、明日の保育へとつなげる実践力や多様な体験ができる計画性が重要といえます。

○学び合う教師集団を形成するために

教師の専門性の中核である幼児理解に基づき総合的に指導する力や具体的に保育を構想し、実践する力を向上させていくためには、互いに学び合う教師集団の存在が不可欠です。教師の専門性を高めていくためには、教師一人一人が行う保育の妥当性の検討、すなわち保育の評価が行われなければなりません。保育の評価は、記録に基づいた教師一人一人の省察を基に、幼児理解や指導の在り方の検討を各人で行うだけではなく、教師集団で行うことが非常に効果的です。記録を互いに読み合うだけでも、新たな発見があります。さらに、幼児の姿を話し合うことで、幼児理解が広がったり深まったりする機会になります。また、機会を設けて互いの保育を見合ったり、環境

の改善を共に考えたりすることも重要です。これらを重ねることで、教師集団が幼児を理解する際の共通の視点を持ち、互いに補いつつ関わり合うことや、チーム保育をより連携して行うことができるようになります。ときには、教育目標に向かう姿や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などから話し合ったり、教材研究を皆で行ったりすることも専門性を高めることにつながります。互いに学び合う関係の中で、常に教育の質の向上を目指していくことが大切です。

2. 保育の記録の意義と生かし方

前節では幼稚園教育の特性を踏まえて、「記録」の重要性について述べてきました。しかし、教師は何らかの記録を日々残しているといっても、何のために記録するかを意識せずに惰性で書いていたり、記録した内容を振り返り、育ちを捉える機会がなかったりすることもあるようです。日常の保育の中で、記録の作成に時間をかけることが容易ではない場合もあるでしょう。

以下では、記録への認識を深め保育に生かせるように、記録の意義を五つの観点から述べるとともに、2章以降に具体的な記録の例を紹介します。

なお、記録には様々な種類があります。例えば、日々の保育を振り返る記録、幼児一人一人の成長記録、園内研究のテーマに合わせた実践記録、あるいは保護者との連携を図るための記録などです（第3章で詳述）。文字による記録が主ですが、それ以外にも写真やビデオなどの映像記録やイラストなどで表した記録もあります。記録を保育に生かすためには、記録の目的を意識し、その目的に応じた方法を考えて使い分けたり、工夫したりすることが大切です。

（1）幼児理解を深めるために

幼児は発達特性上、自分の思いを言葉だけでなく全身で表現します。そのため、教師は幼児の言葉や行為から幼児の心情や経験を理解する必要があります。その理解の視点としては以下のような点が挙げられるでしょう。

- 人・もの・ことなどの環境への関わりはどうか
- 何に興味や関心を持ち、どのような遊びの課題をもっているか
- 生活への取り組み方はどうか など

このような視点をもって幼児の姿を丁寧に捉えることが求められます。しかし、いくら丁寧に捉えようとしても、実際の保育場面では、幼児の言動の意味を直ちに理解することが難しい場合もあります。後になって類似の場面での言動を重ね合わせることによって初めて、そのときの幼児の言動の意味が理解できたり、言動の変化から成

長を読み取ることができたりすることがあります。したがって、幼児の心の動きや発達を一つの場面や行動のみで捉えるのではなく、一定の期間の記録をまとめることで捉えるということも大切です。

幼稚園において、教師は複数の幼児の成長や発達に責任をもちながら保育に当たらなければなりません。幼児一人一人を深く理解しようとすることはとても大切なことですが、特定の幼児とだけ向き合うことはできません。保育中は同時刻に様々な場所で様々な活動が展開していますから、全体を把握した上で、最も援助を必要としている幼児や活動を的確に把握し、対応する必要があります。教師は保育の空間全体をしっかりと捉えながら、幼児一人一人の姿や個々の遊びに注意を向けるという多面的な状況判断が求められているといえます。

これらは記録することによって、幼児理解への意識を高め、判断することが可能になります。経験豊かな教師の中には、いくつもの遊びの状態や何人もの幼児の状況を的確に理解している人もいます。教師は、持続的に記録し、それを読み返すことによって、幼児の行動の傾向を把握し、直接幼児に関わらなくても、言動の展開を予測することができるのです。保育の空間全体を視野に入れつつ、幼児一人一人あるいはグループの活動の状況を捉え記録を続け、それを読み返すことによって幼児を理解する力は高まっていきます（様々な記録の方法については第2章を参照）。

また、ただ記録するだけでは次の保育には反映されません。記録を読み返したり、他の教師と話し合ったりすることによって、幼児の発達やその課題を理解することができます。その際、幼児の姿をより深く捉えるために、様々な状況から読み取ることが大切です（その際の視点については第2章3節参照）。

（2）幼児理解を基に次の保育を構想するために

幼稚園における保育とは、本来、一人一人の幼児が教師や多くの幼児たちとの集団生活の中で、周囲の環境と関わり、発達に必要な経験を自ら得ていけるように援助する営みです。望ましいと思われる生活を教師が一方的に構想すれば、それは幼児にふさわしい生活とはならないでしょう。これまでの幼児の行動を振り返り、その延長上に幼児一人一人の次の活動を予測することによって、教師は環境をあらかじめ構成したり、幼児の活動の展開に伴って再構成したりすることが可能となります。予測するための手掛かりの多くは日々の記録から得られるでしょう。日々の記録は幼児理解を

深め、幼児に即した指導計画を作成するための根拠です。以下ではその考え方について述べていくことにします（具体的な例は第3章参照）。

保育の過程は循環しており、その起点となるのは幼児理解です。幼児理解に基づいて、教師は指導計画を立て、保育を展開します。では、どのような視点で幼児を理解すれば、指導計画のねらいや内容の設定、環境の構成などにつながるのでしょうか。幼児の年齢や時期によって異なりますが、次のような点が挙げられます。

- ・ 幼児の言動から、遊びの何に面白さを感じているのかを読み取る
- ・ そこで人やものとどのような関係を結んでいるのかを理解するとともに、課題も見いだす
- ・ その課題を乗り越えるためにどのような経験が必要なのかを考える
- ・ その経験を満たす可能性のある環境（遊び・活動を含む）は何かを考え、教師の場に応じた役割を考える（仲間になって動く、環境を提案・提示する等）
- ・ 結果として遊びや幼児一人一人の状態がどのように変化するのを見る

このような記録によって、教師は保育の過程を意識するようになり、幼児の実態に即した適切な環境を計画的に構成するようになります（記録から指導の過程の評価や指導計画の改善への生かし方等については第3章2節（1）～（3）参照）。

（3）教師と幼児との関係を省察し、教師自身の幼児の見方を振り返るために

よく「幼児のありのままの姿を理解する」と言いますが、理解とは幼児の言動からその意味を解釈することですから、そこには教師のもつ幼児観や教育観が反映されます。その意味で記録は教師の幼児観や教育観を改めて自覚するためのものでもあるといえます。以下では、具体的な記録を通して考えてみます。

ここで取り上げる記録は、ある教師の1年目（記録1）と5年目（記録2）の同じ入園直後の記録です。幼児の姿の捉え方の違いは、教師の見方の違いであることが分かる例です。

記録1 (1年目の教師の記録) 入園式当日

入園式の最中に泣いて親から離れられない幼児はいなかった①。10時40分頃「お母さんはまだ」と言う幼児が2、3名出てきた。親が園内のほかの場所にいるということで安定を保っている様子。月曜日からは親から離れるので泣く子が出てくることが予想される。

記録1を見ると、入園初日なのに、幼児と出会って教師が感じたことは全く触れられていません。「親から離れられたか」「泣いたかどうか」(下線①)の点のみで、幼児のことについて書かれていません。幼児が泣いたら、その幼児に対して個別の対応が求められ、全体を把握できなくなるという思いが強かったのでしょうか。教師の意識は学級全体の把握にあったようです。幼児の側に視点を移し、「泣く」ことの意味を探ろうとする視点をもつゆとりはなかったと推察できます。初めて担任をする初日の不安や喜びなども全く記されていません。ここには示していませんが、入園式から5日後の記録にも、教師として感じたことは記述されていませんでした。幼児が持ち物の始末をできるようになったかどうかや、「コーナーからコーナーへ移る幼児が減った」など、幼児の表面的な行動を捉え、その内面までは理解できていないようです。

次に5年目の教師の記録2を見てみましょう。入園直後といえば、どの園でもどの学級でも幼児の状態はほぼ同じであることが想像できますが、教師1年目の記録とは記述の仕方が異なっています。

記録2 (5年目の教師の記録)

記録2-① 入園式翌日

Y児が母親から離されて大泣きをする姿を見て、これで本当に本人にとってよいことなのか疑問に思った②これまで母親に密着して生きてきた幼児を無理やり引き離すのではなく、自分から離れられる状態をつくらなければ③ならないだろう。ただし、Y児の育ちを待っていると時間がかかり過ぎるだろうから、どこかで大丈夫と見極めていかなければならないだろうが④。

ここでは、まず母親から無理に引き離した自分の行為を振り返って反省し(下線②)、母親から「離す」のではなく、幼児が自分から母親と「離れる」という状態になることが大切だと書かれています(下線③)。記述は短く、Y児の気持ちを十分に

くみ取って記述しているとはいえませんが、その幼児にとっての「泣く」意味の大きさを捉えようとしている点で、記録1の理解とは明らかに異なります。

「泣く」姿を肯定的に捉える一方で、Y児が母親から離れて自ら園生活を楽しむようになる姿を想定し、どうきっかけをつかむかが今後の援助のポイントであると予測もしています（下線④）。同じ「泣く」という行為に注目しながら、この記述の中には幼児の内的課題を理解しようとする視点が含まれています。入園式から4日後の記録からも同様の視点を読み取ることができます。

記録2-② 入園から4日目

ロッカーの位置が分かってきたために、安心して登園してすぐの生活行動がとれるようになってきた。自分のとるべき行動が分かるというのは、何と大切なことか⑤。

今日は大部分の幼児の気分がほぐれてきた様子で、男児の中には、後半、ふざけて集合時にも教師の話を聞こうとしない幼児もいた。積み木をけとばしてケタケタ笑う遊びである。仲間がいるからこそ生まれた名もない遊び。友達への関心の高まりの表れである⑥。

記録2-②では、持ち物の始末への不安がなくなることが園への安心感の大きな要素であることを、「何と大切なことか」（下線⑤）と記しています。幼児の姿から教師が学んでいることを率直に表しています。幼児との出会いを新鮮に感じ、その幼児の気持ちに寄り添って理解しようとしています。新しい幼児を迎え、教師も新しい気持ちで幼児と向き合い、自分の行為を相対的に振り返ろうとしているのでしょう。それで、積み木をけとばしてケタケタ笑う遊びを「名もない遊び」として肯定的に受け止めることができるのでしょう（下線⑥）。

入園直後という特別な時期において、幼児は同じように期待と不安を抱えて登園してきていたのでしょう。記録1と記録2に違いがあるとしたら、それは幼児の状態が異なるのではなく、教師自身の見方の違いといえるでしょう。幼児を理解するとは、理解しようとしている側の見方と切り離すことはできません。教師は幼児と関わりながら、幼児にとってそのことの意味を解釈しなければなりません。記録すること自体が目的になるのではなく、後から読み返し、自分自身の保育について評価し、次に生かすことが大切です。

(4) 他の教師と情報を共有し、自分の保育を見直すために

記録から評価の視点に気付き、自分自身の指導を省察しようとするならば、記録を読み返すことが重要です。読み返すことによって記録に反映されている自分の「見方」を知ることができます。

自分の見方を広げるためには、同僚との話し合いが有効です。教師同士は連携して保育に当たることが基本ですが、日常的に互いの保育の様子を見合うことはなかなかできないものです。記録は保育の場での出来事を後から話し合うための情報となります。複数の教師が一人の幼児、あるいは一つの場面の記録を検討することによって、担任教師一人では分からなかった幼児の気持ちや行動の意味を理解することができます。また、園全体で保育の質の向上と改善に向けて取り組む上で、複数の教師で記録を見たり書いたりすることが重要です。

教師の年齢構成の幅が広い園では、話し合いが活性化しないという問題を抱えていることがあります。経験年数の少ない教師が、話し合いの場でなかなか発言しにくいということもあります。それでは保育をよくするためにはどのような話し合いが必要なのでしょう。その解決のポイントが記録です。

保育は、一過性の現象で再現することはできません。しかし「記録を取る」ことによって、その瞬間の出来事を意識化させることができます。記録を書くこと自体が省察です。その記録について話し合うことによって、何を話せば自分の保育に還元されるのかが明確になります。教師の協働する力を高め、風通しのよい話し合いが行われる風土を園の中に醸成することは、何よりも幼児の成長や発達にとって重要です（そのための様々な工夫については第3章2節（5）参照）。

(5) 幼児の学びの軌跡を残し、保護者との連携に生かすために

遊びの中での体験を捉えるということは、幼児の学びの過程を捉えるということにほかなりません。日々の遊びや生活の記録は、過去から現在へ、そして未来へと幼児の発達や学びを連続的に捉えることを可能にします。

こうした幼児の学びの過程に関する捉えを通して保護者との連携を十分に図り、保護者の幼児期の教育に関する理解が深まるようにする必要があります。現代の子育て環境の下で保護者の子育てに関する不安は強くなっていると言われていています。幼稚園

教育や幼児への関わり方について、教師にとっては当たり前になっていることでも、保護者にとっては不安の材料であることもあります。例えば、教師は新入園児を迎えると徐々に園生活に慣れてほしいと準備します。しかし、保護者は入園してすぐに園生活に慣れ、友達ができてほしいという期待から、園の環境になかなか慣れない幼児の様子に不安を感じている場合もあります。こういった場合、保育や幼児の様子を伝え、幼児の成長を保護者と教師とで共有することによって幼児理解が広がり、不安が軽減されることもあります。その際、保育や幼児の様子を保護者に伝える手段として写真や動画などの様々な媒体を利用することが有効です。

園の遊びや生活の様子を伝えるための記録は、幼児、教師、保護者の間の学びをつなぐ手段として活用できるものです（具体的な実践例については第3章2節参照）。

次章以降は、各園で実践を進めるための手掛かりとなる具体的な事例を紹介します。記録することと、記録から読み取ることとは一体で分かち難い関係です。どの事例も単なる記録の書き方にとどまらず、それを読み取り、どのように保育に生かしていったかまでを含めた構成になっています。

第2章

実践者のための 記録の実際

1. 記録を書いてみよう

記録の方法や形式等に決まったものはありません。まずは、自分が知りたいと思ったこと、印象に残ったこと、なぜだろうと疑問に思ったことを書き留めてみることから始めましょう。

例えば、最初は「○ちゃんは、今日も泣いて母親から離れられなかった」「○ちゃんは、今日は○○ちゃんと一緒にブロックを使って遊んでいた」など、幼児の行為を書くことで精一杯でしょう。こうした印象に残った幼児の行為を書く過程で、教師の問題意識がはっきりし、更に幼児の内面をよく見ようとするようになります。また、書き続けることによって、今まで気付かなかったことが見いだせるようになります。

ここでは、最初は何をどう書けばいいのか分からなかったS教師が先輩の助言を得て遊びの記録を取ってみようになった事例、気になっていた一人の幼児の記録を続けて書いてみたA教師の事例、日々保育をしながら週日案に記録の形式を工夫したT教師の事例を紹介します。

事例1 遊びの記録を書いてみよう

S教師は、採用当初、先輩の教師から「記録を書きましょう」と言われたのですが、何をどう書くのかが分からずに困っていました。先輩の教師から、「積み木の遊びが面白いよ」とアドバイスを受けて書いたのが次の記録です。当時S教師は、「面白い」と言われている幼児の姿が見えませんでした。進級当初から数人が続けて遊んでいる積み木の遊びをよく見るようにし、保育後、積み木で立体ボウリングを作っている遊びの記録を書いてみました。S教師は、記録を書きながら、自分が気付いたことや面白いと思ったことを記録用紙の右側にメモしました。

< S 教師の積み木遊びの記録 >

5 歳児 4 月 立体ボウリングの遊び

K 児と Y 児は保育室の中央付近に積み木を組み始めた。
T 児も加わり、前日より高い 6 段の坂を組み立てた。幼
児の背丈よりも高くなったので、最上段の発射台の足場も
設置した。崩れそうだったので、ガムテープで補強するこ
とを提案した。幼児たちだけであつという間に組み上げた。

その坂から転がす物は、色水遊びで作った色水の入った
ペットボトル。牛乳パックやティッシュの箱がピンとなっ
た。全員でカウントダウンをして転がすルールも生まれた。
更に他の幼児も加わる。場所を広く取った分、遊びの規模
もダイナミックに展開していった。

しかし、坂が急な角度で長くなった上、その幅はペット
ボトルと同じ長さしかないため、ペットボトルがうまく転
がってピンを倒すのが難しくなった。教師の「ここにぶつ
かってしまった」という言葉をきっかけに積み木の構造に
も意識が向き始める。

障害物を作ってジャンプさせるなど、それぞれがアイデ
アを出し合う。T 児が平らな板を坂の途中に設置し、転が
るラインを緩やかにすることでよりスムーズな転がり方
になることを思い付く。

……………中略……………

最終的には、ピンである牛乳パックを近付けることで、ほ
ぼイメージ通りの立体ボウリングが完成した。

メモ

(教師の気付いたこと)

- ・ 5 歳児たちの力はすごい！発射台を作るという目的をもって、皆であつという間に作った。
- ・ カウントダウンも遊びのルールだ。
- ・ 教師の言葉がきっかけで幼児たちはピンを倒すことより、いかに坂をうまく転がせるか、つまり坂の設計に集中していった。
- ・ 幼児たちはよく考えたり試したりして遊んでいる。すごいと思った。

S 教師は、一つの遊びをよく見て記録を書いていく過程で、幼児が様々な力を発揮して遊んでいることに気づき、「5 歳児たちの力はすごい」と実感しました。また、教師自身の言葉や関わりによって遊びが変化していったことにも気づきました。S 教師は記録を書くことで、幼児の姿からいろいろな発見が読み取れること、その面白さを感じ、記録をする意味が分かったのです。

事例2 一人の幼児を追って書いてみよう

入園当初、A教師は、活発に動く幼児や教師に関わりを求めてくる幼児の対応に追われ、学級全員の幼児を把握できないでいました。特に自分から行動を起こさず表情の乏しいN児の様子はなかなか目に入らず、何をしているのかが分からず気になっていました。

そこで、これまで関わりをもてなかったN児を追って丁寧に記録してみることにしました。N児は何を感じているのだろうか、どのような関わりが必要なのだろうかなど、N児をよく知りたいと思って記録しました。

< A教師の4歳児 (N児) 記録 >

4月入園当初のN児

入園当初、N児は、遠くを見ていたり、テラスを移動しながら友達遊びをぼんやりと見ていたりすることが多かった。毎日保育室とテラスを行ったり来たりして遊びを見ているN児。自分から行動を起こさず表情の乏しい子で気になった。N児は時折遠くを見つめるような目や考えるような表情をする。きっと何か自分の思いがあるのだろうが、ありのままの自分を出せないのではないだろうか。

5月初旬のN児

さっきまで保育室の中ほどに立っていたN児が、気が付くとテラスにいた。砂場の方を見ている。砂場にいた私(教師)はN児を見て手を振り、「N君」と声を掛けた。N児は戸惑ったような表情で下を向く。

積み木と砂場が気になっているようだ。教師を追っているようにも思われる。でも直接言葉を掛けると戸惑う様子。自分のペースがあるようだ。

今のN児には、自分のペースで周囲を見ることのできる状況が必要なかもしれない。教師や友達と遊んでいる様子が見える場所にいることで安定するのもかもしれない。遊びに誘うことを焦らず、N児が自分で遊び出すきっかけをよく見ていこう。

5月下旬のN児

14～15人の幼児が砂場で遊んでいる。N児は砂場の枠の方を向いて、1人でカップに手で砂を詰めている。教師が他の幼児の作った砂のごちそうを「おいしいね」と言って食べるしぐさをしていると、N児がそばに来て、「見て」と砂をカップから地面の上に出して見せる。砂の詰め方が弱く、型は崩れる。教師が「プリンかな？」と言い、食べるまねをすると、N児は「ゼリー」と答える。そして、自分の場所に戻ってはカップに砂を詰めて教師のところに持ってくる。4～5回繰り返し、「今度はきれいにできた」と言う。教師に自分のしていることを見てもらい、認めてもらうことでだんだん自分の動きが出せるようになってきた。興味をもったことを繰り返すことができる場所と道具、受け止めてくれる教師が必要だと感じた。

A教師は、気になっていた一人の幼児をよく見て記録することにより、幼児の心の動きや、興味のある遊び、他の幼児との関係を読み解くようになっていきます。記録する前には、「N児は友達の遊びをぼんやり見ているだけで自分から行動を起こさない子」とマイナスの印象をもっていました。5月の記録では「(N児の)ペースで周囲を見ることのできる状況が必要なかもしれない。先生や友達の遊んでいる様子が見える場所にいることで安定するのかもしれない。遊びに誘うことを焦らず、N児が自分で遊び出すきっかけをよく見ていこう」と肯定的な見方をするようになっていきます。5月下旬の記録では「教師に自分のしていることを見てもらい、認めてもらうことでだんだん自分の動きが出せるようになってきた。興味をもったことを繰り返すことができる場所と道具、受け止めてくれる教師が必要だと感じた」と記し、N児の興味のある遊びや場所を理解するようになっていきます。

このように一人の幼児を追って記録することによって、幼児理解が深まります。印象による幼児理解から事実に基づいた幼児理解へと教師の見方が広がっています。この幼児理解に基づいて、教師は指導の方向を見い出すことができるようになっていくのです。

事例3 1日の記録を書いてみよう

本事例は、保育経験2年目のT教師の記録です。保育は少しずつ楽しくなってきたおり、明日の保育のポイントや環境の構成について分かるようになりたいという思いをもっています。そこで、保育終了後、直ちに印象に残っている場面を1枚の図に表

して残しておくようにしました。この記録を基にして、明日の保育のポイントや環境の構成を考えるようにしました。

T教師は、まずは印象に残っている遊びの場面を書き出します。遊びに参加していた幼児の名前と様子を書き留め、教師としての思いや願いを赤字で加えていくようにしています。次に、今日1日を振り返って幼児の楽しんでいたことや明日に向けての願いや指導について考えるようにしています。

< T教師の記録 >

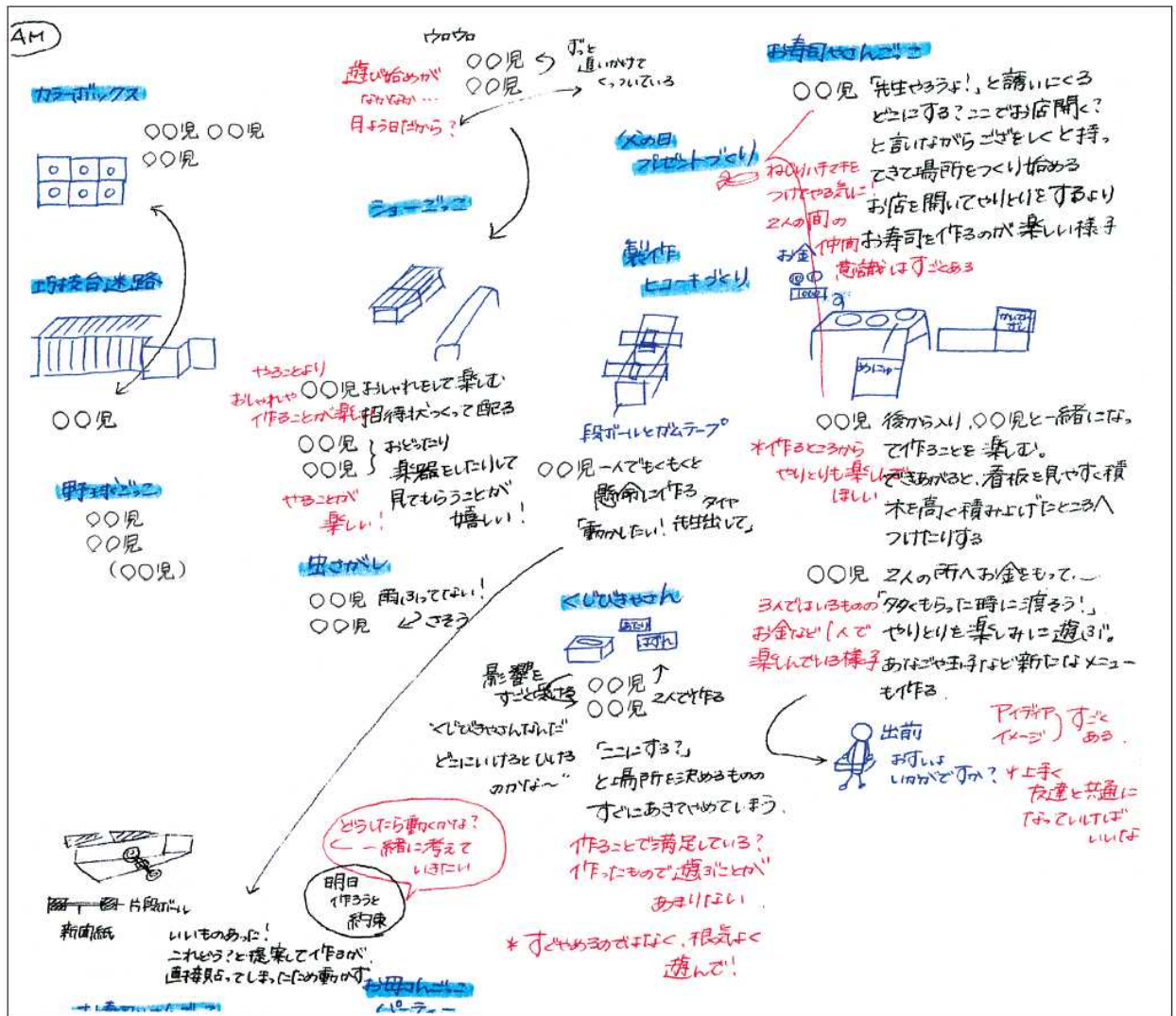
5歳児 6月9日の記録

①印象に残ったことを1枚の用紙に書き出してみる。

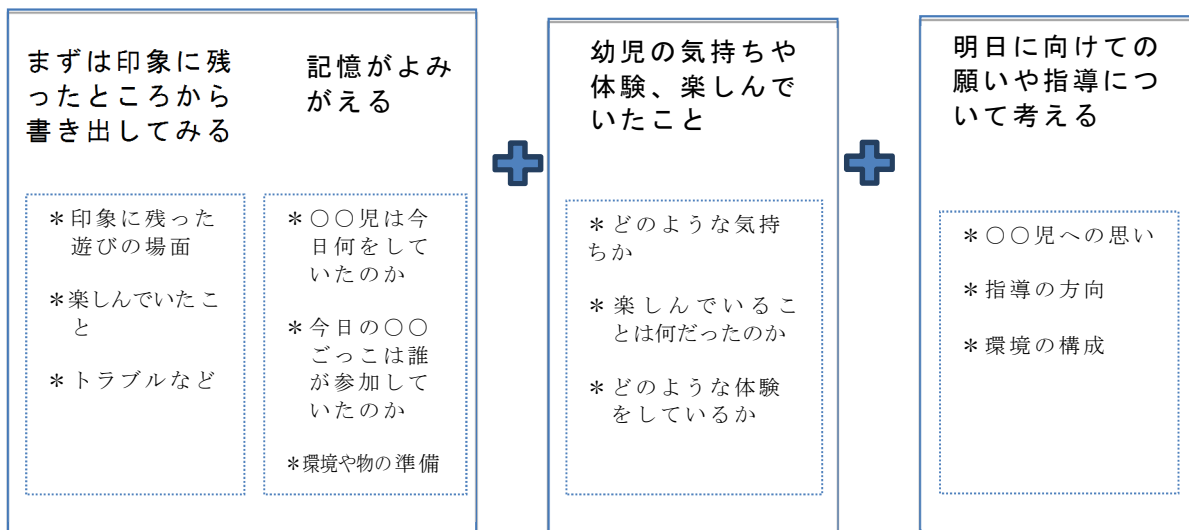
- ・今日は、月曜日ということもあってか、遊び始めるまでに少し時間がかかっていた。先週楽しんでいた遊びを思い出せるように「今日は〇〇屋さんやらないのかな？先生行きたいな」と声を掛けると、「そうだ！」と思い出して遊び始めた。

②明日に向けての願いや指導について考える。

- ・お寿司屋さんごっこのねじり鉢巻き、パーティードレスなど同じものを身に着けて遊ぶ中で、同じ物を作ったり場所を作ったりしてイメージが共有されていくことを感じ取ることができた。本物らしく作ることができるよう素材を提示していきたい。
- ・カラービニール袋を使い、自分たちで身に着けるドレスを作っていた。自由に選んで使えるように幼児たちの興味を捉えながら用意していきたい。



このように1日の保育を1枚の図に記録していくことで、個々の様子と全体の様子を同時に捉えることができます。T教師は、この記録を書くことによって、「明日の保育の流れはこうなるだろう」と予想がもてるようになり、「環境にこれを加えてみよう」「〇〇児との関わりをもてるようにしよう」などと具体的な環境の準備や指導が浮かぶようになりました。



2. 記録の取り方の実際

記録は、前項でも取り上げたように、一般的に遊びの場面や一人の幼児を追って、エピソードとして記すことが多い傾向にあります。

しかし、記録に書き残したいことは、教師の問題意識や必要感によって異なり、様々な様式が考えられます。

例えば入園当初であれば、教師は、幼児一人一人の名前を覚えて関係をもちたいと思うでしょう。そこで、その日関わった幼児のことを名簿に記録しておくという方法をとることがあります。次第に幼児が好きな場所や遊びを見つけて遊び始めると、どこで誰がどのような遊びを展開しているのか、学級の中で全体の幼児の遊びの様子を把握する必要が出てくるでしょう。それには、園の環境図に遊びの場所やメンバー等を書き入れ、空間的に把握する記録が有効です。保育の計画と関連付けて日案や週案に記録する教師も多くいます。一定の枠組みを決めて、場面ごとに記録しておく方法もあります。写真やビデオを使って記録し、保護者や地域に説明する手法も多くとられています。

また、行事の流れの記録、小学校以降の指導や外部に対する証明の原簿となる幼稚園幼児指導要録、幼児の作品を残して成長の軌跡を追う記録などもあります。さらに、保育を評価し改善していく上では、保育をする当事者が取る記録だけではなく、公開保育の際の互いに記録を取って話し合う第三者記録やビデオカンファレンスも有効です。

記録には、幼児の姿を残しておくとともに、教師の関わりや環境を記録しておくことが重要です。幼児の姿は教師の関わりに大きく影響されていることから、教師の関わりを記録しておくことは、指導の評価において欠かせません。さらに、幼児が遊びや活動を生み出す上で大きな影響を与える環境を記録することも重要です。環境によって幼児の体験は異なります。

(1) 記録の様式と実際

幼児を理解し、自分の保育を振り返るためには、この形式で記録を取らなければならないということはありません。後で生かしやすいように様式を工夫し、保育の改善

に生かす記録の取り方を工夫しましょう。ここでは、①名簿に書き込む記録、②一定の枠組みを決めて書く記録、③日案に書き込む記録、④学級全体の遊びを空間的に捉える記録の様式と実際を紹介します。

①名簿に書き込む記録

記録1-①(38ページ)は3年保育4歳児進級当初の記録です。新しく担任になったK教師は、まず一人一人の幼児を把握したいと思い、名簿枠を作成し、その日印象に残ったことを一言書き入れておくことにしました。この記録は、入園当初など、個別の幼児の行動の特徴を捉えるときに有効です。

K教師は、保育の後、今日の幼児の姿を思い出しながら、どこで何をしていたかを記録しています。一言書くことで、「この子は明日も砂場で遊ぶだろうか」など、明日の幼児の行動の予測をもつことができます。また「明日は今日関われなかった幼児をよく見よう」「登園のとき声を掛けてみよう」など、明日の保育の具体的な構想につながります。空欄もありますが、それは「今日は何をしていたか捉えられなかった。明日はこの幼児をよく見よう」と自分の保育を振り返り、明日の保育につなげています。

<記録1-①の特徴>

- ・入園当初の一人一人の幼児の行動が分かる。
- ・教師は誰を見て誰をよく見ていなかったのか自覚できる。
- ・幼児の明日の行動の予測をもつことができる。

しばらくすると、K教師は、幼児の変化を記録しておきたいと思うようになりました。記録1-②は、1週間を通して個人記録を書き、読み返せるように工夫したものです。続けて記録することによって、一人一人の特性や育ちつつある姿を、教師や友達、環境と関係付けながら捉えるようになっていきます。読み返すことによって、書いていない日の行動も環境との関わりをもっていたことが予想されます。

< 記録 1 - ② の特徴 >

- ・ 週で捉えると、日の記録では捉えられないその幼児の印象が浮かんでくる。
- ・ 一人一人の幼児の遊びの推移が分かる。
- ・ 1週間を通してみると、幼児一人一人の特性を教師や友達、環境と関係付けながら捉えることができる。

記録 1 - ①

4月10日(木)

幼児名	幼児名	幼児名	幼児名	幼児名	幼児名
初めは道具を出して遊ぶ(作り物)①に「10個作る作(作る)」と言った下の子、一緒に作る。真鍮は取り組んだ子の厚さと同じで作る。	〇〇と一緒に砂場を掘って遊ぶ。温泉をイロイロと書く。	内→外の子まじりから、裏山の子より遊びへ移行する。		〇〇〇〇と一緒に、Lマジの本に没頭。後半、積木に移るが、井型ブロックを捨てた。	〇〇と一緒にコマを回して遊ぶ。①は〇〇の言葉の話を聞いて積木遊びに移る。その後、Lマジと迷路で遊ぶ。
幼児名	幼児名	幼児名	幼児名	幼児名	幼児名
まじり。まじり落ちてから遊び始める感じ。マクドナルドはじり。		まじりを中心にして遊びに出る。赤いスカートがお気に入り。製作コーナーの飾り作り。スティック作り。	マクドナルドを使い、コースを作る遊び。	自分の興味は何かに集中して取り組む。①の言うことを軽く流す。 ・マクドナルド ・平長の絵。	〇〇と一緒に積木のコースで遊ぶ。インストラクターの方から持ってくる。片付けを楽しむ。
幼児名	幼児名	幼児名	幼児名	幼児名	幼児名
自分で道具を出して、家を作る。ビニールテープで囲う。		室内の子まじりから砂場→裏山へ出ていく。	〇〇と一緒に作り物を作る。型は木片で作る。ひしこ遊びと物を作る。水を弄んで遊ぶ。		
幼児名	幼児名	幼児名	幼児名	幼児名	幼児名
	〇〇と一緒に夕焼けを飾る。積木を積む。〇〇が主導権。2人でいることで競争をつけている。	電車の車、井型で遊ぶ。遊ぶときは必ず着ている。集まる時は1人で遊ぶ。井型で遊ぶ。		〇〇と一緒に夕焼けを飾る。①とのやり取りが中心。自分の方が主導権を握る。	電車の車と井型板で遊ぶ。遊ぶときは必ず着ている。井型で遊ぶ。井型で遊ぶ。
幼児名	幼児名	幼児名			
小1位の女の子が、女の子のグループ。砂場を遊ぶ。	〇〇と一緒に作り物を作る。型は木片で作る。ひしこ遊びと物を作る。水を弄んで遊ぶ。	砂場の温泉を掘って遊ぶ。深い穴を掘る。			

片付けの積木の並べ方が昨日と違って今日にはじり。今日今日のはじり。今日今日のはじり。今日今日のはじり。

記録 1 - ②

	A 児	B 児	C 児	D 児	E 児
4 月 21 日 (月)	登園してきて、もも組のままごとコーナーで遊び始める。もも組の教師の作ったアイスクリームに興味を示し、遊ぶ。ゆり組に帰ってから、F・Gが遊んでいたレストランの席にHと一緒に座っている。何となく一緒にいることはあるが、一緒に遊んでいるという感じではない。人形のユーリに興味を示す。	アスレチックで遊ぶ。高いところから飛び降りようとしていたので注意する。	積み木が他児に使われていると、「椅子の積み木で作る」と言い、椅子を並べてぬいぐるみを寝かせる。後半、空き箱で猫を作り、散歩をさせる。	ままごとコーナーで紙を丸めた料理の作り方を教える。が、続かず。難しかった。	菓子箱をつなげて電車に見立てた遊び。ただつなげただけなので、もも組のイメージをもつようにつなげて色を着けたり、タイヤを付けたりするなどの案を提案していきたい。
4 月 22 日 (火)	…… (略) ……	…… (略) ……	…… (略) ……	…… (略) ……	…… (略) ……
4 月 23 日 (水)	…… (略) ……	…… (略) ……	…… (略) ……	…… (略) ……	…… (略) ……
4 月 24 日 (木)	教師と一緒に弁当作ってピクニックに行くなど、教師が自分の動きをまねたりして楽しんでいる。特に牛乳を飲むという動きが気に入っている。コブランの中庭に移したことでI・J・Kも入って一緒に遊ぶことができた。教師が関わって他児が関わりやすくなる。		ジャングルジムでままごとをして遊ぶ。砂場の周りに遊びの拠点を移すことで、安定して遊びを続けていた。	朝、教師が提案していたこいのぼり作りに興味を示し、ひとまず取り組んでみる。教師と同じように作るのではなく、自分なりに切り付けたり貼り付けたりしていき、終わると、砂場を今日も川を作りたといっていて自分で砂場を開け始める。それを見て、E・Oも仲間に入るのを見て、他児も裸足になる。	Dが砂場で遊び始めたのを見て、仲間に入ってくる。川を作る。巧技台でジャンプをして遊ぶ場面でも何回も跳んでいた。
4 月 25 日 (金)	教師の援助でこいのぼりを作り始める。別の教師が引き継ぐが、途中他の幼児に関わっているのをやめてしまう。自分で作るのには難しかったようだ。			登園してからいつものレストラン作りを始める。自分で教材室から道具を持ってきて始めようとする。積み木をどんどん自分で組んでいく。	登園してからすぐこいのぼりを作り始める。
1 週間を 通して	ままごとコーナー、教師、学生といることで安定して過ごしている。24日のピクニックでは、製作物の食材で自分なりにお弁当を作ったり楽しんでいた。教師が皆から見えるところでAと関わりをもつことで周囲の幼児もAに関わりをもつチャンスになっている。	Fたちと一緒に行動することで安定している。新しい環境にも慣れてきているようで、どこに行けば何があるかはだいたい分かっている。アスレチックやジャングルジム、砂場など戸外で遊ぶことが多く移動も激しいので見落としがちになっている。	L・M・Nと一緒にままごとやおしりごしをしたり、教師が興味をもつ。教師の意図を取って行動し見られる。	前日の経験や、楽しいと感じたことを繰り返したり、自分で遊ぶ場所を作ったりして、集中して遊びに取り組んでいる。	牛乳パックをつなげて電車を作ることが多い。長いことなぐこいというのを見て、家庭訪問か家庭訪問か、電車はかたや、手を加え幅をたせたい。

②一定の枠組みを決めて書く記録

欲しい情報を得る手掛かりとして活用できるように、記録の様式を工夫し、目的に応じて一定の枠組みを決めて書くという方法があります。

幼児の思考力の芽生えを培う環境について研究を進めている園では、記録2のように、枠組みを工夫して記録を取っています。記録2では、事例の欄に、幼児と環境との関わり及び教師の関わりを丁寧に記録しています。言葉、行為など、事例中の具体的な指導内容を右欄で解説し、中段に指導計画、下段では考察という枠組みを取っています。

どの教師も同じ形式で記録し、それらを指導内容や環境、教師の援助を考える際のデータとして（コンピュータで）管理することで教師間で情報を共有でき、広くデータベースとして活用することも可能です。

<この記録の特徴>

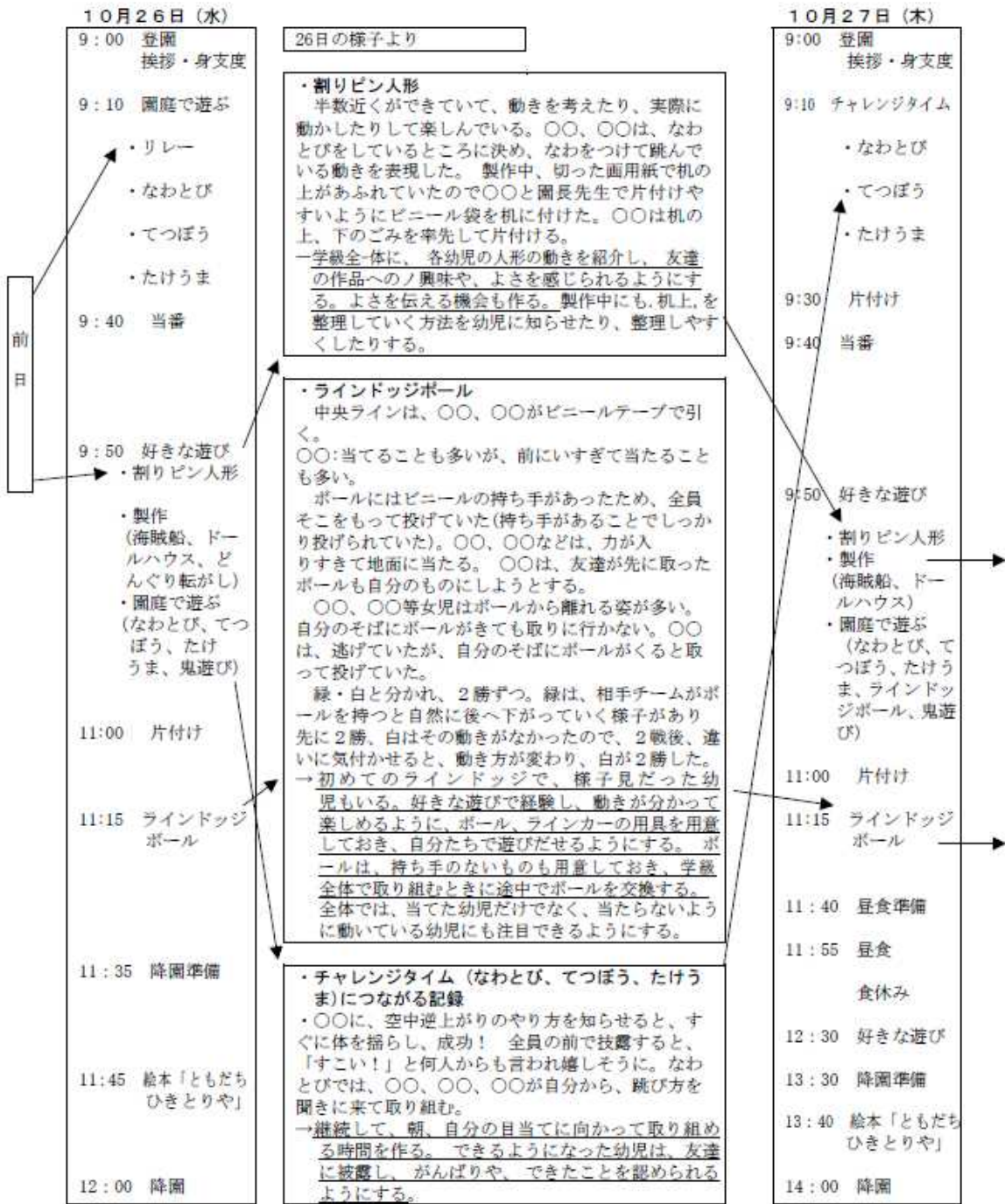
- ・テーマに応じて欲しい情報を得る手掛かりとして活用できる。
- ・環境との関わりを丁寧に記録することで、幼児が遊びの中で何に興味をもっているのか、何を体験しているのかを理解することができる。
- ・教師との関わりを丁寧に記録することで、幼児と教師の双方向性を大切にしながら環境の構成と援助を工夫することができる。
- ・記録を重ねることによって、幼児の発達と教師の指導を検討するデータベースとして活用できる。

記録 2

平成 23 年 5 月 13 日	2 年保育 4 歳児	記録者 ()
「たまご? うんち?」		
<p>事例</p> <p>教師は、子どもたちと一緒にアオムシの様子を見に行った。子どもたちが、アオムシの下に緑色の粒が落ちているのを見付け、「これはなんだろう?」「うんちじゃ」「たまごだと思う」「くさいからうんちだよ」「くさいたまごじゃないの」「緑色だからたまごだよ」と、口々に自分の考えを言い合う。うんちとたまごの意見に分かれた。「これはなんだろうね。たまごかな、うんちかな」と教師もどちらか分からないという答えをする①。</p> <p>「キャベツを食べている下に落ちているから、うんちだと思う」とT児。「たまごだよ。ここから生まれて、上に登っていったんだよ」とH児。そんな話を続けながら、しばらくアオムシを観察していた。すると、アオムシのおしりから緑色の粒がポロっと落ちた。その瞬間を、H児は見ていた。教師とH児は目を見合わせた。「今の見た!？」と教師②。</p> <p>「うん! おしりから、出てきた! これは、うんちだったんだ! 私はたまごだと思っていたけど、違っていた! うんちだ!」とH児が興奮気味に話した。H児は笑顔で、とても嬉しそうだった。その後も、登園するとすぐにアオムシの様子を見に行く日が続いた。</p> <p>(4 歳児 5 月の指導計画より一部抜粋)</p>	<p>指導内容</p> <p>①教師が分からないという立場を取ることで、なお一層、子どもたち同士で活発な意見が交わされるのではないかと期待した。</p> <p>*興味や関心や理解を探る。</p> <p>②おしりから緑色の粒が出る瞬間を見ることができた喜びと興奮を分かち合いたいという気持ちだった。</p> <p>*子供の思いに共感する。</p> <p>*遊びの仲間となって楽しむ。</p> <p>*体験で得たものを共有する。</p>	
<p>指導のねらい</p> <p>○新緑の美しさやそよぐ風の心地よさを味わい、身の回りの自然に親しみをもって関わり大切にしようとする。</p> <p>○友達や教師と関わって遊ぶ楽しさを味わう。</p> <p>指導内容</p> <p>○存分に身体を動かそうとしたり身の回りの自然に親しみをもって関わったり大切にしようとする。</p> <p>・草花遊びや虫探しを楽しみながら、それらに愛情をもって大切にしようとするようになる。</p> <p>指導の内容や留意点</p> <p>○戸外で存分に身体を動かして遊ぶ楽しさを共に感じながら、身の回りの自然に親しみをもって関わろうとしたり大切にしようとするように援助する。</p> <p>・草花や虫の命を大切に考えられるように、一緒に活動する中で教師の思いや願いを伝えたり一緒に考えたりしていく。</p> <p>・サツキやシロツメクサなど、見て楽しんだり一緒に草花遊びなどをして遊んだりしながら、この時期の自然に親しめるようにする。</p>		
<p>考察</p> <p>最初に私が「うんちだよ」と子どもたちに教えていたら、この出来事はなかったと思う。本当は、もう少しで言いそうになった。しかし、このまま子どもたちはどうしていくのだろうという思いから、このときは言わずに経過を見守ることにした。</p> <p>H児は、アオムシの下に緑色の粒が落ちていることに気付いた。そして、粒のにおいや落ちている場所から、自分なりの仮説を立ててたまごだと考えていた。友達のうんちだという意見を聞いても、たまごだという考えは変わらなかった。緑色の粒がおしりから落ちる瞬間を見たとき、H児はそれをうんちだと認識した。自分が考えていたのとは違う答えだ。しかし、自分の考えが覆されても、H児はその瞬間が見えたことを喜び、うんちだと分かったことが嬉しそうだった。</p> <p>子どもたちと、新しい発見をした感動を共有することができた。また、緑の粒の形や色を見て、その正体を「こうだから、こう思う」と推論することや、そのことを友達に伝え議論することなどを、自分たちだけでしている子どもたちの力に驚いた。</p> <p>アオムシがいたキャベツは、前年度の月組の担任や子どもたちが育てたものである。新入園児が自然に目が向くようにとの願いが込められている。私は、去年畑の作物を育てた時にはここまで考えられなかった。</p> <p>まだ見ぬ子どもたちの成長を願って育てることの大切さをこの事例から学んだ。</p> <p>*感じ取ること:色、形、におい、不思議。</p> <p>*働き掛けること:観察する、比べる、話し合う。</p> <p>*見付け出すこと:生態。</p>		

③ 日案に書き込む記録

記録 3



記録3は、遊びの姿を日案に記録し、翌日の計画につなげようとした記録です。この日々の記録は、週案の計画を振り返る作業にもつながります。

<この記録の特徴>

- ・遊びのメンバーや楽しんでいる内容を連続した視点で捉えられる。
- ・同じ遊びでも、幼児によって取り組み方や楽しみ方が異なることを再確認することができる。
- ・幼児同士の関係を捉えることができる。
- ・幼児の体験のつながりを意識した保育を構想することができる。
- ・記録を翌日などの保育のねらい・内容、環境の構成・指導に生かすことができる。
- ・幼児の育ちの読み取りや計画が妥当だったのか、計画と関連付けて保育を振り返ることができる。

④学級全体の遊びを空間的に捉える記録

あらかじめ印刷された園の環境図に、どこで誰が何をして遊んでいるのか、学級の中で遊びを空間的に捉えて記録していくという方法もあります。

幼児が友達と遊ぶことを継続して楽しむようになると、記録1-①②のような個人記録よりも遊びの様子を記録することや遊び全体を把握することの必要性が出てきます。

記録を書くときには、園の環境図と翌日の指導計画を書く欄があらかじめ印刷された用紙にまとめます。教師は、保育後、記録用紙に、誰がどこでどのような遊びを展開していたのか記録しています。また、幼児が遊びの中で体験している内容も書き入れています。

最初は、幼児の名前と場所しか書けなかったり、どこで何をしていたのか思い出せない幼児がいたりします。記録を続けるうちに、次第に、誰がどこで何をして遊んでいたかなどの事実を書きながら、同時にその姿から幼児の体験していることや課題、幼児同士の関係、遊びの楽しさなど、教師が読み取ったことを記述できるようになってきます。この読み取りによって、どのような援助が必要なのかなど、援助の可能性を探ることができます。読み取りによっては援助も違ってきます。

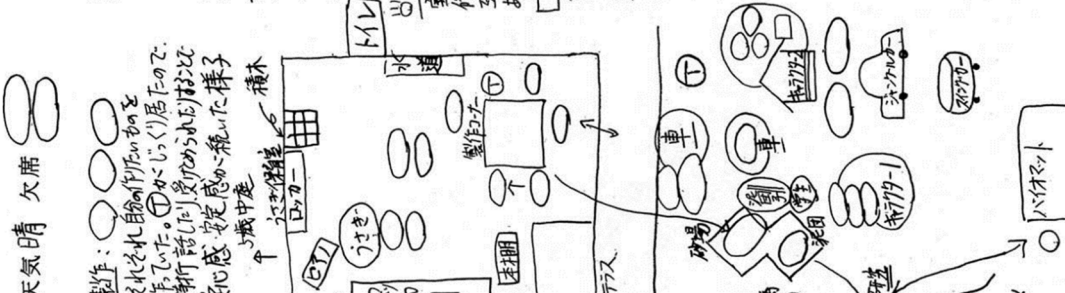
記録4は、3年保育3歳児の12月の記録です。遊んでいた幼児名と、ものや道具の使い方などの遊びの様子教師がどのように関わったか、幼児は何を楽しんでいたか等が記録されています。その上で、★教師の願いと、☆援助の方向・環境の構成を記入し、明日の保育につなげようとしています。

<この記録の特徴>

- ・どこでどのような遊びが展開されているかなど、遊び全体を空間的に捉えることができる。
- ・幼児の遊びや動きを視覚的に捉えることができる。
- ・幼児同士の関係、遊びと遊びの関係を捉えることができる。
- ・幼児の内面と遊びの方向を予測し、どのような援助が必要かを考えることができる。
- ・継続して記録することによって、遊びの広がりや人間関係の深まり、遊びを規定する環境との関係を捉えられるようになり、必要な援助を考えて保育を構想しようとするようになる。

あひる ぐみ 1/2月 9日 (木) 天気晴 欠席

＜保育室＞
 ほとんどみんなが変わらず 自由遊んで楽しんでました。
 それぞれの遊びをしながら、他見の足や使っている物を感心しながら観察していました。
 ① 紙回りにハチ切型をセロハンテープで糊付けして、箱に貼りました。
 親しい感覚で箱に貼ったので、お互いに好むものを貼りました。
 ② ①と一緒に貼りました。
 ③ ①が作った箱に、②の箱を貼りました。
 ④ ①の箱に、②の箱を貼りました。
 ⑤ ①の箱に、②の箱を貼りました。
 ⑥ ①の箱に、②の箱を貼りました。
 ⑦ ①の箱に、②の箱を貼りました。
 ⑧ ①の箱に、②の箱を貼りました。
 ⑨ ①の箱に、②の箱を貼りました。
 ⑩ ①の箱に、②の箱を貼りました。



★ 製作
 これこれの自由製作の様子
 ① ①は、自由製作の様子
 ② ②は、自由製作の様子
 ③ ③は、自由製作の様子
 ④ ④は、自由製作の様子
 ⑤ ⑤は、自由製作の様子
 ⑥ ⑥は、自由製作の様子
 ⑦ ⑦は、自由製作の様子
 ⑧ ⑧は、自由製作の様子
 ⑨ ⑨は、自由製作の様子
 ⑩ ⑩は、自由製作の様子

★ 教師の願い
 ☆ 援助の方向・環境の構成
 < 園庭 >
 ① キョウワ-1の庭
 ② キョウワ-2の庭
 ③ キョウワ-3の庭
 ④ キョウワ-4の庭
 ⑤ キョウワ-5の庭
 ⑥ キョウワ-6の庭
 ⑦ キョウワ-7の庭
 ⑧ キョウワ-8の庭
 ⑨ キョウワ-9の庭
 ⑩ キョウワ-10の庭

★ 全体の様子
 ① 全体の様子
 ② 全体の様子
 ③ 全体の様子
 ④ 全体の様子
 ⑤ 全体の様子
 ⑥ 全体の様子
 ⑦ 全体の様子
 ⑧ 全体の様子
 ⑨ 全体の様子
 ⑩ 全体の様子

★ 園庭の予定
 ① 園庭の予定
 ② 園庭の予定
 ③ 園庭の予定
 ④ 園庭の予定
 ⑤ 園庭の予定
 ⑥ 園庭の予定
 ⑦ 園庭の予定
 ⑧ 園庭の予定
 ⑨ 園庭の予定
 ⑩ 園庭の予定

★ 1/2日の予定
 ① 1/2日の予定
 ② 1/2日の予定
 ③ 1/2日の予定
 ④ 1/2日の予定
 ⑤ 1/2日の予定
 ⑥ 1/2日の予定
 ⑦ 1/2日の予定
 ⑧ 1/2日の予定
 ⑨ 1/2日の予定
 ⑩ 1/2日の予定

★ 園庭の予定
 ① 園庭の予定
 ② 園庭の予定
 ③ 園庭の予定
 ④ 園庭の予定
 ⑤ 園庭の予定
 ⑥ 園庭の予定
 ⑦ 園庭の予定
 ⑧ 園庭の予定
 ⑨ 園庭の予定
 ⑩ 園庭の予定

★ 1/2日の予定
 ① 1/2日の予定
 ② 1/2日の予定
 ③ 1/2日の予定
 ④ 1/2日の予定
 ⑤ 1/2日の予定
 ⑥ 1/2日の予定
 ⑦ 1/2日の予定
 ⑧ 1/2日の予定
 ⑨ 1/2日の予定
 ⑩ 1/2日の予定

★ 全体の様子
 ① 全体の様子
 ② 全体の様子
 ③ 全体の様子
 ④ 全体の様子
 ⑤ 全体の様子
 ⑥ 全体の様子
 ⑦ 全体の様子
 ⑧ 全体の様子
 ⑨ 全体の様子
 ⑩ 全体の様子

★ 園庭の予定
 ① 園庭の予定
 ② 園庭の予定
 ③ 園庭の予定
 ④ 園庭の予定
 ⑤ 園庭の予定
 ⑥ 園庭の予定
 ⑦ 園庭の予定
 ⑧ 園庭の予定
 ⑨ 園庭の予定
 ⑩ 園庭の予定

★ 1/2日の予定
 ① 1/2日の予定
 ② 1/2日の予定
 ③ 1/2日の予定
 ④ 1/2日の予定
 ⑤ 1/2日の予定
 ⑥ 1/2日の予定
 ⑦ 1/2日の予定
 ⑧ 1/2日の予定
 ⑨ 1/2日の予定
 ⑩ 1/2日の予定

★ 全体の様子
 ① 全体の様子
 ② 全体の様子
 ③ 全体の様子
 ④ 全体の様子
 ⑤ 全体の様子
 ⑥ 全体の様子
 ⑦ 全体の様子
 ⑧ 全体の様子
 ⑨ 全体の様子
 ⑩ 全体の様子

★ 園庭の予定
 ① 園庭の予定
 ② 園庭の予定
 ③ 園庭の予定
 ④ 園庭の予定
 ⑤ 園庭の予定
 ⑥ 園庭の予定
 ⑦ 園庭の予定
 ⑧ 園庭の予定
 ⑨ 園庭の予定
 ⑩ 園庭の予定

★ 園庭の予定
 ① 園庭の予定
 ② 園庭の予定
 ③ 園庭の予定
 ④ 園庭の予定
 ⑤ 園庭の予定
 ⑥ 園庭の予定
 ⑦ 園庭の予定
 ⑧ 園庭の予定
 ⑨ 園庭の予定
 ⑩ 園庭の予定

★ 1/2日の予定
 ① 1/2日の予定
 ② 1/2日の予定
 ③ 1/2日の予定
 ④ 1/2日の予定
 ⑤ 1/2日の予定
 ⑥ 1/2日の予定
 ⑦ 1/2日の予定
 ⑧ 1/2日の予定
 ⑨ 1/2日の予定
 ⑩ 1/2日の予定

★ 全体の様子
 ① 全体の様子
 ② 全体の様子
 ③ 全体の様子
 ④ 全体の様子
 ⑤ 全体の様子
 ⑥ 全体の様子
 ⑦ 全体の様子
 ⑧ 全体の様子
 ⑨ 全体の様子
 ⑩ 全体の様子

★ 園庭の予定
 ① 園庭の予定
 ② 園庭の予定
 ③ 園庭の予定
 ④ 園庭の予定
 ⑤ 園庭の予定
 ⑥ 園庭の予定
 ⑦ 園庭の予定
 ⑧ 園庭の予定
 ⑨ 園庭の予定
 ⑩ 園庭の予定

★ 1/2日の予定
 ① 1/2日の予定
 ② 1/2日の予定
 ③ 1/2日の予定
 ④ 1/2日の予定
 ⑤ 1/2日の予定
 ⑥ 1/2日の予定
 ⑦ 1/2日の予定
 ⑧ 1/2日の予定
 ⑨ 1/2日の予定
 ⑩ 1/2日の予定

★ 全体の様子
 ① 全体の様子
 ② 全体の様子
 ③ 全体の様子
 ④ 全体の様子
 ⑤ 全体の様子
 ⑥ 全体の様子
 ⑦ 全体の様子
 ⑧ 全体の様子
 ⑨ 全体の様子
 ⑩ 全体の様子

★ 園庭の予定
 ① 園庭の予定
 ② 園庭の予定
 ③ 園庭の予定
 ④ 園庭の予定
 ⑤ 園庭の予定
 ⑥ 園庭の予定
 ⑦ 園庭の予定
 ⑧ 園庭の予定
 ⑨ 園庭の予定
 ⑩ 園庭の予定

(2) 様々な記録の方法

最近、幼児の姿や保育の様子を写真やビデオなどの映像で残しておくことが多くなりました。幼児の表情や動き、製作物、環境、行事の様子などを残すには写真やビデオの方が、より臨場感があります。これらは、教師が日常の保育の記録手段として利用するだけでなく、保護者などに保育の様子を伝える有力な手段の一つになります。また、写真やビデオは、その場で記録できるという利点もあります。これらは記述に比べてはるかに多くの情報量をもち、言葉に表しにくいものもそのまま残すことができます。

例えば、その日の保育の中で残しておきたい場面をメモとして写真やビデオで撮っておくと、記憶を思い起こす助けにもなります。そのときに捉えていなかった事実が残っていることもあります。また、保育中に特定の時間や場所をビデオカメラで自動撮影すると、幼児理解や保育の振り返りに活用できます。ボイスレコーダーを教師が身に付けて、自分自身の幼児への言葉掛けを記録し、自己理解や保育の振り返りに活用することができます。

映像による記録は、特にその後の省察が重要になります。繰り返し見ることで、今まで気付かなかった新たな事象や重要な視点を発見することができます。記述することで記録が整理され、教師の記憶に残り、また次の保育への構想につながっていきます。教師の記憶の中にはそれ以前の情報が蓄積されているため、それらも合わせて記述することが可能です。

映像による記録を生かすためには、時間の流れに沿って見直したり、その場面の省察を加えたりという作業が必要になってきます。また、第三者に伝えるときには、その映像の意味を教師が付け加えなければ、その意味が伝わらないだけでなく、全く違う受け止め方をされてしまうこともあります。例えば、ある幼児が初めて皆の輪の中に入ったという保育にとって重要な場面でも、映像だけではその意味が伝わりません。そこにそれまでの経過などの記述を付け加え、幼児の変化を映像と記述で合わせて捉えることによって初めて、その場面の意味が分かります。ビデオは幼児の表情や動き、空間配置、教師の立ち位置や動きなどの、文字に表しにくい情報を記録するのに優れています。映像を手掛かりの一つとして、幼児の内面の理解や教師の意図などを省察することができます。保育の共有や改善に有効であることから、園内研修や保育カン

ファレンスに活用されることが増えてきました。(第3章2節(5)「記録を園内研修に生かす」参照)。

しかし、音声記録や映像記録は整理・保管などに労力を要します。記録の再生の際、必要な場面を取り出すのに時間がかかったり、保管をするための音声や映像の整理に手間取ったりします。保育は、幼児と教師の心の応答でもあり、重要な部分は、教師の心の動きと重なっており、文字による記録は、教師自身がいわばフィルターとなって選択し、蓄積しているものといえます。映像が全てではなく、この心の応答を含めて保育全体を捉え直すことが重要です。

日常の保育を記録する手段として、映像を利用する場合には、その特性をよく理解した上で利用し、頼り過ぎないようにすることが重要です。また、保育そのものに影響を与えない範囲で利用するという前提があることは言うまでもありません。

3. 記録からの読み取りの実際

記録には、目的に応じて様々な形式があり、記録の中には幼児の姿と教師の理解や判断、それに基づいた具体的な指導や援助などが含まれています。「記録からの読み取り」は、記録した意図や意味を改めて捉え直し、省察していく作業です。

記録からの読み取りで重要なことは、まず、幼児の姿を見つめ直し、幼児理解を更に進めることです。記録に残された幼児の行動からその意味を考え直すことや、周囲の人やものなどの環境へのその幼児の関わり、抱えている課題などを読み取っていくことです。幼児が環境に関わる姿から、幼児にとってのその環境の意味を考え直すことができます。その時期のねらいや内容を意識して、学級全体の育ちを読み取ることも可能になります。また記録を積み重ねることによって、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼児に育ちつつある資質・能力を読み取るといった、その幼児の変化や育ちを捉えることもできます。

さらに、重要なことは教師が自身の関わりを見つめ直すことです。記録を読みながら、そのとき、教師は記録時の場面の中でどのように幼児を理解・判断し、指導や援助を行ったのか、それが適切だったのか、別の関わり方はなかったのかなどを改めて考えることができます。記録から、教師のもつ感覚や感情、思いや願い、幼児観や保育観も明らかになってきます。環境の構成や保育についての新たな方向が見え、保育の評価も可能になってきます。これらを通じて、次の保育を構想でき、新たな保育へと前進していくことができます。

保育終了後に記録を作成するに当たって全てを記録することはできないため、何が書けるか、何を書くかという時点で、教師の選択が行われます。記録の内容は教師の問題意識がどこにあるかで変わってきますが、基本は教師が重要と感じたことになっていくでしょう。自己の記憶をたどって記録を書くことで、記憶から抜け落ちやすい幼児や場面などが逆に浮かび上がってくることもあります。

また、記述によって事実の整理や理解が進んでいきます。具体的には、物事が起こった順序を確かめ、誰が何をどうした、あるいはこう考えたからこう関わったなどを整理しながら記述していきます。さらに、保育中に意識していたことだけでなく、感覚的に捉えていたことや思わず行動してしまったことなどを改めて思い起こし、言葉

に表すことで、幼児理解や教師の自己理解が深まっていきます。このように記録を書くこと自体が省察であり、重要なことです。また、教師同士で記録を読み合ったり、記録を通して語り合ったりすることが、幼児理解や教師の指導への理解を多面的に進めていく機会にもなるため、記録は、園内研修や保育カンファレンスにも重要な役割を担っています。

ここでは、記録から何を読み取るかについて、いくつかの事例を基に考えていきましょう。

(1) 一人の幼児としての育ちを読み取る

本事例では、4歳児5月のM児の記録から、一人の幼児としての育ちを読み取っていきます。

M児は、他の幼稚園から転入してきました。登園することを喜び、いろいろな遊具に興味を示すものの、なかなか学級になじめず、友達と関わろうとする姿も見られませんでした。教師がM児の名前を呼ぶと返事をする但也有ありますが、自分から言葉で意志を伝えることはありませんでした。

①入園当初の記録とその読み取り

<記録 1-① 4歳児5月 年長児に誘われて動き出す>

教師の読み取り (ティーチャーズボイス)

M児は登園後、自分から遊び出すことはなく、友達の誘いにも応じず、1人で何をすることもなく過ごす日が続く。教師の問い掛けにも、時折笑顔を見せるものの、あまり反応はない。

M児にとって何が遊びのきっかけになるのか考えながら、できるだけ声を掛けたり手をつないだりし、安心感をもてるように心掛けた。しかし、教師の早くなじんでもらいたいという思いが、M児に緊張感を与えていたように思う。

そんなある日、年長児のK児が園庭で「Mちゃん一緒に遊ぼう」とM児を誘う姿が見られた。今までにはなかった異年齢児からの誘い。教師は2人の様子を目で追いながら見守った。

最近のK児は遊びの中心でいたいという思いが強く、不安定である。

M児は素直にK児を受け入れ、手をつなぎ、園庭を探検したり、K児に抱かれてウサギを見たりするなど安心して身を任せている。

一緒に遊んでくれることを願い、様子を見守る。またK児にとっても、異年齢児との関わりで、年長児としてのやさしい気持ちが発揮できる場面と捉えた。

園庭を一周した後、2人は色水コーナーに来て遊び始める。最初はK児が遊ぶ様子をそばで見ていたM児だったが、K児に「これ混ぜよって」と頼まれると一生懸命混ぜ始める。その姿に教師は嬉しくなり、思わず「Mちゃん、何作ってるの?」と尋ねたが応えることなく遊びを続けていた。この後もK児にいろいろなことを頼まれるとそれに応えようとするM児。K児と関わりながら一緒に過ごすことを楽しんでいた。

「きれいな色が出たね」などと共感する言葉掛けをすればよかったと反省する。まだ不安定な気持ちの中で遊んでおり、応える余裕がなかったのかもしれない。

この園では、保育中や保育終了後に教師が幼児の姿から読み取ったことや考えたことを、記録の横に吹き出しのような形で書き加え、これを「ティーチャーズボイス」と名付けています。教師がM児の内面と自身の関わりを振り返って記入しています。

「友達の誘いに応じる様子もなく、1人で過ごしていたM児の姿」に対して、教師は、「教師の思いが緊張感を与えていたのではないか」と読み取っています。また、『「Mちゃん、何作ってるの？」と尋ねたが応答がなかった姿」からは、「まだ不安定な気持ちの中で遊んでおり、応える余裕がなかったのかもしれない」と読み取っています。

②その後の記録と省察

この後、M児は年長児K児との関係を手掛かりにして、次第に友達関係を広げていきました。教師との信頼関係もできていく様子が記録に見られます。

<記録1-② その後のM児の記録>

*年長児とのプール遊び

K児がM児のそばに来て一緒に遊び出す。嬉しそうな声に目をやるとK児と笑顔のM児を中心に数名の女児の輪ができており、水着のスカートを持ち上げ、水の中に入るとスカートがふわっと広がる遊びを楽しんでいる。

*学級の友達と

- ・数人のグループで「なべなべそこぬけ」が始まる。すぐに2、3組のグループもまねをしだし、あちこちに遊びの輪ができる。すると、Y児がM児の手をつなぎ一緒に遊び出す。何回も繰り返し遊びを楽しんだ。
- ・Y児と一緒にアサガオをすりつぶし、色水遊びを始める。教師が「ペットボトルに入れる？」と尋ねるとうなずき、できた色水を嬉しそうに見せ合う。A児が「誰かするもの（道具）貸して」と言うと、M児がそっとすりこぎを渡し、A児と笑い合う。

*教師との関係

降園時に、M児がささやくように「サンダルがない」と教師に言ってきた。今日はサンダルを家から履いてきたため、プールのサンダルがないことに、降園時になって気付いたようだ。今まで困ったことがあっても自分から伝えてくることはなかったのだが、初めて伝えたいことを自分の言葉で表現した。

教師は、このM児の記録を通して、育ちを次のように省察しました。

○幼児同士の関わりの意味

・ K児の誘いに応じたことでM児は友達の中に入っていく糸口を見付けた。ほんのささいな幼児同士の関わりがその後の友達の関係づくりに大きく影響していると感じた。

○教師の関わりについて

・ 幼児のつくり出している場の雰囲気大切に、幼児の遊びの展開を急がず、その瞬間の楽しさに共感し、幼児の心がどう動いているのかをじっくりと見ていきたい。言葉だけがコミュニケーションではないということを強く感じた。

その後の記録からも、この誘いは2人にとって安定感を与えていくための大事なきっかけになったことが分かります。記録の読み取りは、保育中も保育終了後にも行われ、更にそれらを積み重ねていくことによって、幼児理解が深まり、保育への新たな指針を得ていることが分かります。

(2) 幼児の人間関係の育ちを捉える

教師は幼児の遊んでいる姿から、人との関わりを理解するように努めようとしています。しかし、実際の保育の中では、遊びや活動がうまくできたかどうかという結果だけに関心が向かい、幼児同士の気持ちの揺れや相手への思いなどを捉えきれず、幼児が人との関わりを築いていくプロセスや努力、嬉しさや楽しさ、葛藤などを見落としてしまうこともあります。

次の事例では、5歳児担任のA教師の保育を同僚のB教師が記録し、その記録に基づいて話し合うことで、A教師が幼児の気持ちに気付き、幼児の人との関わりの育ちを受け止め、更に援助することができた例です。

①同僚の記録から幼児の姿と自分の関わりを見直す

<記録2-① 5歳児9月 B教師による記録>

《M児を応援するI児、跳び方の見本を見せるT児》

園庭で、M児・I児・T児が跳び箱をしている。M児の跳んでいる様子を見て、T児は「止まらんと、今の調子」と声を掛けるが、M児は跳び箱の前で止まってしまう。T児は「止まらんと、タイミングよく」と言い、自分が3段の跳び箱を跳んで見せる。何回も跳んでいるうちに、M児は3段の跳び箱が跳べるようになった。M児は興奮して「見て・・・A先生、A先生・・・」と教師を呼び、跳んで見せる。教師は「すごい」と喜ぶ。I児も「Mちゃん、やったー」と喜ぶ。

4段に挑戦していたI児は、「Mちゃん、次4段に挑戦する？」と言いながら、M児を応援する。この様子を見ていたT児は、「ここでジャンプしてこうするの」とM児に見本を見せる。M児はT児の様子を見ながら何回か練習し、「できた。できた」と大声をあげる。それを見ていたI児は「すごい」と拍手をし、「先生。Mちゃんできた。すごい」と教師を呼ぶ。教師も「4段も跳べたね。すごいね」と喜ぶ。

さらに、M児は5段に挑戦する。そばで何回も見本を見せるT児は、「これで5段も跳べるといいね」と応援する。I児も自分は跳ばないで、何回も練習するM児に「頑張れ。頑張れ」と声援する。M児が5段を跳ぶと、I児とT児は「跳べたー、Mちゃん跳べたー・・・」とM児に駆け寄り、互いの手を握って喜び合う。

I児は「Mちゃんすごい。1日に3、4、5段とできたね」、T児は「すごいな。よかったな」と興奮気味に言いながら「先生に言ってくる」と教師を探す。A教師は、M児が跳べるようになったことを認め、「すごいな。頑張ったな」と言う。I児はM児のチャレンジカードにシールを貼り、何回も見ながら2人でにこにこしていた。

A教師は、M児が跳び箱を跳べるようになったことに対して「M児の努力や挑戦意欲に成長を感じ、嬉しかった」と述べました。この3人は特に仲が良いというわけではなく、最近跳び箱を一緒にするようになって、共に行動したり会話したりすることが多かった関係と担任は見ていて、T児やI児の言動がM児にとって、どのような意味があったのかはあまり捉えていませんでした。この場面を記録していたB教師は、3人の言葉から幼児の気持ちや関係を読み取り、次の3点についてA教師と話し合いました。

○周りの2人の姿をどう捉えるか

- ・ M児が5段の跳び箱を跳べたときに、T児とI児が駆け寄って喜び合っている
- ・ T児は跳び箱を跳ぶことに自信をもち、その喜びから教えるという行為になっていった。T児はM児の頑張っている姿を見て応援したり、また見本を見せたりしたことで跳べるようになったM児の姿を、自分のことのように嬉しく思っている。
- ・ I児も応援すると次々と跳べるようになったM児に感動し、自分のことのように喜び合っている。

○どのような体験をしているか

- ・ 自分なりの目的をもって繰り返し挑戦し、手応えを感じ、自信をもっている。
- ・ 友達から刺激を受けて、自分も憧れや興味をもち、友達と一緒に取り組む楽しさを感じている。
- ・ 友達の気持ちに寄り添いながら、自分のできることや知っていることを自分なりに伝えようとする。

○教師の見方や指導の方向についてどう考えるか

- ・ A教師はM児の挑戦する姿は認めている。それだけではなく、T児とI児のM児への温かな気持ちを受け止め、3人それぞれのよさと、互いに励まし合い支え合っている姿を認めることが大事ではないか。さらに、3人の様子を学級全体に伝えることで、学級集団としての育ちにつながる大切ではないか。

②読み取りを踏まえた翌日の保育

A教師はB教師の記録を読み、話し合うことを通じて、自分の指導が幼児3人の関係を捉えられず、M児への賞賛のみに終わっていたことに気付きました。そこで翌日、幼児3人の跳び箱に改めて関わってみることにしました。

<記録2-② 翌日の記録>

T児は「昨日はMちゃん、5段まで跳べるようになったんやな」とA教師に言う。「Mちゃんすごいな。どうして跳べるようになったの」とA教師が聞くと、M児は「T君に教えてもらったん。Iちゃんが応援してくれたの」と答える。A教師は「すごいな。T君が教えてくれて、Iちゃんが応援してくれて・・・素敵な3人組」と言うと、照れくさそうであった。

A教師は、帰りの会で3人が自分たちのことを報告する機会をつくった。すると、他児たちからも「ぼくも応援して」「教えてほしい」などの声が聞かれた。

A教師は、幼児3人の遊びの場に関わることで、M児が跳び箱を跳べたことだけでなく、幼児3人が喜びを共有していることを感じる事ができました。M児も幼児2人を受け止めていました。A教師は、3人の気持ちの通じ合いを嬉しく思い、帰りの会で紹介しました。そのことにより、教えたり応援したり一緒に喜んでくれたりする友達がいることやその嬉しさを、学級全体で共有することができました。

この事例では、A教師は同僚のB教師の記録をきっかけに、3人の関係を改めて見つめ直すことによって、幼児の育ちや遊びの意味を多面的に捉えることができました。教師自身の関わりの不十分さにも気づき、人との関わりの育ちを支える教師の役割も見えてきました。

また幼児の育ちについて、5歳児9月の時期に友達と一緒に取り組む体験を通して、挑戦意欲や自信が生まれること、友達の気持ちに寄り添い自分のできる方法で応援するなどの支え合いが生まれるという姿を、具体的に知ることができました。

さらに、記録や話し合いを経て、担任としての自分の気持ちも重ね、幼児の姿をしっかり受け止め、翌日の保育につなげることができました。教師が、幼児の育ちや保育を総合的に捉える力を養うためにも、記録は大きな役割を担っています。

(3) 教師の指導を振り返る

C教師は4歳児を担当しています。C教師はいつも、思い付くままいろいろな場面を記録として残してきました。改めて記録を読み返してみると、自分はどのような意図で記録を残しておきたかったのか分からなくなってしまいました。そこで、先輩の教師に相談すると、「やみくもに記録するのではなく、今日のねらいと内容に沿って、

自分が幼児の活動で一番心に残った場面を記録してみてはどうか」というアドバイスをもらいました。

①この時期のねらいと内容を考える

4歳児の6月第2週、幼児は、一緒に遊びたい友達や好きな遊びが見付かり、活発に遊ぶ姿が見られるようになっていました。C教師は、この時期のねらいと内容を次のように考えていました。

*ねらい及び内容

○気の合う友達と一緒に、自分なりのイメージに沿って遊びを楽しむ

- ・気の合う友達と砂を掘ったり盛ったりして川や山などを作る。
- ・気の合う友達と砂などでごちそう作りなどをする。
- ・自分の思いをそばにいる友達に伝える。

○先生や友達がしていることを、自分もやってみようとする

- ・自分がやっていることや作った物を友達や先生に見せる。
- ・先生や友達の楽しそうな様子を見て、自分も遊びに加わる。

②記録の中の幼児の姿と教師の関わり

E・F・G・H児4人は、一緒に遊ぶことが多く、前日も、帰りの時間まで砂場でごちそう作りをしていました。C教師は今日もごちそう作りが始まるのではないかと考え、前日使ったカップやお皿などを分類して、あらかじめ砂場のそばに準備しました。教師は、ここでの遊びがどう展開していくか気になっていたことから、この場面を記録として書いてみることにしました。

<記録3 4歳児6月>

E・F・G・H児4人が、砂場でカップや皿などに砂や水を入れてごちそうを作って遊んでいた。EとFは2人で型ぬきをしたり、砂の上にサラサラの砂や小石などで飾ったりしていた。H児はお気に入りのカップで型抜きをして、自分の前にたくさん並べていた。G児はカップに砂と水を混ぜたり皿に砂を盛ったりしていた。

しばらくすると、I児が4人のそばに来て砂遊びを始めた。今まで1人で遊ぶことが多かったI児が友達のそばで遊ぶ姿を嬉しく思い、教師は「仲間に入ってもいい？」と、幼児に

尋ねた。4人はにっこり笑みを浮かべ、顔を見合わせながら「いいよ」と言うと、すぐにF児が「これ、妹のお誕生日ケーキ」、G児が「カレーと、いちごジュース」など、教師に自分のごちそうを見せにきた。「おいしそう、食べてもいい？」と言うと、「いいよ」という明るい声が返ってきた。「うーん 甘くておいしい」「いちごのいいにおいがするね」など言いながら食べていると、4人は「食べて」と、次々にごちそうを持って来た。教師との言葉のやり取りは多いものの、幼児同士の言葉のやり取りはあまり聞かれなかった。

I児は笑い声がすると、手を止めて穏やかな表情で声のする方を見たり、教師とのやり取りをちらちら見たりしていた。I児の様子が気にはなったものの、E・F・G・H児が次々に「食べて」と、ケーキやカレーなどを持って来たので、4人とやり取りを繰り返しているうちに、お弁当の時間となってしまった。ごちそう作りの話をしながら、I児と用具の片付けをしたが、I児の気持ちに十分触れることができなかった。

③記録から教師の指導について振り返る

この記録から、環境の構成や教師の関わりがねらいにふさわしいものであったかという視点で、保育を振り返ってみました。

○環境の構成について

- ・E児とF児のそれぞれの姿から、どの幼児も自分のしたいことや、自分なりに作りたいと思うものが実現できたのではないか。

→明日はそれぞれに遊びの様子を目にする中で、幼児同士の関わりが生まれるように教師が互いの思いに触れられるよう仲立ちをしたり、様子を見ながら用具の数を少し減らしたりしてみよう。

- ・H児については、お気に入りのカップで十分に遊ぶことができたが、スペースが少し狭かったのではないか。

→型抜きが十分並べられるような空間を確保する必要がある。

○教師の関わりについて

- ・C教師は、一人遊びの多かったI児が友達の遊びにひかれてそばに来たことに気付き、I児が友達と同じ場で遊ぶことを通して、一緒に遊ぶ楽しさを感じたりすることができるのではないかと思い、その手助けをしようと遊びに加わった。

- ・しかし、4人との言葉のやり取りに追われ、I児との間をつなぐことには至らなかった。
- ・I児についても、I児自身の楽しさを十分受け止められず、友達とのつながりをつくることはできなかった。

B教師は記録を読み返して、幼児一人一人が教師とのやり取りを楽しんでいること、そのことが面白く、幼児同士の言葉のやり取りにはあまりならなかったこと、一方、I児は友達の遊びや教師とのやり取りに関心をもったことが分かります。このことからB教師は、幼児たちの間をつなぐことを急ぎすぎているのではないかと考えました。

④振り返りから翌日の保育の方向を見いだす

振り返りを通して、C教師は幼児への教師の関わりについて次のことを大切にしたいと考えました。

- ・自分が興味をもった遊びが、友達もいることでより楽しく感じられるよう、教師も遊びの仲間に入り、それぞれの思いを受け止め、必要に応じてつなぎ役をし、「友達と一緒に」が楽しく感じられるようにする。そのための教師の立ち位置や言葉掛けのタイミングや内容を考える。
- ・教師が遊びに仲間入りするときは、幼児の遊びのイメージを壊したり、友達との関わりを損なったりすることがないように配慮する。

C教師は記録を通して、環境の構成や指導の課題を見付け、明日の保育の方向を見付けました。心に残った場面は、教師自身が心を動かした場面であり、幼児の成長に気付いたり、逆に思うように関わらず課題を感じたりするなど、教師にとって意味のある場面といえます。それを記録に残すことによって、教師のその場面の捉え、そこでの幼児の気持ちの捉えなどを振り返ることができます。また、読み取りの際に視点をもって考察することで、幼児の生活を見る目を広げ、深めていくことにつながります。

(4) 環境の意味を読み取る

次の記録には、幼児が園の環境とどのように関わっているか、それに教師がどのような援助をしたかが書き込まれています。記録に続く考察の部分には、その環境に関わることによって、幼児がどのようなことを体験しているかについて、記述されています。

①環境に関わる幼児の記録

<記録4 5歳児 11月 森のレストラン>

中庭には、大きく茂ったカイズカイクキの木々で囲まれ、陰で暗くなっている場所がある。木の先端を切り落としたりしたところ、上から光が地面に差し込むようになった。その空間を、幼児たちは見逃さなかった。ままごとやホテルごっこを続ける幼児たちの「上履きのまま行き来したい」という願いがかなうように、年長組と教師、地域のおじさんとで大工仕事を始めた。

テラスからこの場所へ続くように、すのこ板の渡り廊下を作ったり、「窓を作りたい」というM児の発想で、カイズカイクキの枝打ちをしたりした。木の中は地域のおじさんに手伝ってもらい、板張りにした。

作業はまる3週間続いた。「一方通行では火事の時逃げられない」「お客様がいっぱい来たらどうする」など、作業の過程でいろいろな暮らし方のイメージや構造の課題、工程の修正などが話し合われた。

まだ、床が張られたばかりの状態であるが、R児が「ねえ。今日のお弁当はここで食べよう」と提案した。皆喜んで賛成した。中に入れない幼児たちは周りにごさを敷いて、それを眺めながら弁当を食べた。

「ねえねえ、なんていう名前がいい？ この家」とR児が言うと、Y児が「妖精の家はどう」と言う。すぐにH児が「なんだかお化け屋敷みたい」と言う。「森の家はどう」とM児が提案したが、「なんだかわたしのおうちみたい」とU児がいう。「だったら、やっぱり、森のレストランか」と、T児が言うと、皆「そうそう、お弁当食べているし」と、話が落ち着いた。傍らで会話を聞いていた教師が「森というイメージは、皆もっているんだなあ。そこは同じなんだなあ」といった。するとR児が「先生、すうーって、息吸ってみてよ。ねっ、森の匂いがするだろ」と目を閉じて深呼吸した。周りの皆も同じように目を閉じて息を吸った。「する、する。ああ気持ちいい」「食欲出るなあ」H児とT児はおどけて、弁当をかきこんでいる。後日、M児とR児がカイズカイクキの葉を石でつぶして粉状にしていた。聞くと、「お抹茶にするの。N先生がしてくれるでしょ」と言う。2人は、この粉を茶碗に入れて、泡立て器

でしゃかしゃか混ぜる。彼女らは2人で、この抹茶を「うーん。いい香り」と嗅ぎ合っている。「先生も一服どうぞ」と教師にも振るまわれた抹茶は、森のレストランのメニューに加わった。

②環境に着目した記録の読み取り

記録の後に、「考察」という形で、幼児の一連の体験に関する教師の読み取りが書き込まれています。ここでは、特に園の環境がもたらした幼児の体験の豊かさについて、多面的に考察されています。

○自然環境への気付き

幼稚園でこれまでずっとそこにある大きな木が姿を変えたことは、幼児たちの興味を刺激した。日常の中の非日常というべき変化が、カイズカイズキとの新しい関わりをつくり出す原点となっている。また、「ねっ、森の匂いがするだろ」と目を閉じて深呼吸する様子からは、「太古、人間は森から来た」という教師の直感をかき立てるような意味深さを感じさせた。

○友達との関係

「こんな風にしたい」「そうだったら素敵なのに」という憧れに似たイメージは、幼児たちを様々な表現のイメージづくりと少し困難な作業への挑戦へと向かわせている。想像をかき立てる大きな木が、それぞれの幼児の思いや願い、考えを出し合い絡め合って協同的な作業が進んでいる。

○言葉の発達

友達との言葉のやり取りでは、「森」や「話の主人公」等の音や象徴的なものの特徴を関連させてユーモラスに会話を楽しんでいる。話したり、聞いたり、考えたり、言葉から連想して展開させたりする力が感じられる。

○暮らしの文化の継承と創造

自分たちの家作りの願いを具体的にならえていく、のこぎりや金づちなどの道具を使いこなす過程で、その特徴や仕組み、先人が伝えた生活の知恵などを体感している様子が見られた。また、葉を使って抹茶をたてる遊びを始めた様子からも、幼児たちが暮らしの文化を引き継ぎ、更に遊びの中で自分たちなりに創作している可能性も感じられた。

○地域との連携

材料を提供してくれたり技術的な問題を支援したりしてくれる大人の存在に触れることは、地域の中で人と関わりながら生活する、共同体意識の芽生えにも関わっているのではないだろうか。やがて、自分たちも役に立てる活動についても幼児と考えていきたい。

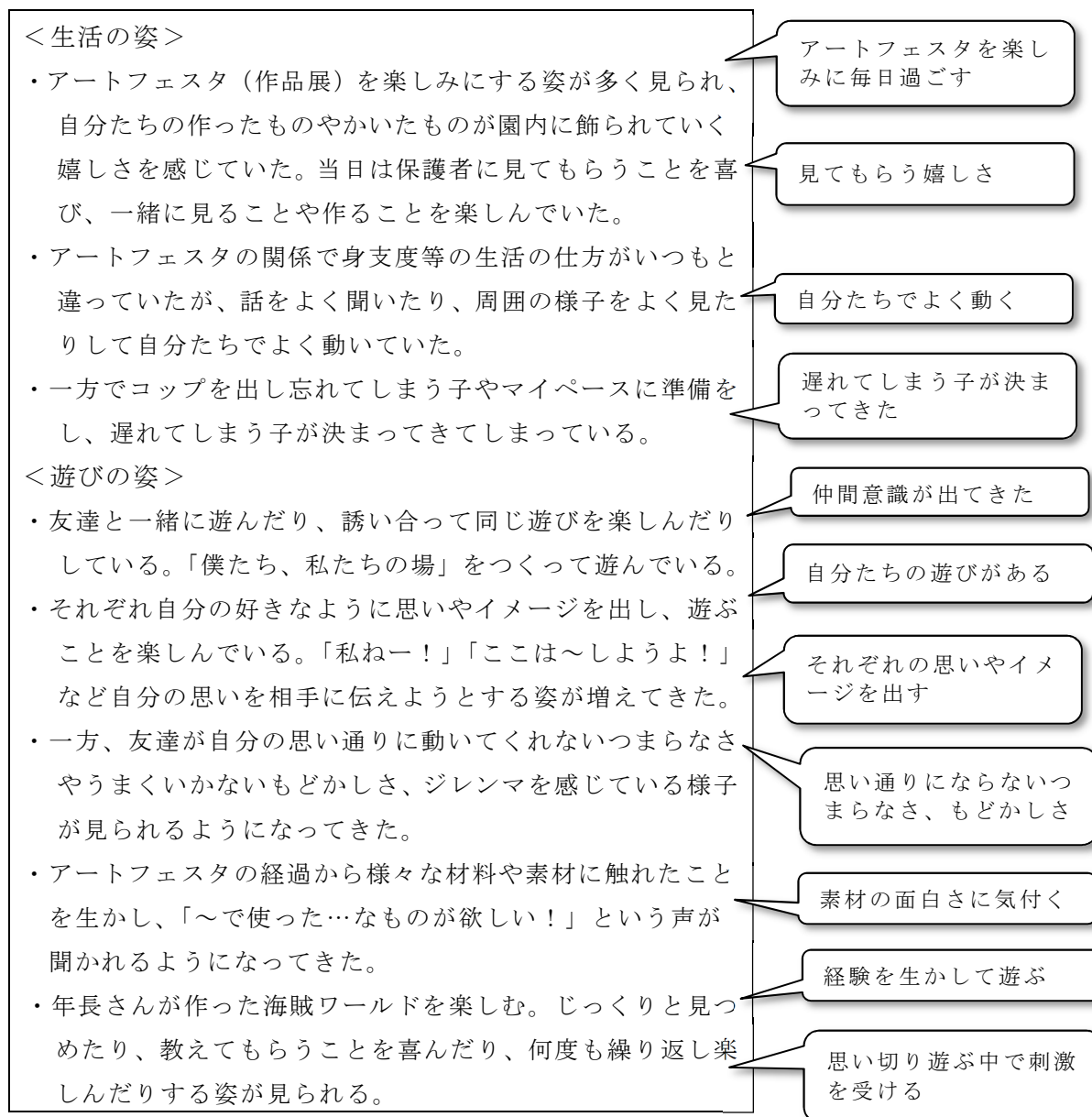
幼児の体験の内容を、教師が多面的に捉えることは、幼児の育ちを捉えながら保育を構成していく上で、非常に重要です。ここでは、園の植栽の整備という偶然の環境変化が、幼児の自然に関する感覚をより深く豊かにする機会になったことや、その感覚を表現することでイメージを交流、共有しながら、協同の作業に取り組む姿として読み取っています。また教師が、幼児に地域の人と関わる機会をつくることによって幼児の共同体意識の芽生えにもつながり、暮らしの文化の継承と創造になっていくこととして捉えています。このように省察を深め、広げることによって、環境への理解が深まり、関わりの深化や発展につなげていくことが可能になります。幼児にとっての環境の意味を、教師が幼児の感性に即して再度捉え直すことは、様々な側面から保育を構想し創り出すことにつながっていきます。

(5) 学級の育ちを捉える

保育経験5年目の4歳児の担任T教師は、週案に「幼児の実態」を記録した後、その実態から読み取れる変化や特徴を、記録5のように「育ちの姿」として吹き出しに記入して付け加えています。そして、ここで読み取ったことを手掛かりに週のねらいや内容を考えています。

①週案に書き込まれた育ちや体験の読み取り

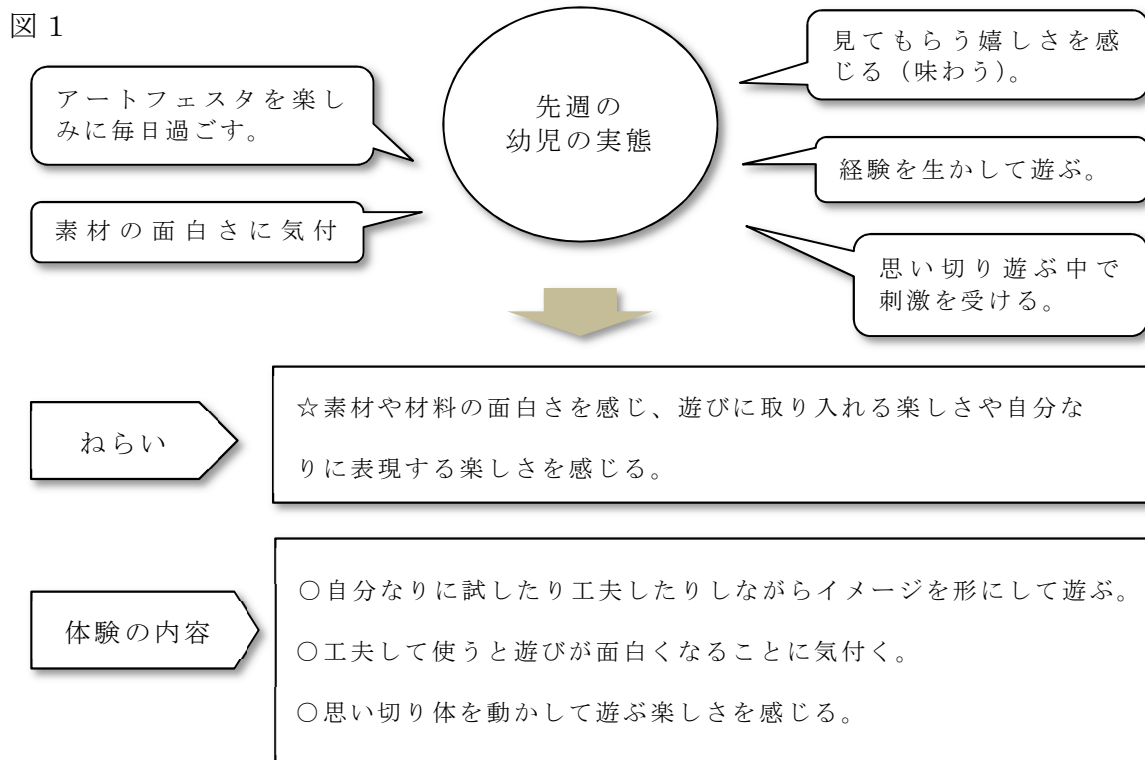
<記録5 週案に書かれた「幼児の実態」>



②体験の読み取りから、次週のねらいと内容を考える

この週はアートフェスタ（作品展）を楽しみに過ごす姿や当日の姿から幼児の製作や素材への関心が高まり、年長組との関わりの中で刺激を受けていることが分かりました。そこから、今週のねらいを「自分なりに表現する楽しさを感じてほしい」と考

えました。さらに、体験の内容を、次の図1ように考えました。



T教師は、吹き出しにして書き加える作業を通じて、目に見えない幼児の育ちを捉えたり、活動や援助、環境が幼児にとってどのような体験になっているかを考えたりするようになりました。また、そうなった理由についても考えることで、前週の「ねらい」が適当であったか、今週の「ねらい」はどうしたらよいのかを実態に応じて考えられるようになったと感じています。また、それにふさわしい環境や教師の援助も関連付けて考えることができました。

吹き出しを書き加えていく形式は、記録1-①(49ページ)の「ティーチャーズボイス」と似ていますが、書かれる内容は異なっています。これは記録を読み取る視点の違いによるものです。記録1-①の「ティーチャーズボイス」では、幼児の内面や教師の関わりに関する読み取りが書かれ、この記録5では、幼児の体験の内容が簡潔に書かれています。

記録5のように、毎週作成する週案と関連をもたせながら、記録の読み取りを行うことは、学級全体の育ちや課題が明確になり、ねらい・内容・環境の構成・具体的な指導の手立てにつながっていく、一つの方法であることが分かります。この過程を通して作成した週案を資料として次ページに挙げました(図2)。

図2 記録した実態や読み取った「育ちの姿」を基に立案した週案

12月5日~12月9日 4歳児 りす組

ねらい	<p>☆一緒に遊びたい友達とかかわりながら、動きや言葉がつかがる楽しさを感じる。</p> <p>☆素材や材料の面白さを感じ、取り入れて遊び楽しさや自分なりに表現する楽しさを感じる。</p>	
	幼児の実態<幼児の育ちの質>	経験して欲しい内容
<p><生活の姿></p> <ul style="list-style-type: none"> ・アトフェスタを楽しみにする姿が多く見られ、自分たちの作ったものや描いたものが園内を飾ることに嬉しさを感じていた。当日は、保護者に見てもらふことを喜び、一緒に見ることを楽しんでいった。 ・アトフェスタの関係で身支度等生活の仕方がいつもと違っていきなり、話をよく聞いたり、周囲の様子をよく見たりして自分たちでよく動いていた。 ・一方でユップを出し忘れてしまふ子やマイパスに準備をし、忘れてしまふ子が決まってきた。 <p><遊びの姿></p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に遊んだり、言い合って同じ遊びを楽しんだりしている。「僕たち、私たちの場」を作って遊んでいる。 ・それぞれ自分の好きなように思いやイメージを出し、遊びを楽しんでいる。「ふ、〜ね!」「こへにしようよ!」など自分の思いを相手に伝えようとする姿が増えてきた。 ・一方、友達が自分の思いどおりに動いてくれないつまらなさや上手いかないもどかさ、ジレンマを感じている様子が見られるようになってきた。 ・アトフェスタの経験から「様々な素材や材料に用れたことを生かし、「〜で使った」はものが欲しい!」という声がかかるようになってきた。 ・年長さんが作った「海見せワールド」を楽しみ、じっくりと見つめたり、教えてもらふことを喜んで、何度くり返したりする姿が見られた。 	<p>アトフェスタを楽しみに毎日過ごす</p> <p>見てもう嬉し</p> <p>自分たちでよく動く</p> <p>忘れてしまふ子が決まってきた</p> <p>仲間意識ができた</p> <p>自分たちの遊び場</p> <p>思い出す</p> <p>思いどおりに動いてくれないつまらなさや上手いかないもどかさ、ジレンマを感じている様子が見られるようになってきた。</p> <p>素材・材料の面白さを感じる</p> <p>思いやり</p> <p>楽しさや自分なりに表現する楽しさを感じる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いを言葉や動きで表し、イメージを膨らませて遊ぶ。 ・やっといういことはいけないうことが分かり、相手の気持ちに気づく。 ・友達と遊びの中で、自分の考えや動きを出し、受け入れられた嬉しさを感じる。 ・自分なりに試したり、工夫したりしながらイメージを形に表して遊び楽しさを感じる。 ・工夫して使うと面白くなることを感じる。 ・仕組みの面白さを感じながら動くものを作って遊ぶ。 ・思いきり体を動かして遊び楽しさを感じる。 ・ルールを守って遊びと、遊びが面白くなることを感じる。 ・思いどおりにいけない悔しさ、もどかさを感じる。 ・ヒヤシンスやチューリップの生長に興味を持ち、調べたり世話をしたりする。 ・クリスマスに向けての製作をし、期待をもつ。
5日(月)	6日(火)	7日(水)
<p>9:00 登園・身支度 <u>お弁当箱出す!</u> 絵本を返す</p> <p>9:10 集まる (お弁当箱について 2年生交流の話 好きな遊び" ♪車火り→)</p> <p>10:45 片づけ、トイレ、手洗いうがい</p> <p>11:10 ♪あわてんぼうのサタクロース" 2年生と交流</p> <p>11:25 2組さんと...おかしらの、じゅんけん 絵を渡す 列車</p> <p>11:40 1組さんと...おかしらの、おかしらの ゲーム 絵を渡す</p> <p>12:10 お弁当の準備 <u>お弁当をもらう</u></p> <p>12:20 ♪あわてんぼうのサタクロース" 好きな遊び"</p> <p>13:15 片づけ、トイレ、手洗いうがい</p> <p>13:30 1組さん、2組さん、3組さん、4組さん 13:45 降園準備 14:00 降園</p>	<p>9:00 登園・身支度 好きな遊び" ♪クリスマスの飾りつけ</p> <p>10:50 片づけ、トイレ、手洗いうがい</p> <p>11:15 フレーズバスケットをする!</p> <p>11:35 グレープスめ (①<②名前と決める</p> <p>11:50 お弁当の準備</p> <p>12:00 ♪あわてんぼうのサタクロース" 好きな遊び"</p> <p>13:15 片づけ、トイレ、手洗いうがい</p> <p>13:25 ♪あわてんぼうのサタクロース" 絵本を返す</p> <p>13:45 降園準備</p> <p>14:00 降園 マリョンのお家持ち帰り</p>	<p>9:00 登園・身支度 好きな遊び" ♪クリスマスの飾りつけ</p> <p>9:50 片づけ、トイレ、手洗いうがい</p> <p>10:15 先生の話を聞く、遊戯室へ</p> <p>10:30 観劇会</p> <p>11:30 手あそび"歌など"</p> <p>11:45 降園準備</p> <p>12:00 降園</p>
個人面談手紙、集金袋配布	ツリー他、クリスマスグッズ出す	園内研計画書作成、教育会

☆ルールのある遊びを楽しむ中で、ルールがあると友達と一緒に遊ぶことが楽しくなることを感じる。	園長印	担任印
☆冬の訪れを感じ、身近に自然に興味をもったり世話をしたりする。		

環境	教師の援助
<p><動きや言葉がっはがる楽しさを感じられるように…></p> <ul style="list-style-type: none"> *同じ遊びをする子ども同士の間が見えたり、言葉が聞こえたりするように、場作りの配慮をする。 *特に、室内の遊びを、子どもの動きを見て整理する。イメージの広がりと共に、物や場がまわってしまふこともあるので、思いを確認しながら整理していく。 <p><素材や材料の面白さを感じ、工夫して使う楽しさを感じられるように…></p> <ul style="list-style-type: none"> *自分なりの工夫や試しが十分にできるように、材料を用意したり、作ったものをそのものに反応してとておいたりする。 *遊びの様子を見て、タイミングよく材料を出していく。 <p><ルールを理解し、ルールの必要性に気づいて楽しめるように…></p> <ul style="list-style-type: none"> *子どもの人数に合わせて、場の大きさなど調整する。 *ルールを確認する時間を作る。 <p><冬の季節や自然に興味をもてるように、関心を深めていくように…></p> <ul style="list-style-type: none"> *学級で話題にする機会を作る。 *子どもたちと一緒に飾りつけをせたりしていく。 	<p>◆イメージの広がりを共に楽しむなら、「へはどらなっているの？」など更にイメージが膨らむような投げかけを提案をする。</p> <p>◆自分の思いと相手の思いの両方に気づけるよう、思いの伝え合いを助ける。「へって思ったんだね、OOちゃんに伝えてみた？」</p> <p>◆一緒に遊び楽しさ、それぞれ受け入れられる嬉しさを共感的に伝えていく。「△△くんにも伝えて良かったね！一緒に遊べると楽しくなるね！」</p> <p>◆その子なりの表現や良さ、工夫しているところを具体的に認めていく。また、共に面白がる中でいろいろな表現を更に楽しめるようにしていく。</p> <p>◆仔細な面白さに気づけるよう、楽しみながら話題にしたり一緒に不思議がったりする。</p> <p>◆ルールがあるから楽しくなる、お互いに気持ちよく遊べるということを感じながら場面に応じて、具体的に伝えていく。</p> <p>◆子どもの気づきや期待を受け止め、周りの子どもたちにもその気づき等を伝えていく。関心をもつきっかけになるようにする。</p>

保育資料

歌 ... 「あわてんぼうのサンタクロース」 「さき野原のクリスマス」	製作 ... クリスマスツリーの装飾 (天使ちゃん、リース作り (11枚、毛糸を使って...) 車作り)
絵本 ... 「どろどろいす」 「おれこ」	集団遊び ... けんけん列車、なかよしゲーム
楽器遊び ... すず、カスタネット、タンバリン 「おれこ、おれこ」交互奏	フレイバースタット、ニョバシドビジボール

8日(木)	9日(金)	<反省・評価>
9:00 登園・身支度 好きは遊び ツリースタリ	9:00 登園・身支度 好きは遊び ツリースタリ	
10:50 片づけ、トイレ、手洗い、うがい	10:50 片づけ、トイレ、手洗い、うがい	
11:10 ♪あわてんぼうのサンタクロース	♪ダンス「はは、はは、おまひやい」	
11:20 こぼれびん遊びがはじまる	楽器遊び (すず、カスタネット、タンバリン)	
11:50 お弁当の準備	避難前訓練	
12:00 ⇄「いただきます」	11:50 お弁当の準備	
好きは遊び	12:00 ⇄「いただきます」	
13:15 片づけ、トイレ、手洗い、うがい	(食後) 絵本の借り	
13:30 ♪「さき野原のクリスマス」	好きは遊び	
絵本「どろどろいす」	13:10 片づけ、トイレ、手洗い、うがい	
13:45 降園準備	13:25 ♪「さき野原のクリスマス」	
14:00 降園	大型絵本「さき野原のクリスマス」	
	13:45 降園準備	
	14:00 降園	

(6) 特別な配慮の必要な幼児を理解し支援を考える

C教師は、5歳児の担任をしています。前担任からの引継ぎでは、特にK児について、友達との遊びや学級全体の活動で思い通りにならないと言葉で伝えられず感情的になること、K児の気持ちの出し方で学級全体が落ち着かなくなるなど、気になる姿が伝えられていました。そこでC教師は、まず自分の目でK児を把握してみようと思いました。進級して1週間のK児の姿を記録し、読み取ったことを手掛かりに支援の方向を考えていきました。

① 幼児の姿から課題を読み取り、支援の方針を立てる

<記録6-① 5歳児K児 進級当初1週間>

<4月7日>

K児は登園後、担任や保育室が変わった初めての場で、手間取りながらも身支度を済ませる。友達について椅子に座っているが、表情は硬い。ホールでの始業式から戻ると、「外に行きたい」「外で遊びたい」と何度も担任に言いに来る。新しい名札は、担任が付けることは拒むが、手に取り嬉しそうに握りしめている。

<4月8日>

学級活動で「かごめかごめ」を行う。学級全体でするには多少無理のある活動だが、皆で手をつなぎ輪になることで一体感を感じているよう。K児も好きな友達の手を取り、輪の中に入っている。担任が全体に話しているときは、落ち着かず立ち歩くことが多い。

<4月11日>

学級で集まっているとき、突然(担任にはそう思えた)大きな声を出し騒ぐ。隣に座っていたおとなしいY児が「うるさい」と聞こえないくらいの小さい声でつぶやく。

<4月13日>

3歳児の身体測定の手伝いが始まると、K児は会場のホールをウロウロしている。担任が「分からないことがあったら先生に聞いてね。今日のお手伝いは三つ。一つ目体重、二つ目身長、三つ目座って測る所」と場を指して具体的に伝える。K児は3歳児を気遣う余裕はなかったが、迷うことなく三つの測定に取り組む。

上記の記録に残された姿からC教師は、K児はどのような状況なのかを読み取っていきました。

○K児は進級をどう受け止めているか

- ・担任や保育室が変わったことへの戸惑いや不安はあるが、年長組になったことは喜んでいいる。

○K児が困っていることや課題

- ・初めてのことには不安になるが「分からない」と言えない。
- ・自分が困ったときの思いを感情的に表す。
- ・活動に対しては、真面目に取り組む。支度に時間がかかるなど、手先は不器用である。
- ・初めてのことは全体指示だけでは動けない。

○友達をどう受け止めているか

- ・友達との活動は楽しい。
- ・好きな友達といると安心して、皆の輪の中に入ることができる。

○周りの幼児はK児をどう受け止めているか

- ・学級の中には、K児の不器用な表現に対して嫌な思いを抱いている幼児がいる。
- ・周りの幼児が、K児の気持ちが分からないままに評価している可能性がある。

このような読み取りを基に、C教師は支援の方向を考え、以下の方針を立てました。

- ・担任との信頼関係を築き、K児が困ったときに助けを求められるようにする。
- ・全体への指示だけでなく個別の支援で丁寧に対応し、自分のやることが分かるようにしていく。
- ・不安・不快などの気持ちを具体的に言葉にできるように、繰り返し知らせる。
- ・皆のために頑張った場面など、K児のよい印象を学級全体に伝え、根付かせていく。

②幼児の変化や育ちを捉え支援を継続する

その後もC教師は、その時々K児の姿を記録に残しながら、支援の手立てを考えたり、保護者にK児の育ちを伝えたりしました。

<記録6-② その後のK児の姿>

<4月26日>

明日の初めての誕生会の司会に向け、学級活動で司会の役割分担の相談をする。K児は「俺は絶対1番。1番が言いたい！」と言い続ける。K児は自分が分かる司会の言葉をやろうとしている。他児が譲ってくれたので、K児の思いがかなう。K児は担任に促されて、お礼を言う。

<5月17日>

誕生会に向けて、学級活動で5月生まれのH児のよさを発表し合う。K児の位置は、友達の発言が聞けるように、順番を最後の方にする。しかし、K児は自分の番になると「分からない」と言う。担任は少し待つが「じゃあ、お帰りの前に皆に教えて」と、切り上げる。弁当後の遊びの中で、担任が「どう？考えられた？」とさり気なく聞いてみると、K児は「難しい」と言う。「楽しいとか、優しいとか」と言うと、「優しいから大好き」と小さい声で答える。担任は「いいねえ。後で皆に教えてあげよう」と声を掛ける。

帰りの集まりのとき、R児が「Kちゃん、まだ言っていないんじゃない？」と言ってくる。K児は皆の前に立つと言葉にならない。担任が「Hちゃんのそばで言ってあげたら」と言うと、小さい声で言う。「K君、勇気出して言えたね。拍手」と皆で認める。

<6月14日>

2回目の誕生会の司会。前回、第1希望を譲ってくれた幼児が優先という約束をしていたが、K児は自分のやりたい司会ができないと怒っている。

<9月2日>

保育室での集まりは落ち着いて担任の話の話を聞いている。朝の身支度も他児の様子を見て急ごうとしている。

机上積み木を新しく出すと、他児が部屋の中央に集まって積み木遊びを始める。K児はその姿に興味をもち、加わる。今まで関わりのない幼児の中に自分から入っている。

<9月16日>

K児とQ児がお祭りごっこの焼きそば屋をしている。近くでおうちごっこをしていたL児たちとつながり、相手の場をうまく共有している。K児が穏やかにごっこ遊びを楽しんでいる。

<10月運動会の司会>

運動会の司会という初めての活動。隣の学級も含めた友達4人で、年中児の玉入れの司会になる。毎月の誕生会と違い初めての内容なので、K児は「何て言うか分からない」と友達に言う。普段は関わりの少ないメンバーだが、運動会に向けての活動を一緒にしてきたためかK児は安定していて、友達のリードに乗って一生懸命に取り組んでいる。

〈12月8日〉

新しい生活グループをつくる。担任は、いろいろな友達と仲間になる機会にしたいと考え、くじ引きの5人グループにする。K児のグループは休みの幼児がいて、今日は5人にならない。「やだな」とK児が言う。「だってさ、5人いないグループなんて、つまらない」と残念そうにしょんぼりする。以前は好きな友達と一緒にないと大騒ぎしていたK児が、新しい友達に期待を寄せている。

〈1月17日〉

年中児と一緒に司会をしながら引き継ぐ1月の誕生会。全体の話の後、担任はK児が困っていそうなことを個別にささやいて知らせたり認めたりする。K児は担任の話の通りに年中児の手を取り移動したり、顔を見て教えようとしていたりしている。普段、降園後の園庭開放で自分の弟だけでなく友達の弟妹の相手をしているK児は、やることが分かれると関わりの少ない年中児にも優しく接することができる。担任は、他児に聞こえるようにK児を認める。

この事例の教師は、K児への先入観をもたず、日々の記録から、K児について何が課題なのか、どこで本人が困っているのか、周りの幼児はどう感じているのかなどを捉えながら具体的な支援の手立てを探っています。それを積み重ねることによって、次第にK児が自己発揮できるようになっていく育ちと指導の過程が記録に残されています。

幼児の育ちの課題は、学級の友達や担任など、その幼児を取り巻く人間関係の中で表れてきます。友達との関係、学級全体の中でのその幼児の受け止められ方といった多様な側面から読み取りをしていくことが必要になってきます。

特に長期にわたる支援が必要な場合、記録は場面の羅列でなく、行動の変化やその意味を読み取っていく作業が重要になります。教師の読み取りや支援が妥当であったかどうか、その後の幼児の姿と照らし合わせながら考えていくことになります。だからこそ、より一層その時々々の記録を残しておくことが重要になってきます。そのときには分からなかった行動の意味が、後になって明らかになることも多いからです。

教師にとって理解しにくい幼児や配慮の必要な幼児については特に、教師が自身の理解を問い直し、支援を再考していくためにも、記録の積み重ねが重要になってきます。

第3章

記録を指導や評価の

実際に生かす

記録を基に、幼児を理解し、自らの保育を振り返ることは、質の高い保育を提供する上で重要な意味をもつものであり、記録の在り方や記録の実際については、第1章及び第2章において述べてきたとおりです。この章では、このような考え方を踏まえて各幼稚園が実践を進めるための手掛かりとなるように、いくつかの具体的な事例を紹介していきます。

これらは、あくまでも一つの実践事例であることを考慮して各幼稚園の実情に即して活用ください。

1. 記録を通して幼児理解を深める

第1章では保育の記録の意義と生かし方、第2章では記録の取り方や読み取りなどについて述べました。第3章では、記録をどのように指導や評価に生かしていくのかについて、事例を通して述べていきます。

記録は、幼児を理解する上で重要な資料です。幼児を理解することは全ての保育の出発点であり、幼児理解なくして指導計画も評価も保育の展開もありません。保育での幼児の活動を単に書き留めるだけなら誰にでもできますが、幼児理解に必要な情報や指導及び評価に生かせる情報が記された記録は、専門性を有する教師だからこそつくることができます。同じく、記録から幼児の内面を推察し、幼児の発達を捉え、更に発達の方向性まで見通すことも幼稚園教師だからこそできることなのです。しかし、教師といえども、一朝一夕にこのような記録を取ったり幼児理解ができるようになったりするわけではありません。保育の様子を記録し、その記録から幼児を理解しようと努力し、指導や評価をするといったことを繰り返すことによって、幼児の言動の何により着目するのか、記録から何を読み取るのか、更には幼児がどのような方向に発達しようとしているのかといったことを考え、次の保育に生かせるようになっていきます。

記録の様式は様々であり、それぞれに特性があります。記録を保育に生かすためには、「何のために、何を書くのか」という記録の目的を明確にし、その目的に応じた様式を用いて、記録の取り方を工夫することが大切です。教師は、自分自身が、今、幼児の何を知りたいのかをあらかじめ明確にしておくことで、幼児理解に必要な情報や指導及び評価に生かせる情報を記録することができます。

幼児の言動、周りの環境や状況は目に見えても、幼児の内面は見えにくいものです。幼児の内面は、これまでの体験の積み重ねの上であり、今日の姿だけで理解できるものではありません。幼児を理解する上では、幼児のこれまでの体験を振り返ることが大切です。そして、教師の幼児理解の妥当性や信頼性を高めることも大切です。そのためには、園内研修やカンファレンスなどを通して、複数の教職員で、それぞれの判断の根拠となっている考え方を突き合わせ、多面的に幼児を捉えるようにすることが必要です。

記録は、教師が自身の指導を振り返る上でも重要な資料です。記録することによって、もう一度自分の保育の状況を思い起こし、幼児の行動やその心の動きを探ってみるとともに、教師自身の関わり方や感じ方を振り返ってみることができます。また、記録には、教師自身の幼児の見方や保育の考え方などが反映されているものです。それをたどることは、自分の保育に気付き、幼児の生活を理解することにつながります。このように、保育の状況を記録し考察することによって、保育の過程を知るばかりでなく、幼児の生活を見る目を広げ、教師一人一人の幼児理解や指導についての考え方などを深めることにつなげることができるのです。記録は、幼児のためであり、教師自身のためでもあります。

質の高い幼稚園教育を実施するためには、記録を通して幼児理解を深め、指導や評価に生かしていくことが大切です。

2. 記録を指導や評価に生かす（実践事例）

（1）記録から指導の過程を評価する

幼児の自発的活動である遊びが持続的に展開するには、その遊びへの幼児の強い動機が必須であることは言うまでもありません。同時に適時、適切な教師の指導が重要です。幼児が主体的に取り組む姿を教師が認め、そこから更に遊びを展開していくきっかけとなる環境を構成したり、指導したりしていくことが必要です。今日の遊びが明日へと続いていくために、教師は記録を通して自分の指導の過程を振り返り、評価していくことが大切になります。

次の3事例は、いずれも数日間にわたる一つの活動を振り返った記録です。事例1は、指導の過程における幼児の体験の多様性や関連性を読み取り、その関連性を幼稚園教育要領に示す5つの領域の視点を基に捉えたもの、事例2は、指導の過程を振り返ることにより、幼児一人一人の課題を捉え直し、遊びを支える手立てを工夫し、指導の観点を見いだしたもの、事例3は、記録から幼児を捉える際に、過去の記録を振り返り、幼児が体験してきたことを捉えたものです。

事例1 「鬼の面作り」A児の姿から（5歳児2月）

幼児の遊びは、幼稚園教育要領に示す領域ごとに独立して展開するものではなく、5つの領域が相互に関連し合って総合的に展開されます。そのため、一つの遊びにおける幼児の発達を読み取るにはそれぞれの領域から発達を捉える必要があります。本事例では、A児が鬼の面を作っていく過程を領域の視点から捉えています。

【A児の記録】

- ・『おなかのなかに鬼がいる』の絵本を見る。周りの幼児は面白い場面では笑っているが、A児は、おなかの中に鬼がいることを想像しているのか、あまり表情を変えずに最後まで見ている。
- ・教師が「皆の中にはどんな鬼が住んでいるか」と投げ掛けると、A児は周りの幼児の話を

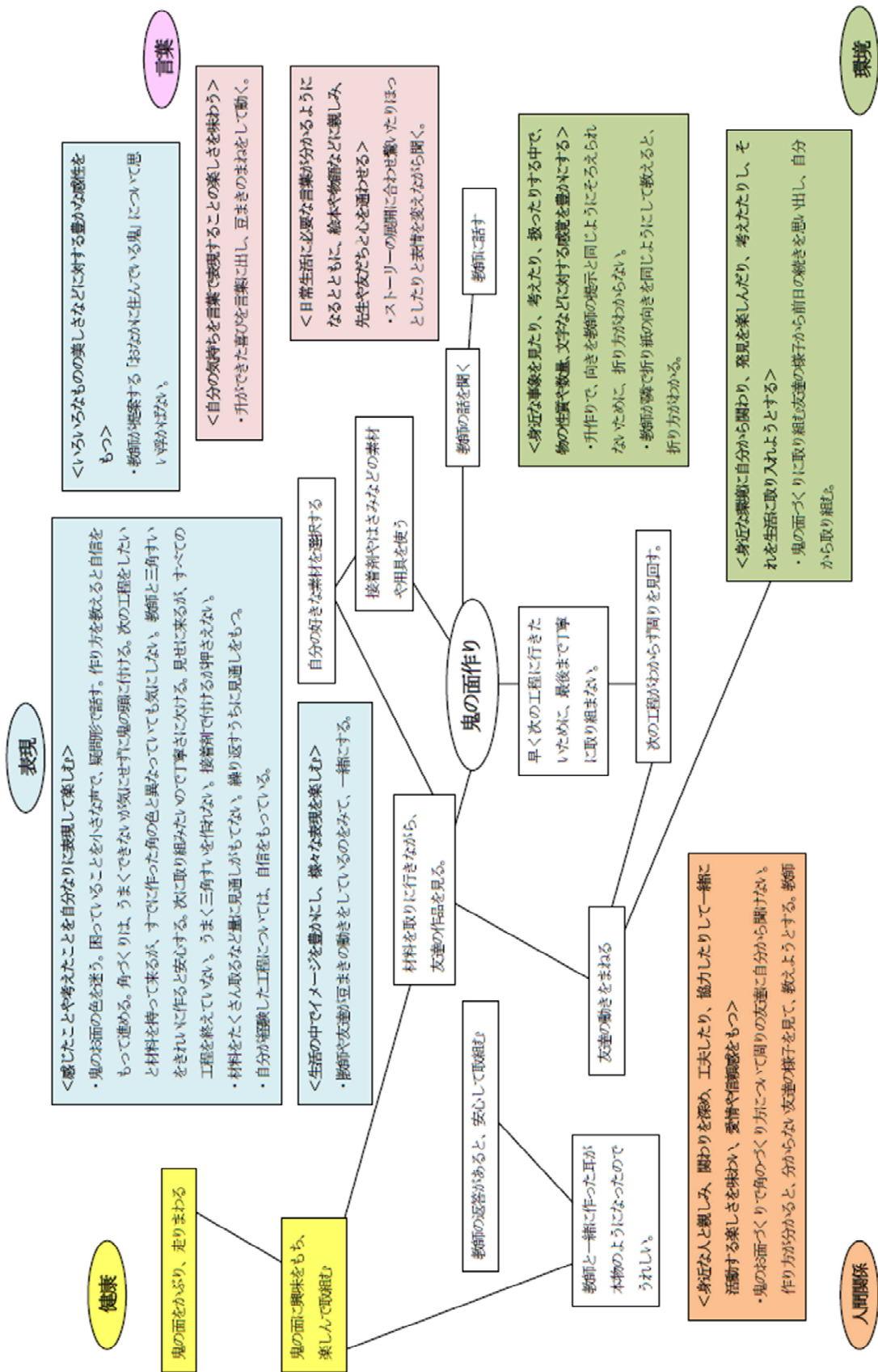
聞いているが、何も口にしない。教師が鬼の面を作って鬼を追い払うこと、自分の中の追い払いたい鬼を考えることを話すと、教師に「何でもすぐ買ってと言う鬼」と、周りの幼児の言ったことをまねて言う。教師が、「ほかに追い出したい鬼はないかな、もう1回考えてみてごらん」と促すと、「なかなか支度をせずに遊んじゃう鬼」と言う。教師が、「そうか、それは1年生になる前に追い出した方がいいね」と言うと、自分の考えたことが認められ、嬉しそうな表情になる。

- ・ 紙袋を使った面の作り方を教師から聞いてはいるものの、周りの幼児の様子を見ながら確認して作る。教師に「できた」と見せに来るが、目の部分が切り取られておらず、切り込みだけが入っていた。「線の通りに切るんだよ」と教師が言うと、「分かった!」という表情をし、切り取る。次に、絵の具を塗るが、少し迷って青を塗り始める。途中で、その紙袋の取っ手を切っているうちに使っていた絵の具の皿がなくなっている。困った表情で「青、ない」と教師に言いに来る。教師が「どうしようか。筆ならあるよ」と筆を渡すと、「(一つの皿を) 2人で使うの?」と自信なさそうに聞き返す。教師が「そうだよね」と答えると、安心したように友達の話の具皿のところに行き、色を塗り始める。
- ・ 自分の作りたい鬼に合った材料を選んで顔のパーツや髪の毛などを作ることや、角の作り方(画用紙の三角すい)を知らせる教師の話を、A児は、少し不安そうな表情で聞いている。
- ・ 角を作るが、うまく三角すいの形に巻けておらず、先が開いていたり巻き終わりが浮いていたりしている。それを鬼の頭に木工用接着剤で付けようとするが接着剤を付けて置いただけのため、頭からも浮いている。それを見て教師が「ここ、浮いているから、もう1回作ろうか」と声を掛けると、すぐに作り直す。今度は先のしっかりと閉じた角ができたので「できたね」と教師が声を掛けると嬉しそうに「うん」と言う。それを紙袋の上の部分に付けようとするが、三角すいの下の部分の切り込みが半分入っておらず、角がまっすぐに付いていない。それを気にせずに次に牙を付けようとする。続いて髪の毛として梱包材を一つ一つ付けていこうとする。教師に「角がまだきちんと付いていないよ」と言われ、教師と一緒に切り込みを全て入れ、切り込み部分をしっかりと折り、袋の中から手を入れて角が上部に付くように押さえるなどの一つ一つの工程を丁寧に行う。
- ・ B児が、誰に向けるわけではなく「角、どうやって作るの?」と声を上げている。しかし、周りの幼児は自分のことではいっばいだったようで、誰も答えない。

- ・ A児は、B児の様子を見て、自分が教師に教えてもらったようにB児に手を添え「こうだよ」と教える。その後、自分の面作りに取り組み始める。髪の毛にする材料を一つずつ付ける。周りの他の幼児の様子をよく見ながら、別の机の幼児が耳を付けているのを見て耳を作ったり、別の幼児が角にカラーテープを巻いているのを見てA児も巻いたりしている。時々、材料を取りに行きながら、友達が作っている様子を見て歩く。

このA児の記録を5つの領域のねらいから捉えてみました(図1)。すると、A児の鬼の面作りの姿の中に、5領域が相互に関連し、多様な体験が生まれていることが読み取れます。幼稚園教育は、遊びを通じた指導を中心として、5領域のねらいが総合的に達成されるようにすることが大切です。5領域の視点から指導の過程の記録を分析することで、幼児の体験の多様性と関連性、発達や学びのつながりを読み取ることができるのです。

図1 鬼の面作りの指導の過程から捉えた幼児の体験の多様性と関連性



事例2 水族館遠足から水族館ごっこへ（4歳児11月）

本事例は、水族館への遠足における体験を基に、関連する多様な遊びや活動をすることにより、あるテーマをめぐる多様な遊びや、学びの経験につなげたいという長い見通しのねらいの下に行われた保育の記録です。水族館遠足の翌日から始まった水族館ごっこは、状況を変化させながら1週間以上も続きました。

まず、教師は、それまでの実態から、水族館遠足による幼児の体験について予想し、指導のねらいを設定しました。

《これまでの実態》（水族館遠足の前週）

・個々の自己表現力が伸びてきている

芋ほり遠足後の描画や歌を歌うことなど、感動体験を自分なりに表現する喜びを感じているようだ。遊びの中ではマンネリ感やつまずきを感じているようで、個々の表現する力を伸ばすことが今、必要である。

・友達への関心が高まってきている

これまでは気に入った友達との遊びが多かったが、一緒に体験したことを基にした遊びには、多くの幼児がすぐに集まるようになっている。共通体験を基盤に友達関係を広げてほしい。

⇒教師の願い

- ・共通の体験を楽しんでほしい。
- ・共通の体験を基にした遊びは、日頃の友達関係を広げ、いろいろな友達への関心を高め合うことになるだろう。
- ・自分なりに表現したり、皆の中で自己発揮したりする喜びを感じてほしい。

⇒水族館遠足への教師の期待

- ・水族館遠足という機会を生かすことができるのではないか。
- ・そのために一人一人の表現が皆の中に位置付くような環境の構成を考えるとともに、幼児が何を楽しみたいと思っているのかを遊びの中で探っていく。

教師は以上のような予測と期待をもちながら、水族館遠足を幼児と楽しみました。

次の記録は、水族館遠足の体験を基に、展開された保育の過程と、その過程で生まれた幼児の学びや発達を示したものです。

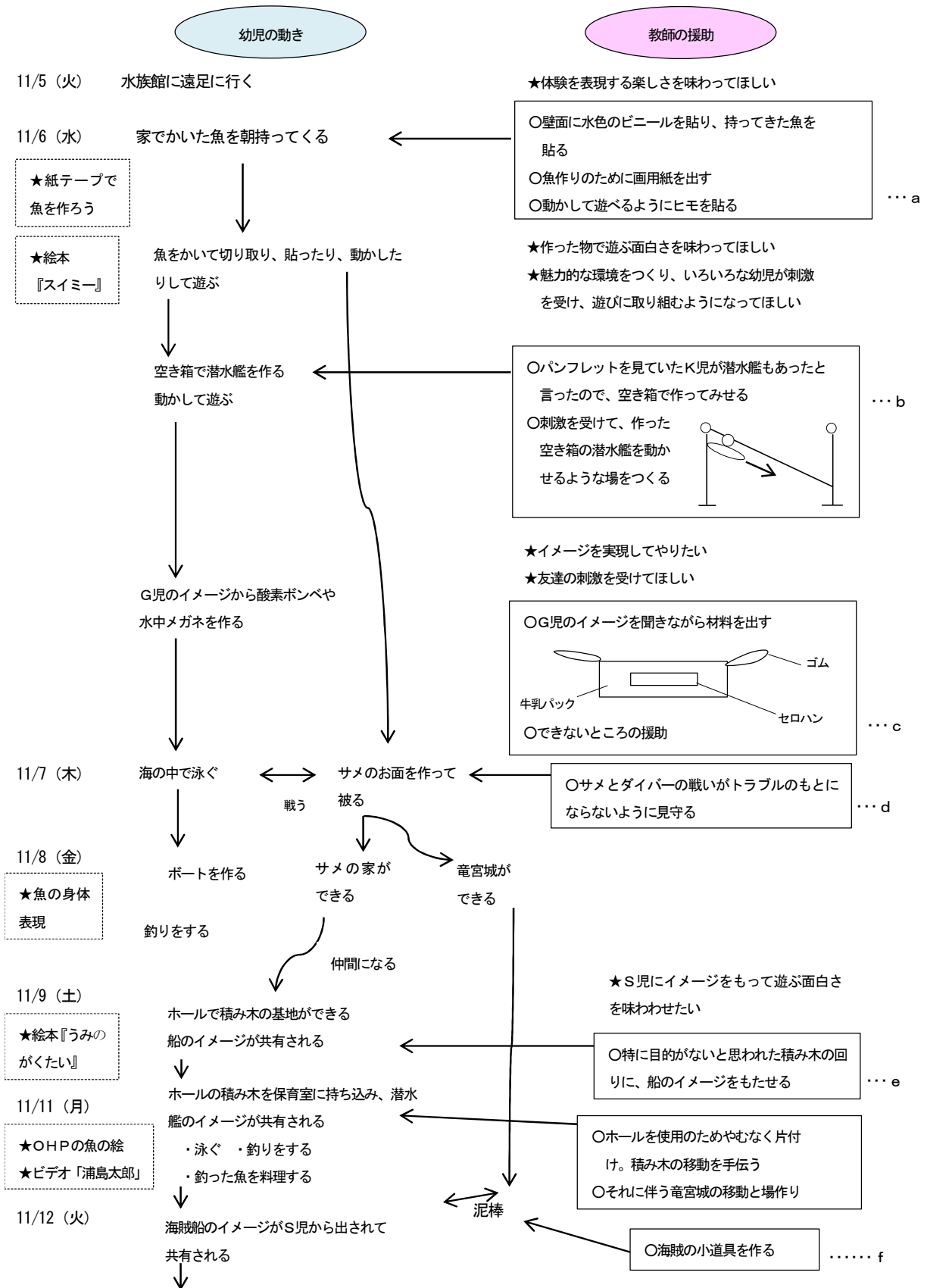
<記録1 水族館遠足翌日 11月6日(水) >

昨日の感動をどの程度残しているかと思いながら幼児を迎えると、T児がイルカの絵を家からかいて持ってくる。魚の絵をかけるようなコーナーを設定しておいたので、早速T児は続きをかき始める。それまで壁面に貼っていた絵を外し、幼児の目の前で水色のビニールを前面に貼ると、すぐに他の幼児も集まってくる。魚が泳いでいるようにテグスを用いて工夫しておいたのが面白かったらしく、どんどん作る。

教師の予測と期待が幼児の思いと合っていたことが幼児の行動から分かります。幼児が求めていることと、必要な体験を積み重ねるための教師の指導性とがかみ合うと、幼児の主体性は自然に引き出され、幼児はそこから次の活動を生み出していきます。

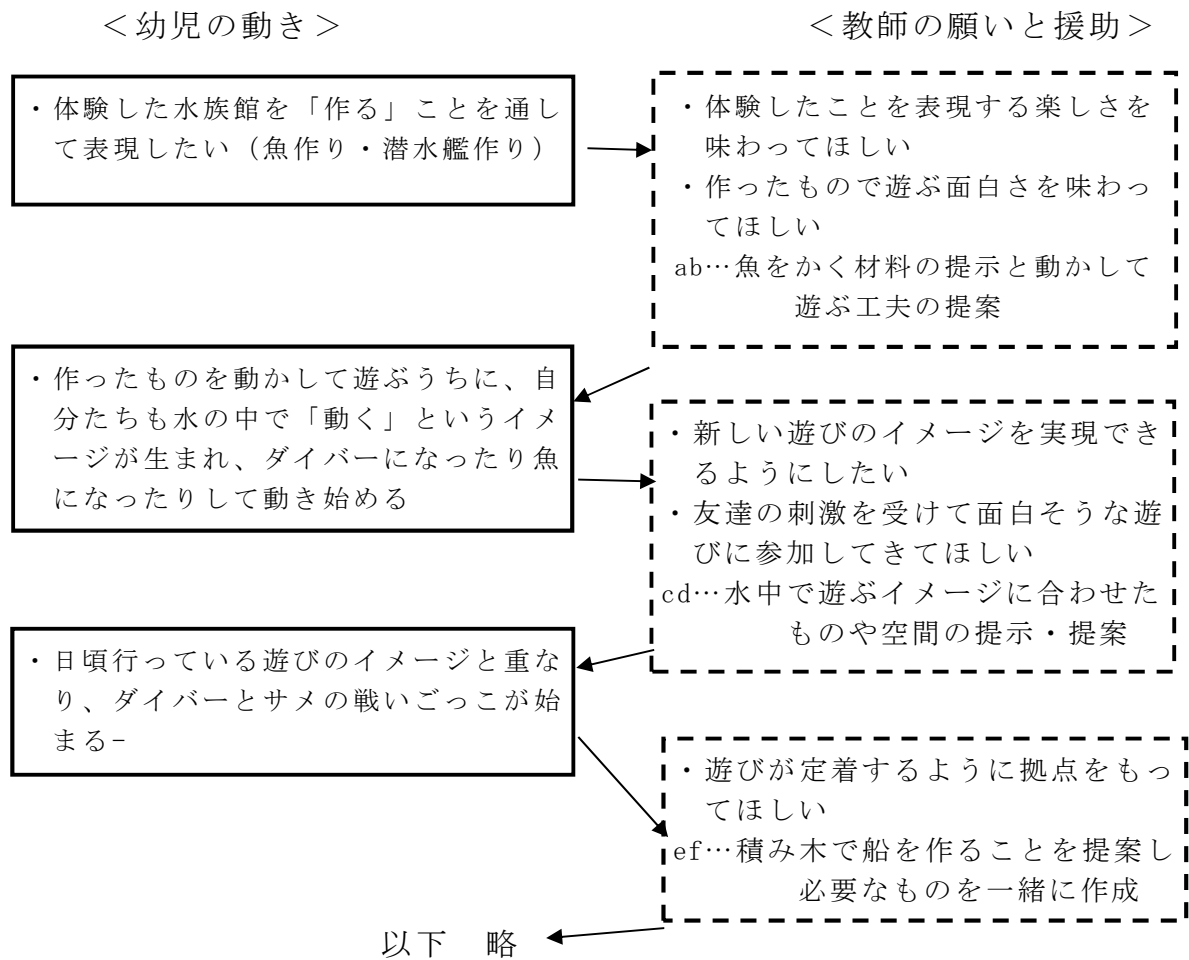
次ページに、水族館ごっこから展開された一連の遊びの流れを図に表しました。

<記録2 水族館ごっこからの展開（一連の遊びの流れのまとめ）>



○記録から読み取れる指導の過程

一連の遊びは、T児が水族館の遠足の翌日に家から魚をかいてきたことから始まりました。共通に体験したことを自分なりに表現しようとしているようだったので、教師はその思いを受けて、保育室の壁面に「水の中」のイメージがもてるように水色のビニールを幼児と共に貼り、構成しました。そこから様々な魚を作ることが広がり、遊びは以下のように幼児の主体的な動きによって展開していきました。この展開は教師の指導の過程と切り離すことはできません。幼児の動きを受けて、あるいは予想して行われた教師の指導を<記録2>の図中の記号と照らし合わせて示します。



<この遊びが継続した要因>

- ・自分の思いを遊びの中で表現する面白さを味わうことができた。
- ・表現が広がり、遊びが具体化していくことで、他の幼児にも伝わりやすかった。
- ・友達が身に着けたり作ったりしているものを自分もまねしたい気持ちが強く、それが実現できた。

<幼児の遊びを指導する観点>

- ・幼児がどこに興味や関心をもって遊びを展開しようとしているのかを読み取り、その実現のために必要なことを援助する。
- ・自分なりの遊びの課題をもちながら、友達と共に遊びを自発的に進めていくために、更に必要な体験は何かを考え、次の展開を提案する。
- ・その際、環境を提示・提案するだけでなく、教師も仲間となってモデルとして動き、幼児の意欲を高める。

記録2の左端の日付の下に記入されている活動のように、実際の遊びの流れの中で、場面ごとに必要な援助のほかにも、教師は学級全体の活動においても遊びのイメージが高められるような活動を計画的に指導しています。例えば、魚に関する絵本を読んだり、魚の身体表現を全員で楽しんだりするなどの活動です。このような計画的な指導は、一人一人の水族館のイメージを明確にするとともに、水族館遠足という共通の体験を基盤とした遊びへの関心を高める働きをしています。

幼児の遊びが自発的に展開するとは、持続時間だけではなく、人やものなどへの関わりが遊び込むほど深まるということです。人やものなどへの関わりの深まりを読み取るためには、遊びの状況を読み取るという観点をもって、日々の記録を残すことが有効です。そして、記録を根拠にして、どのような願いや意図をもって指導したのか、指導の結果がどうだったのかも記録する必要があるでしょう。

事例3 “わくわく造形展”に向けての活動（5歳児11月～12月）

幼児の育ちは単発で見られるものではなく、今日の姿が明日へ、1週間先へ、更にはもっと先へとつながっています。したがって、保育を構想するときには、それまで

の幼児の育ちを適切に捉えること、また、今日の幼児の姿をどのように捉え、翌日からの保育にどのように生かしていくかということが重要になってきます。毎日の記録を積み重ね、ときには長いスパンで幼児の育ちを振り返ることが、幼児の育ちを捉え、幼児の成長の軌跡や発達の見通しを読み取ることに繋がります。

本事例は、グループで共通の目的に向かう“わくわく造形展”の取組の記録です。これまでの幼児の姿の記録とあわせて読むことで、“わくわく造形展”での幼児の姿をより理解することができることから、関連する記録とあわせて幼児の姿を振り返りました。

<これまでの幼児の姿の記録>

5歳児 6月 (A児)

空き箱で車を作って遊んでいる。A児はペットボトルキャップを貼り付けただけのタイヤでは転がらないので「本当に動くやつにしたい」と言う。

教師がストローと竹串、ペットボトルキャップで作ったタイヤを渡すと、本当に動くことに驚き、車を走らせることを楽しんでいる。積み木を組み合わせて斜面を作り、どこまで走るか友達と競争したり、真っ直ぐ走るか何度も試したりしている。

車が本当に動くようになったことで、走らせること（距離、曲がり方）に興味が向いていた。

5歳児 9月 (B児)

B児はおうちごっこをしていて、自分の赤ちゃんを作りたいと言う。年中児のときにも赤ちゃんを作ったことがあるのでその体験を生かし、不織布やカラービニール袋などと紙の素材を組み合わせ、赤ちゃんを作る。

翌日、「段ボールがほしい」と言うので、教師が「何に使うの?」と聞くと、「ベビーカーを作りたい」と言う。段ボール箱を渡し、段ボールカッターの使い方も伝えると、段ボールの箱の蓋を切り取り屋根にしたり、布やペンで飾り付けをしたりする。友達に「見て、こんなん作った」と嬉しそうに話している。それを聞いて、C児もベビーカーを作りたいと言う。B児が作っているものを見てまねをしながらも、屋根の形や色、タイヤの大きさなどは自分なりに工夫している。

< “わくわく造形展” に向けての幼児の姿の記録 >

< 5 歳児 11 月後半～12 月前半 >

“わくわく造形展” に向けて学級を 4～5 人のグループに分け、「皆で楽しい街を作ろう」と投げ掛けて取り組み始めた。A 児、B 児を含むグループでは汽車を作ることになり、どのような汽車にするか、どのような材料を使うかを相談しながら作り始めた。

【記録 1】 11 月 26 日

段ボール箱を使って、汽車を作ることになった。作りながら、「本当に動いたら面白い」「お客さんを乗せてあげたい」「汽車には煙突とかハンドルがある」など、どのような汽車を作るかアイデアが出てきた。幼児は材料に触れたり話したりする中で、どんな汽車を作りたいのかという思いを次第に共有し、思いの実現に向けて一緒に試行錯誤している様子。

A 児「前に、車に付けたタイヤを付けたら、本当に動く汽車になるよ」

C 児「お客さんが乗るから大きなタイヤがいいよ」

B 児「お客さんが乗っても壊れないように、段ボール箱の内側もガムテープを貼って頑丈にしよう」

D 児「煙突もあつたらいいんじゃない？」

A 児「何で煙突作る？」

B 児「ラップの芯にしたらいと思う」

B 児は材料置き場からラップの芯を持ってきて貼る。

A 児「それいいね」

煙突ができると、もっと汽車に飾り付けをしたくなった幼児。遊園地にある汽車をイメージしてアイデアを出している幼児もいる様子。

C 児「汽車にはハンドルも付けなくちゃ」

B 児「遠くが見られるように望遠鏡も作ろう。お客さんが楽しいと思うよ」

A 児「汽車に色も塗ろうよ」

B 児はピンク、C 児は水色がいいと言う。幼児同士で話し合ううちに、それぞれの面に皆の好きな色を塗って、汽車の名前も虹色号にしようということになった。

【記録 2】 11 月 29 日

車輪や飾りを付けて汽車が完成。お客さんを招く前に、2 人の幼児が実際に乗って本当にお客さんが乗っても大丈夫か試してみた。重さに耐えられず、段ボール箱の底が一部へこんでしまった。幼児のお客さんを乗せたい気持ちは変わらない様子なので、修理をする事になった。

A 児「底がぺこぺこするからなあ。もっと丈夫にしなくちゃ」

B児「ガムテープをもっとたくさん貼ってみよう」

ガムテープを縦向き、横向きにたくさん貼ってから乗ってみるが、やはり重さには耐えられない様子。「一気にいっぱい乗ったら無理なのかも」、「ガムテープだとダメなのかも」などの意見が出る。ガムテープではこれ以上補強できないことには気が付いたようだが、どのようにしたら底を補強できるのかは思い付かない様子。しばらく様子を見たが、どうしても思いつかないようなので、少しだけヒントを出した。

教師「汽車の底をもっと丈夫にした方がいいのよね？へこまない固くて丈夫なものないかな」

幼児から「木の板はどう？」「木の板だったら折れないよね」との意見が出るなど、補強の仕方について話し合った。そして、汽車の段ボールの底に木の板を敷いて、乗車人数も1名のみとして、お客さんを順番に乗せることにした。

5歳児6月の記録では、A児は動く車を作りたいという思いはあるものの、具体的にどうしたら動くタイヤを作ることができるのかが分かりません。ここでは、教師が作った動くタイヤを渡します。幼児は、自分たちの周囲にあるもので動くタイヤが作れることや車が動くことで遊びがもっと楽しくなることを知ります。真っ直ぐ走らせたり、積み木の斜面を使ったりすることを繰り返す中で、走らせること（距離や曲がり方）に興味や関心をもち、二つのタイヤが曲がっていると真っ直ぐに走らないなどのタイヤの動く仕組みにも気が付きます。

5歳児9月の記録では、B児は以前の体験を生かしながら材料や接着の仕方を考えて自分の作りたい赤ちゃんやベビーカーを作っています。また、友達（B児）のしていることを見て、C児は自分もやってみたいと思います。C児は、B児にベビーカーの作り方を聞いたり、B児のまねをしたりしています。B児の作っているものにヒントを得ながらも、色や屋根の形、タイヤの大きさは自分の思いを実現するために工夫をしています。教師は、幼児同士で教え合っている様子や友達の工夫に刺激を受けて自分なりに工夫をしている様子を見守り、直接的な声掛けは避け、製作に必要な材料を幼児と一緒に準備するようになっています。そのような幼児の姿から教師は、自分の思いを出し合いながら友達と一緒に試行錯誤して一つのもので作り上げることで、友達と共通の目的に向かってやり遂げる充実感や満足感を感じてほしいと思い、“わくわく造形展”でのグループ活動を設定しました。

“わくわく造形展”では、作りたい汽車のイメージを幼児同士が共有し、その思い

を実現するために、試行錯誤している様子が分かります。今までの遊びの中で、友達に自分の思いを伝えたり、友達同士で教え合ったりしてきた体験がつながっているのかもしれない。自分の思いを言葉に出して伝え、相手の思いを聞き、次第に思いを共有していきますが、その根底には互いに刺激を受け合っただけでイメージが発展していくことへの期待感や思いを共有することへの喜びがあります。走る車で遊んだ体験が、「本物のように動く自動車を作りたい」という思いにつながったり、段ボール箱などを使って自分の思い描いたベビーカーを作った体験が「自分の考えたアイデアはきっと実現できるはず」という自信につながったりするなど、過去の体験が今の幼児の思いにつながっていることもうかがえます。さらに、過去の体験から、動くタイヤの仕組みや段ボールなどの素材の特性を生かして製作している様子もうかがえます。

教師には幼児の発達に応じた関わりが求められます。5歳児6月の記録では、幼児の思いを実現するために動くタイヤを渡していますが、5歳児9月の記録では幼児が今までの体験を生かして材料を探したり、友達同士で教え合ったりしている様子を見守っています。わくわく造形展の準備（11月）の記録では、教師は、段ボールをガムテープで補強するのみでは、幼児を乗せるには強度が足りないかもしれないと考えていました。しかし、それを幼児に伝えるのではなく実際に幼児が乗ってみて強度が足りないことを実感し、試行錯誤することの方が幼児にとって大切な体験と考え、あえて幼児の活動の様子を見守っていました。自分で実感することで素材の特性について知るきっかけになっていました。また、思い通りにいかなくても諦めずに更なる工夫や改善に向けて友達と一緒に試行錯誤し、「お客さんを自動車に乗せる」という目的を達成したときの充実感や満足感を感じていました。

事例 1、2、3 から読み取れること

指導の過程の評価には、以下の 3 点が含まれます。

1. 指導の過程で見られた幼児の姿を記録し、幼児の学びや育ちを理解すること
2. その理解を基に、ねらいに関連した幼児の発達及びそれ以外の発達を読み取ること
3. 幼児の発達の読み取りから、教師自身のねらいの設定の仕方、指導や環境の構成の適切さなどについて評価すること

指導の過程の評価のためには、まず、今、起きている出来事や幼児の姿などを、具体的な場面や状況に沿ってできるだけありのままに記録し、繰り返しいろいろな観点で振り返り、多面的に理解することが重要です。

一方で、指導の過程の評価のため、ある視点やねらいを意識して、それらに関連するエピソードの記録を残すこともあります。例えば、多様な活動の中で「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう」などのねらいについて、その幼児なりに達成する姿が見られたのかどうか、どのような姿が見られたのかを評価することも必要です。

そして、幼児のありのままの姿や、ねらいに応じた幼児の姿の読み取りから、その幼児のよさや可能性を把握し、教師の環境の構成や指導は適切であったのか、今後どのような改善が必要なのかなど、明日の保育の指導につながるように評価します。

指導の過程の評価は、今日から明日へという短い見通しで行われることもありますが、発達や学びの連続性を踏まえ、1 週間、1 か月、あるいは発達する姿の「期」など、様々な見通しで、指導の過程を評価していきます。

このように、指導を通してどのように発達したのか、何を学んだのかという結果のみの評価ではなく、指導の過程で、幼児の発達や学びにつながる体験を読み取り、幼児にどのような資質・能力が育っているのかなどを捉えていくことが、幼稚園教育の質をより高めていくことにつながるのです。

(2) 教材研究に生かす

幼稚園教育は環境を通して行う教育であり、幼稚園教育では、幼児が関わる全ての環境が幼児にとっての教材となり得ます。教師は、幼児が主体的に関わり、遊び、生活していくために必要なもの、人、場などからなる園環境を具体的に構成していきます。その際、一人一人の幼児が発達に必要な体験が得られるように、環境として具体的な教材が必要となります。教師は、教材が幼児の発達にふさわしいものか、幼児が興味や関心をもち、主体的に関わりやすいものか、幼児に豊かな遊びやその中での学びをもたらすものかなどを分析し、環境の中に設定し、幼児とのより豊かな出会いをつくっていきます。幼児から見れば、教材はより豊かな遊びや生活、その中で学びを生み出す素材といえます。教師が、意図的に教材を選び、幼児との出会いをつくっていきますが、教材は、幼児が意味付け、主体的に関わって初めて、教材となります。幼稚園教育における教材は、教師が一方向的に考え、幼児に与えていくものではありません。教師は、その教材に関わる幼児の姿を通して、幼児と共に、より意味のある教材を創造していくことが求められます。

そのため、教師は日々、教材研究や教材開発を重ねなくてはなりません。ここでは、記録を見直す中で、「色水遊び」の3歳児と5歳児の遊びの様子から、発達に応じた教材の価値を捉えた事例、幼児の遊びのイメージの実現に向けた指導の大切なポイントを見出した事例、例としてコマという教材に対する幼児一人一人の取り組み方の違いを捉え、それを図示することで、幼児一人一人の多様な体験を理解した事例を紹介していきます。

事例1 幼児の発達に応じた教材を準備する（3歳児・5歳児5月下旬～6月）

幼児は人やものとの関わりをきっかけに活動を展開したり、思いを表現したり、イメージを共有したりしますが、同じ教材でも、その関わり方は年齢によっても、幼児一人一人によっても異なります。

教師は、発達の道筋を見通して、教育的に価値のある環境を計画的に構成していく必要があります。

< 3 歳児 6 月の記録から >

(前日の記録より抜粋)

5 歳児の色水遊びの様子を興味深げに見ていた A 児たち。自分たちもやってみたいのだろう。5 歳児のように草花で色を出すことはまだ難しい。明日は、3 歳児でも無理なく見立てたりきれいさを感じたりできるように、食紅で色水を作って触れられるようにしてみよう。

(本日の記録)

登園して早速、色水遊びの環境を見付け、カバンを背負ったまま遊び始めようとする A 児。園で育てていたイチゴを皆で食べた体験もあったので、最初は赤色の食紅で作った色水を置いておいた。赤色がきれいだからか幼児がどんどんテーブルの周りに集まってくる。教師が「面白そうでしょう。朝の支度が済んだら色水遊びができるよ」などと声を掛けると、A 児は身支度を終えすぐにテラスに来る。

A 児は、近くに用意しておいたプラスチックカップを一つ取り、水槽に入れてある色水をお玉ですくい上げカップに入れる。その後も身支度を終えた幼児が次々に遊び始める。

「きれい!」「見て見て。これ B ちゃんが入れた」「イチゴジュース!」と思い思いに感じたことを声に出している。「きれいだね」「楽しいね」などと幼児の思いに共感する言葉を必ず返すようにした。しばらくして「この色しかないの?」と C 児が言ってきたので、幼児が要求したときにすぐに出せるように用意しておいた、黄色の食紅を出すことにした。

別のテーブルに、まだ色の着いていない水の入った水槽を用意し、「今度は何色だと思う?魔法の粉をかけてみるね」と言って、黄色の食紅を落とす。色が黄色色ににじんで「わあ!黄色くなった」「きれい!」と、透明の水に黄色がにじんでいく様子に驚いていた。「もう 1 回、やって」という幼児もいた。

色が 2 色になったことで、色を混ぜるという動きも出てきた。教師が「きれいだね」などと声を掛けることで、周りの友達の様子に気付く幼児もいた。

3 歳児は、面白そうと感じたことはすぐにやってみようとする姿が多くあります。また、この時期の遊びの多くは、場を共有しながらも幼児一人一人が独自に遊びます。そして、信頼し身近な存在である教師と遊びの楽しさや感動を共有したいと望んでいる時期でもあります。そういった意味では、教師と幼児の関係を基盤に、幼児の世界が広がり始めていく時期といえるでしょう。また、幼児の世界が徐々に広がりつつあることから、幼児は、周囲の人やものへの関心が向き始め、気付いたことを言葉で言ったり、遊びに取り入れたりします。そうして、イメージを広げながら遊ぶ中で、身

近な大人の行動や日常の体験を自分なりに取り入れて再現するようになっていきます。

教師は、色水を通して、色の美しさや、透明の水が食紅を入れることで色が着くことの不思議さを味わってほしいと考えました。そのためには、先述の発達の特徴を踏まえた環境の構成が大切です。

まず、準備する食紅は赤色のみとしました。幼児は、目の前にたくさんの色水があるとすぐに混ぜてしまい、黒っぽい色になってしまうことがあります。また、「まずは1色から始めようね」といった教師の誘導ではなく、幼児が自ら色水遊びに関わることが大切です。そのため、あえて色数は精選し、色の美しさが味わえるようにカップは透明なものを用意しました。さらに、この時期はまだ1人で遊ぶことが多いので、安心して使いたい分だけ使えるように準備しました。ものの数が十分でないと、用具を使う順番を待ったり、教師が準備をしたりしている間に、幼児の興味が移ってしまうからです。

幼児は、このような環境が用意されていたことで、色の美しさを十分に味わうことができたので、その感動を思わず言葉で表しています。

次に、教師の関わりから考えてみましょう。3歳児は、面白そうと感じたことをすぐにやってみようとしませんが、少し触れただけで興味がほかへと移ってしまうこともあります。そのため、教師は、思い思いに感じたことを言葉にする幼児一人一人に、共感する言葉を返し、幼児が遊びに夢中になれるように配慮しています。さらに、幼児の遊ぶ様子や「この色しかないの？」との発言から、教師は、ほかの色の食紅も使って遊びを発展させていきました。幼児の言動は教師の予想を超えることがあり、教師は柔軟に環境を再構成していくことが求められます。ここでは、教師は、幼児が混色して遊ぶことも予想しながら、黄色の色水を幼児の目の前で作って見せました。

さらに、3歳児はすぐ目の前にあるものに関心をもちやすいので、安全で衛生的で使いやすいように考えて、教材はなるべく目に付きやすいように配置します。「やってみたい」と思うそのときに、環境が整っていることが大切になります。

一方、4歳児、5歳児になってくると、必要に応じて自分で探したり、要求したりするようになります。友達とイメージを共有し、自分たちで遊びをつくり上げようとしている時期であれば、自分たちで材料や素材を選んだり組み合わせたりして試行錯誤する体験もできるような教材を準備します。そのためには、友達と一緒にじっくり遊ぶ時間や場所、思いを伝え合ったりイメージを共有したりする体験、幼児同士が刺

激し合い、互いの思いや考えを認め合う体験の積み重ねができるような環境の構成が必要となります。

< 5歳児 5月下旬の記録から >

園庭のバラの花が落ち始めた。D児たちが「きれい」と言って集めて見せに来た。ただ集めるだけで終わらせたくなかったので色水遊びを提案してみた。色素が濃いので、少しすりつぶせば、色が出る。「わぁきれい」と気づき、バラの花びらを探し出す子が増えてきた。本当にきれいな薄紫やピンクの色水ができる。

漏斗ろうとや茶こし、すり鉢、すり棒などの道具はあらかじめ準備はしてあったので、一緒に使いながら使い方を伝えた。初めの何人かに伝えたが、友達の様子をよく見ているのでそれからは教師が伝えなくても友達の様子を見ながら自然と広まっていった。

D児は、水の加減も上手で、一気に入れると素材が浮いてつぶしにくいことに気づき、水さじで少しずつ足していた。D児が作った色は、本当にきれいな紫であった。E児は、最初、1人で黙々と試していたが、D児の作ったきれいな紫には惹かれたようで、D児に「どうやったら、この色できたの?」と聞いていた。

D児はE児に作り方を見せて教えるが、E児はなかなかそれが実現できない。花びらの濃さやすりつぶし方の違いなのか。どうするのかと思い、しばらく見守る。E児は、D児と同じきれいな紫を作ろうと、水の加減を調整して何色も作っているうちに、ピンクや薄紫、紫などのグラデーションができていた。D児から「Eちゃんのも、きれいだよ」と認める言葉が出てきた。E児は嬉しかったようで、その後、2人は意気投合。

来週は卵パックを出してみよう。色のパレットのように使えるかも。スポイトもあればもっと微妙なさじ加減を楽しめるかも。魅力的な道具で動きを引き出す作戦。

< 週明け月曜日の記録 >

登園後、D児たちは、すぐに色水遊びをしようと誘い合ってバラの花びらを集め始めた。卵パックやスポイトが新たに加わったので、水を調整する動きが見られた。

E児が「なんで押すと水が入るのだろうね? どういうこと(仕組み)だろうね?」と言うと、D児も「どういうことだろうね」と楽しそう。D児とE児は、今週も気持ちがつながっていた。何度もスポイトで水の出し入れを繰り返していた。その後は、花びらの数で色がどんどん濃くなっていくことを試し、卵パックに色水を並べていた。2人は「それ何枚?」「じゃあ私はもっと濃くしてみよう」など、色の濃淡を楽しんでいた。

新たに遊びに加わったF児は、「葉っぱもできるかも」と何種類かの葉っぱを集めてきて「実験だ」と言って色の出具合に関心が向いていた。D児とE児が「実験?」「実験、いいね」と声を合わせると、F児も「そう実験」と嬉しそうに笑っていた。その後3人は実験を始めた。この3人の組み合わせは意外。今まであまり関わっていなかった3人だが、個々の追究もできて、「実験」という言葉で3人だけの特別感も出てきた。

もっと色が出る花が咲き出したら色のきれいさにも気付かせたいな。色の違いや色を作る楽しさ、予測したり工夫したりする姿も出てくるかな。そのときはもっときれいに色水の違いが分かるような透明容器やコーヒーフィルターなども出してみよう。

5歳児はこの時期になると、遊びの中で自分なりに課題をもつと、考えたり試したりして実現しようとするようになります。また、これまでの体験を生かして、必要な材料や用具を自分で選んだり探し出したりして使おうとするようになります。友達の動きや言葉に刺激を受けて、新たな課題を見付けたり新しい方法を試したりするようにもなります。

このような5歳児の発達を踏まえて、教師は、幼児が春の自然物に触れながら、自分の課題をもち、様々なことに気付き、感じ、考え、発見を楽しんでほしいと願い、園庭に落ちたバラの花を幼児が集め始めた動きを捉えて、自然物を使った色水遊びを提案しました。教師は、幼児が花びらを集める動きが出ることを想定し、事前準備として色水遊びができる教材を用意しておきました。そして、興味を示した幼児に、道具の扱い方を一緒に使いながら伝えていきます。その後は、友達同士で道具の使い方や花のある場所などを伝え合う姿を見守っています。

この時期の5歳児の育ちとして、気付いたことや考えたことを伝え合いながら遊びを進めてほしいという願いを込めて、一人一人の実態を踏まえて教師が関わり過ぎないように心掛けているため、自然物や道具などのある場所や使い方などを友達同士で伝え合い広がっていく様子が見られています。

また、幼児が、すり鉢に入れる水の量を花びらが浮かないように水さじで調整したり、スポイトを実際に使いながらその仕組みを知ろうとしたりする姿からは、道具や素材をどのように扱えば自分の思うようにできるかを体験的に学んでいる様子が読み取れます。

次に、他の幼児との関わりについて考えてみましょう。初めは個々に色の出具合を

試したり、自分だけのオリジナルを追究しようとしたりしていましたが、新たに幼児の動きを誘発したり知的好奇心をくすぐったりするようなスポイトという道具を用意したことによって、周囲の幼児の言動を受けて色の濃淡にこだわって作る、新たな素材である葉っぱを選んで試すなど、周囲の幼児にもよい刺激となり、友達の動きを取り入れていました。

さらに、同じ場にいた友達同士で、「〇〇にしてみよう」「いいね」「やってみよう」などと目的を共有しながら、「もっとこうしたい」という思いの実現に向けて、どうしたらできるか、考えを出し合いながら遊びを進めています。5歳児になると、友達との刺激のし合いが遊びを深めていきます。ものとの出会いだけでなく、人とどう出会うかの関係性を構築することも大事なポイントとなります。

事例2 遊びのイメージを実現するために（4歳児12月）

A児の遊びのイメージが実現するよう、教師は幼児のイメージを言葉や表情、仕草から読み取りながら、そのイメージが具体化し、友達と共有したり、広がったりするようにします。具体的な遊びの記録を通して、A児のイメージを実現するための指導の在り方、教材研究の大切なポイントについて考えた事例です。

< 4 歳児 12 月の記録から >

①遊びの始まり

A 児が「剣を作りたい」と言ってきた。そろそろ武器作りからは卒業してほしいと思っていたので「戦いじゃない新しいものは考えられない？」と返してみた。しばらくすると「マジックやりたいから帽子作って」と言ってきたので、A 児なりに考えたことを実現させたいと思った。話を聞きつけて近くで製作をしていた B 児も「僕も帽子作りたい」と言い始めた。シルクハットのイメージらしいので、教師が考え、丸い型紙でつばの枠を一緒にかき、2 人が切れるようにした。組立て方を伝え、教師も少し手伝いながら完成させた。「ステッキも作りたい」と言うので、新聞紙を固く丸めて作った。A 児は、帽子とステッキを「家に持ち帰りたい」と教師に言った。家で親に見せたり、遊んだりしたいのだろう。

②マジックショーが始まる

週明け、遊戯室で、A 児が大型積み木で台を作り、マジックショーを始めていた。帽子を脱いで台に置き、ステッキでトントンと叩く。中から折り紙で作ったものを一つずつ得意げに取り出し「ちょうちょです！」と披露していた。お客さんである他の幼児から「オーッ」と歓声と拍手が起こる。

③マジックショー2日目

朝からマジックショーをやりたいと言う。A

教師の幼児理解と教材の工夫

☆そろそろ武器作り以外に、いろいろな遊びへと広がってほしい

←A 児の「マジックやりたい」というイメージを実現できるようにしたい

< 遊びの発展に向けての教師の思い >

→遊びが続いてほしい、週末に家に持ち帰って遊ぶと、それで終わりになるかもしれない

↓

降園時に母親に見せることで納得し、幼稚園に置いておくことになった

→週末をはさんでも遊びが続いてよかった

4 歳児ができそうなマジックの中身は何だろう？「筒から花が出る」「白鳩を作る」等が思い浮かぶが、作るのは大変そう

→帽子をステッキで叩くと物が出てくるアイデアは教師の予想とは違った

教師のイメージを早く出さずによかった

→A 児が自分で考えて実現できたことにとっても意味がある

児は「今日は廊下でやる」と言うが、電車ごっこをやっていて適当な場所がなく、昨日と同じ遊戯室で始めるよう勧める。

A児に「マジックショーのいい音楽を見つけたわよ」と声を掛けるとなずいたので、かけてみる。しかし、少し経つとA児は「うるさい！」と音楽を切ってしまう。ショーは3日目になり、内容が同じなのでお客はすぐになくなってしまう。

「次にやりたいマジックは何？」と聞いてみる。「人間が入れる大きな箱に剣を刺すマジックがいい」

④マジックショー3日目

「先生、音楽かけて！」とA児に呼ばれて、急いで遊戯室へ向かう。遊戯室にはA児はいないし昨日までの舞台もなく「どこに」と思っていると「先生こっち（コート室）だよ」とA児が別の方から呼びに来た。場所が変わっていて驚く。コート室に保育室から椅子を運んでいた。「電気を消したい」と言われ、スポットライトを出してみる。5歳児G児がマジックショーに興味をもち、関わっていた。

床に帽子を置いてやっていたのが見えにくかったようで、3歳児担任が青い紙を貼った段ボール箱を出してくれた。その段ボール箱にG児が金色のテープで？マークを付け、伏せた段ボール箱の中に人が隠れて動くというマジックも始まった。

→マジックショーは「オリーブの首飾り」の曲をかけると盛り上がるのでは？

→新しい内容が加わるとよいのでは？

→大掛かりな準備が必要

剣を刺す動きもあえて、幼稚園でやってほしいものとは思えない

→何か他にはないものか？

→「音楽かけて！」と言われ戸惑う

→ショーをやる場所が移った

3歳児が新たにお客になって見に来たり、5歳児が加わったりした。

○スポットライトはショーのイメージに合っていたのだろうか？

→他の教師との連携は大切

→段ボール箱一つで、遊びが変わる！

A児が思い付いた遊びは数日続き、その中で自分のイメージが実現した満足感を味わっていました。記録を見直す中で、教師がA児の遊びにふさわしい教材となるよう、次の3点のことを大切にしました。

◎幼児のイメージを生かし、実現する

A児のイメージは淡いものだったかもしれませんが、しかしシルクハットができたことで遊びが始まり、素朴な内容ながらショーの中で活用されました。教師は道具、曲、照明等を提案したり、ときには撤回したりして、遊びを支えようとしています。

◎遊びが楽しくなる場、空間を選ぶ

遊びの場を幼児と共に考え選ぶことも教材研究の一環です。この事例では遊戯室で晴れやかにショーが始まりましたが、幼児自身が場を移したことで、こぢんまりとした場だからこそ新たな盛り上がりを見せました。記録を丁寧に振り返ることで、幼児にとって遊びを支える場や空間の意味を確かめることができます。

◎仲間や異年齢とのつながり、教師の連携

遊びが継続するプロセスで、A児は仲間と出会い、共に楽しんでいます。お客として年少児と、あるいは助言者として年長児と関わっていました。こうした仲間との関わりをもたらず教材を提供することが教師の役割です。さらに、担任以外の教師との連携も大切です。それぞれの教師が機転を利かせて関わり、遊びに必要なものを提案することが遊びを豊かにします。

事例3 コマ回しの取組から（5歳児1月中旬から2月中旬）

A教師の学級では、今、コマ回し（投げゴマ）が遊びの中心になっています。遊びが始まった12月頃は、コマを回せるようになることに意識が向いている姿が多く見られました。1月になり、コマを回すことができるようになった幼児が増えるにつれ、同じ「コマ」という教材でも、幼児一人一人にとって体験する内容や、興味や関心の向き方が違うことにA教師は気付きました。そこで、A教師は、次のように考えました。

- 幼児一人一人の興味や関心を捉えること
- 教材を開発、工夫し、それぞれの幼児の興味や関心に応じた体験ができるようにすること
- 友達が取り組んでいる姿に目が向くようにしたり、新たな刺激としたりすることができるようにすること
- 学級の皆でする活動を通して、新しい刺激を与えたり、皆で競ったり喜び合ったりすることができるようにすること

A教師は、試行錯誤しながら取り組んだことを図示し、記録を視覚的に分かりやすくまとめてみました。そこから、一つの「コマ」という教材を深め、広げることで、幼児にとって多様な体験ができることが浮かび上がってきました。

図2 コマ回しに関わる活動の記録(1月〇日から2月〇日)

図2 コマ回しに関わる活動の記録(1月〇日から2月〇日)



●コマを回すためのコツをつかもうとしている幼児に対して
 →コツをつかむための共通アイテムを伝え、学級の幼児同士で伝え合うことができるようにする。
 教材：ひもを巻く時の方向(時計回りに巻いていく)、コマひもの末端部分にこま結びを作っておき、指が引っかかりやすくする



●友達と競うことを楽しむ幼児に対して
 →幼児の技能に応じながら、競うことがより楽しめる場を工夫していく。
 教材：ビニルテープで「土俵」を作る。競い合うコマがぶつかりやすくなるような場作りをする(土台を活用する)、積み木やブロックなど、壁(競技場)を作ることに意識が向くようにする



●目標物をめがけて回すことを楽しむ幼児に対して
 →段階的に目標をもって取り組んだり、自分なりに工夫したりして楽しめるようにする。
 教材：様々な大きさや形の器(たらい、洗面器、なべ、フライパン)、積み木を使ってコースを作る

- 学級の皆でする活動を通して
- 「コマ回しチャンピオン大会」
 →学級の皆で、またはグループ毎や代表者同士で競わせ、自分の力を発揮したり、友達の力に気付いたりすることができる機会とする。
 - 「皆で回すコマ大会」
 →学級全体で一斉にコマを回し、何人成功できたかを記録する。定期的に行い、目標をもったり、1人でも多くの成功者が出るようにすることに意識を向けさせ、友達にコツを教えたり、皆で記録を伸ばすことを喜んだりすることができるようにする。
 - その他：一人一人の幼児の取組の姿を全体の場で伝える(披露してもらおう)機会を設け、友達の頑張りや工夫している姿を新たな刺激としていく。

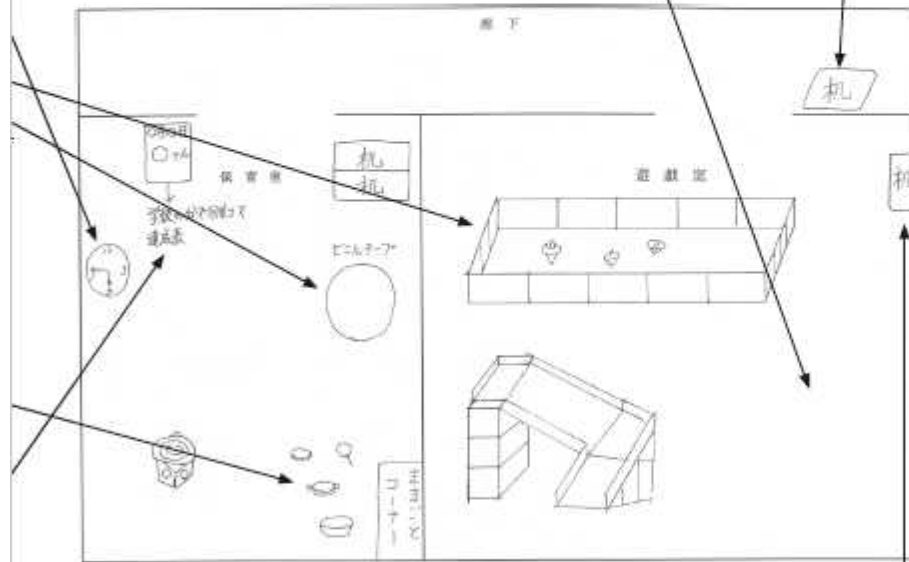
●「技」を習得しようとする幼児に対して
→段階的に難易度の高い内容に挑戦することができるようにする。

教材：「手乗せ回し」に向け、下敷きを活用。次に手でコマをすくい上げて手の上で回す方法を伝える。教師も共に挑戦しながら、ダイレクトに手の上でコマを回すことに取り組めるようにしていく



●新たな刺激とするために
自分の使うコマ以外のコマに触れる機会を作る。

例：年中・年少時に使ったコマを使い、競ったり、「技」に挑戦したりすることができるようにする。
鉄コマ、大型のコマなど、様々なコマに触れ、試すことができる環境をつくっておく。



●コマが回ったときの色の変化を楽しみながら、試行錯誤する幼児に対して

→試す・変化を楽しむ・確かめることが繰り返して楽しめるようにする。

教材：重ね塗りができるポスターカラーマーカー
→新しい刺激を与え、色やスピードの変化が楽しめるようにする。
教材：金や銀の工作紙を回っているコマにかぶせ、スピードが出ているときに紙が飛ぶ「手裏剣」を提示する

事例 1、2、3 から読み取れること

幼児が環境に関わる際には、幼児の主体性が大切です。幼児期はまだ学ぶということを意識している時期ではありませんが、楽しいことや好きなことに集中することを通じて様々なことを学んでいきます。この楽しいことや好きなことは、幼児の発達に応じて変化していきますし、幼児一人一人によっても異なります。そのため、教師はあらかじめ教材のもつ特質や特性をよく理解し、幼児の遊び方や関わり方を予測しながら、幼児の活動をどのように広げ深めていくのかなど、教材のもつ可能性を広く捉え、幼児にとって魅力のある環境の構成をすることが大切です。

事例 1 では、3歳児と5歳児の色水遊びの様子を取り上げています。3歳児は、幼稚園での遊びや生活を通して、次第に興味や関心が広がっていく時期であり、教師が準備したものとの関わりが中心となります。幼児は、教師がものを通して見せてくれる世界を楽しんでいるとも言えるでしょう。そして、自分が、色水を混ぜると色が変わるといった、自分の行動により周囲の環境に変化が生じることに気づき、もっとものに関わりたいと思うことなのでしょう。一方、5歳児は、自分の思いを実現するために試行錯誤している様子が読み取れます。スポイトなどの用具を使ったり友達の工夫を取り入れたりしながら遊ぶことで、さらに、イメージが広がり遊びが発展している様子がうかがえます。このような姿の背景には、3歳児のときの色の美しさの感動、色を混ぜたときの驚きなどがあることなのでしょう。さらに、例えば、4歳児のときの色水でのジュース屋さん遊びで、イメージする楽しさや友達と思いを共有したり実現したりすることなどが、5歳児の活動につながったのでしょう。

事例2では、イメージすること、イメージを共有することなどについて捉えています。

例えば、マジックショーのマジックやマジックをする人についての身近な体験から、イメージを形成します。しかし、自分もやってみたいと思っても、そのイメージを表現する媒体としてのものや、その表現を共有し、支え、広げる人などの環境がなければ、実現しないまま、消失してしまうかもしれません。また、幼児のイメージや発達にふさわしくない環境を、教師側の一方的な思いで提供すれば、やはり、幼児の主体的な表現は実現せず、教育のねらいは達成されないでしょう。事例2では、4歳児との対話を通して、幼児のもつイメージや思いを理解し、共有しながら、それを実現できるように教師が具体的な環境を構成していく過程が示されています。教師は遊びが盛り上がるように、問いを発したり、確認したり、広げたりするように言葉掛けをしたり、見守ったりすることを通して、幼児がイメージをより豊かにできるようにします。一方で、マジックショーが盛り上がるように音楽をかけて、幼児に拒否されることもありましたが、試行錯誤しながらも、幼児のイメージが実現し、遊びを楽しめるよう支えている教師の姿が見て取れます。

事例3では、幼児の興味や関心に応じた環境の構成のためには、教師が教材の教育的価値を広く捉えておくことの大切さが分かります。コマ回しでは、コマが回せるようになることは大事なことです。コマという教材が一人一人の幼児にもたらす意味や体験はもっと幅広いものです。教師は、保育室のどこでどのようなコマの活動が展開されているかを記録し、教材が幼児に生み出す遊びの可能性と、それぞれの遊びにおける具体的な指導の観点を整理しました。

幼児の遊びを充実させるために必要な教材を準備する際には、教材の特性を知り、その教材で体験できることは何かを捉えることが大切です。その上で、幼児がその教材と関わることを考えます。幼児は、その教材によりやりたいことが実現できるのか、発達に必要な体験が得られるのか、遊びはどのように変化するのかなど、幼児にとっての教育的価値を捉えることが大切です。

また、教師が幼児と共に遊びを楽しんだり、感じたことに共感したり、教材との関わりモデルとなったりします。その一方、教材に触れることで生じる不思議さや疑問について、あえて解決のヒントを出さずに見守ることで、幼児の学びが豊かになる

こともあります。一人一人の幼児の教材への関わり方をよく見ながら、その幼児への教師の関わり方を変えていくことも大切になります。

さらに、環境の再構成を行うタイミングも重要です。「〇〇があるともっと遊びが盛り上がるかも」などと、教師の思いで環境の構成をすることがありますが、遊んでいる幼児一人一人の言動をよく感じ取ることが大切です。教師は常に、主体的に環境に関わる幼児の内面を感じ取るよう努めつつ幼児に寄り添い、幼児の興味や関心を大切にしながら、必要に応じて、幼児に関わったり環境を再構成したりする柔らかな心を持ちたいものです。

(3) 記録を指導計画の改善に生かす

指導計画の作成に当たっては、幼稚園教育要領に示されるねらいや内容を踏まえて、幼児の実態を理解し、発達を見通しながら、適切に具体化したねらいや内容を組織します。さらに、ねらいや内容を達成するために適切な環境を構成し、幼児が主体的に環境と関わり、豊かな遊びや学びが生まれるような教師の関わりを考えます。

また、指導計画のねらいや内容、環境の構成が、幼児の実態に即しているかなど、教育の実践から評価を行い、その結果に基づいた改善がなされ、新たな指導計画が作成されます。この循環の中で、常に指導計画の改善が図られていきます。

保育を振り返り、指導計画を改善していくためには、保育の具体的な記録が必要になります。幼児の遊んでいる場面を通して、行動の意味や発達を理解し、ねらいや内容が適切であったか、環境の構成が望ましかったかなど、記録から読み取ることが重要です。その日の記録は短期の指導計画の作成につながります。また、一定期間、継続した記録をつなぎりとして理解することで、長期の指導計画の作成や改善に生かすことができます。

他の教師と記録を通して語り合うことで、保育を振り返る視点や記録を読み取る力が形成されたり、1人では考えられなかった幼児の発達や接し方などについて多面的な理解が深まったりします。それに基づいて、指導内容や方法についても改善され、実践の質の向上が促されていきます。

指導計画は、あくまでも幼児の発達を予想し、指導の方向性を示したものであり、過去の経験のみにとらわれることなく、記録に基づいた幼児の実態から、改善が図られることが必要です。

活動の結果だけを評価するのではなく、指導計画の改善を図ったことで教師や幼児がどのように変容したのか、その過程を記録し理解することで成果が見えてきます。そうすることで記録の効果が分かり、初めて自分の中で生きた記録となるでしょう。

事例1 保育の過程の評価が次の指導計画へとつながる（5歳児4月下旬）

この事例の幼稚園では「主体的に環境に関わる幼児の育成」を目指して教育を展開していることから、教師は幼児が環境と関わる姿を通して自分が感じたことや疑問に思ったことなどを記録しています。その記録から幼児の行動の意味を捉え、変容する過程を教師全員で評価しています。さらに、評価したことから指導計画のねらいや内容・環境の構成や教師の援助を修正し、幼児や教師とのつながりについて、再度記録から検証するようにしています。この事例は、ウサギに関わる幼児の姿の記録から、行動の意味を理解し、幼児の育ちを評価しながら、指導計画の改善へとつなげた事例です。

<年少さんだから>

（2年保育5歳児4月下旬の記録から）

5歳児がウサギ小屋でウサギの世話をしていた。年少児がやってきて、すでに切り終わった野菜を包丁で切りたがる姿が見られた。5歳児はせっかくきれいに掃除したのに、散らかされて困っている様子であった。1本のニンジンを2人で取り合う姿が見られたので、ニンジンを半分に切って渡してやった。そのニンジンを切りたがる年少児に「危ないから小さくしてあげるね」と切りやすくしていた。

ひどい抱き方をしている年少児のことが気がかりで「あかん。そんなことしたらかわいそうや」と思いあまって注意していた。

《行動の意味を理解する》

教師は記録から、行動の意味を「主体的に環境に関わる」という育ちの方向性で理解するようにした。

- ・ウサギの世話をすることに、5歳児としての誇りをもっている。
- ・困ったことをする年少児は嫌だけれど、年少児のやりたい気持ちも理解している姿が見られる。
- ・年少児の取り合いをする姿からどのようにしたらよいのか判断し行動している。
- ・ウサギの立場に立って、してはいけないことを伝えるが、具体的ではない。



<天国のウサギを思い出して>

ウサギの世話をしながら、R児が生まれたウサギを見て、「そろそろウサギの名前考えなあかん」。M児「ゴクウは。ゴクウって付けたら死んだゴクウのこと思い出すし、いつまでも忘れないし」。

R児「リボンちゃんも付けてあげよう。天国で喜ぶわ。私たちも前死んだゴクウやリボンちゃんのこと思い出すもんな」。

新しく生まれたウサギに名前を付けることで話が盛り上がった。

年少時に大好きなウサギの死を体験した幼児は、そのウサギのことも思い出しながら、今いる新しい命にも心を寄せていることを感じた。このことをR児とM児がクラスでお知らせをすると、各クラスで1羽ずつ名前を決めることになり、他のクラスにもお願いした。

《行動の意味を理解する》

- ・ 当番でウサギの世話をしているの
で、ウサギの成長を捉え大きくなってきたことを感じている。そのことが「そろそろ」という言葉に表れている。
- ・ 以前死んだウサギのことを忘れないようにしたいというウサギへの愛情を感じる。
- ・ ウサギに名前を付けることをきっかけに、死んだウサギのことを思い出し、今いるウサギに心を寄せている。ウサギの死を体験したことで、ウサギのことを思う優しさが育ってきているのだろう。

<評価>

A教師が同じ週に記録した2事例を基に、教師同士で話し合い評価を加えた。

○年長児は年少児の行為に最初、困ったり戸惑ったりしていたが、年少児の「ウサギにニンジンを食べさせたい」という思いを感じると、自分なりに解決できる方法を考えようとした。このことから、年長児としての喜びや自覚をもっている姿と評価できるのではないか。

○ウサギへの愛情をもって世話をしていた年長児だからこそ、年少児の思いを受け止め、見守る姿が見られたのではないだろうか。このことは、年長児がウサギの扱い方を知らせるよい機会、相手に分かるように言葉で伝えたり、具体的な方法を考えたりするなど、判断力や思考力を育てる機会にもなるだろう。

○年長児が年少児の時にウサギの死に向き合った体験を大事に取り上げてきた。この体験がウサギに愛情をもち、心を寄せて世話をすることにつながっている。ウサギなどの生き物にどのように接するのか、日々の積み重ねが大切である。

○ウサギなどの小動物の飼育を通し、年長児は世話をできる誇りや自覚をもち、年少児は関わりから情緒の安定を図ることができる。小動物の飼育の意味を問い直し、指導計画に位置付けることが大切である。

<記録から評価の循環の中で行われる指導計画の改善>

幼稚園における指導は、指導計画のねらいや内容に基づき環境を構成し、活動を展開しながら必要な援助を行うものです。幼児の発達の理解と教師の指導の改善の両面からの評価が必要となります。幼児の発達から見て、指導計画のねらいや内容が適切であったか、環境の構成が適切であったかなど指導の過程を捉えながら、次の指導計画に生かすことが必要です。

<評価から週案の内容を修正>

期間案	ねらい	週案	ねらい
I 期 4～5月	○年長になった喜びをもち、気の合う友達や先生と一緒に遊ぶ 内容 ◎身近な動植物に関心をもって世話をする	4月 4/18~4/22	○やりたい遊びを見付け、気の合う友達と思いを出して遊ぶ 内容 ◎友達と一緒に戸外で伸び伸びと遊び、体を動かしたり、砂や水の感触を楽しんだりする



週案に内容を追加する

週案	内容
	◎ウサギに心を寄せて世話をし、年少児にも自分たちなりにかわいがり方を知らせようとする



<指導計画修正後の幼児・教師の変容の記録>

幼児の変容

- ・年少児がウサギのところに来ると、抱き方や関わり方を知らせている。
- ・年長児がウサギをかわいがっている姿を見て、年少児もまねをしている。
- ・ウサギの名前をクラスで決め、幼稚園全体にウサギへの関心が高まった。またクローバーやヨモギを食べさせに土手に連れて行ったり、散歩のときに暑さから幼児達で夏帽子を重ね、ウサギに陰をつくったりするなど大切に関わろうとしている。



教師の変容

- ・ウサギの名前を写真と共にウサギ小屋や掲示板に貼り、園全体に自然な形で情報が伝わり、共通の話題や関心事になるように環境づくりをした。
- ・年少児のとき、体験したウサギの死や、新たなウサギの誕生など、その時々ので出来事が積み重なり幼児の心に刻まれていくことを改めて感じ、飼育する意味を確認するとともに、ウサギにとってのよりよい飼育環境を見直し改善しようとした。

事例2 教師からの刺激を受けて（3歳児5月中旬～6月初旬）

A園では今年度、「心も体もたくましい幼児の育成」を目指して、運動的な遊びに重点をおいて指導しています。園内研究日には、運動的な遊びの場面の記録を持ち寄り、幼児が体験していることや環境の構成の在り方を探るようにしています。3歳児の記録を通して考えてみましょう。

<3歳児 5月中旬 自ら選んでする遊びの中で>

3人の幼児がヒーローになり園庭のジャングルジムに登って遊んでいる。教師が近付くと、3人は笑いながら「バーン、バーン」と攻撃するような仕草をする。教師は、この3人に走る、登るなど、いろいろな動きを楽しんでほしいと思い、その攻撃から逃げるように走ると、3人は、ジャングルジムから降りて教師を追いかけてくる。

しばらく走った後、教師は「疲れちゃった。休むおうちがほしいな」と言って、園庭に家をかき、「ここにいるときは捕まらないことね」と声を掛ける。3人は最初その意味が分か

らず、家に入ろうとしなかったので、「じゃあ、今度は先生が捕まえちゃおうかな」と家から出ると、3人は嬉しそうに逃げ出したり、家に入ったりするようになった。

それを見ていた他児も家の中に入って来る。教師に捕まえてほしくて挑発してくる幼児、教師を追いかけることに加わるが捕まりたくないのですぐ家に戻る幼児、家の中から一歩も出ないでニコニコ見ている幼児もいる。

< 考 察 >

○幼児が体験していること

- ・教師や周りの幼児を追いかけること
- ・教師や周りの幼児に追いかけられること
- ・「家」があることで安心し、その中で周りの幼児の様子を見ているだけでも追いかけてっこをしているような楽しい気持ちになっていること

○環境の構成

- ・幼児の遊びの流れに沿って教師が加わり、追われたり追いかけたりする楽しさを感じられるようにした。
- ・追いかけたり逃げたりなど、一人一人が楽しんでいることに共感して声を掛けた。
- ・興味はあるが入れないという幼児にも、「家」という安全地帯をつくることで、目に見える安心感を与え、参加している気持ちになるようにした。
- ・「家」は地面にかいたものなので、幼児が安心して自由に出入りを楽しめた。
- ・単純な追いかけ合いは、見ているだけでも楽しく、教師と一対一の関係も楽しむことができるなど、3歳児が気持ちの向くまま、思い思いに楽しさが味わえる要素がある。

< 3 歳児 6 月初旬 学級全体での活動 >

5 歳児が遠足に出掛けたことから、3 歳児も学級皆で遠足と称してホールに遊びに行く。ホールには、事前に、マット・通り抜ける箱・ビニールトンネル・巧技台で組み合わせた坂を用意しておく。

その遊具を見た幼児は「すごい」と声をあげる。教師は「ダンゴムシ遊園地だよ」と 3 歳児が最近親しんでいるダンゴムシのイメージをもてるように言葉を掛け、より興味をもたせた。まず、教師が、ダンゴムシになって一通り動いて見せる。見ていた幼児は「やりたーい」「私はカタツムリでやる」など期待を口にする。

初めは教師をまねる動きが多かったが、次第に通り抜ける箱はくぐるだけでなく上を渡ったり、坂やマットの山をはったり転がったりと、自分なりに考えたいろいろな動きが出てきた。教師はなりきっている幼児の動きに合わせて「カエルさん。ジャンプ上手だね」と認めたり、「本物のカタツムリみたいだね」と幼児の思いに添って言葉を掛けたりした。

< 考 察 >

○幼児が体験していること

- ・ 広々としたホールで開放感を味わいながら遊ぶこと
- ・ 初めて触れるマットや巧技台などで遊ぶ楽しさを感じる
- ・ 身近にいるいろいろな生き物になりきって体を動かすこと
- ・ 何度でも自分のペースでコースを回れること

○環境の構成

- ・ 幼児が期待をもってホールに行くことができるよう、5 歳児と同じ「遠足」という言葉で誘い、3 歳児のみで安心して、また、安全に遊ぶことができる時間や場をあらかじめ設定した。
- ・ 喜んで運動的な遊具に関われるように、親しみのある「ダンゴムシ」という言葉を掛け、動きたくなる雰囲気づくりをした。
- ・ 幼児がイメージをもち、なりきって伸び伸びと体を動かせるような声を掛けた。一人一人の幼児のなりきっている動きを認めたり、楽しさに共感したりした。
- ・ 遊具を周回できる設定にはしたが、幼児一人一人が自分の興味や関心をもった道具を繰り返して楽しむことができるようにし、満足感を十分味わえるようにした。

上記のような記録とその考察から、I 期の幼児の具体的な姿を見直しました。

- ・この時期の3歳児は、安心・安定してくると教師のすることに興味をもって動き出す。皆と一緒に過ごしてはいるが、教師と一対一の関係で自分の世界を楽しんでいるのではないか。
- ・幼児は教師の言葉を聞いて動いているのだろうか。言葉だけでなく、教師の楽しそうな動きが、幼児の動きを誘う大きな要素になっているのではないか。
- ・幼児が身近なものになりきって動けるように、教師がイメージを受け止めて、掛ける言葉や認める行為が効果的である。



記録を通して気付いたことや実際に行った教師の関わり等から、今までの指導計画を見直し、次のように改善してみました。

A園指導計画 3歳児I期

	改 善 前	改 善 後
ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> ・先生に親しみを感じながら、自分の好きなものや場、遊びを見付け、安心して過ごす。 ・先生のすることに興味をもち、皆と過ごす楽しさを感じたりする。 ・先生と関わりながら、幼稚園での過ごし方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生のすることに興味をもち、先生の周りで過ごしたり、<u>自分なりに遊んだりする楽しさを感じる。</u>
内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・先生の誘いを受けたり、自分で興味のある遊具や遊びを見付けたりして遊ぶ。 ・先生の準備した新しい遊びや環境に興味をもち、やってみようとする。 ・周りの幼児と同じように動いたり同じものを身に着けたりすることを楽しむ。 ・先生の言葉を聞きながら、動くことを楽しむ。 (一部抜粋) 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生の言葉や動きをまねて、<u>自分なりに体を動かすことを楽しむ。</u>
環 境 の 構 成 ・ 指 導 上 の 留 意 点	<ul style="list-style-type: none"> ・学級全体活動でも、教師と一対一で関わっていると感じられるようにする。 ・教師と一緒に身近なものになりきって遊ぶ場面や単純な動きを繰り返し楽しめる環境をつくる。 (一部抜粋) 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒に身近なものになりきって<u>繰り返し遊ぶことのできる環境を用意し、イメージがもてるような言葉掛けをしたり、一人一人の動きを認めたりする。</u> ・<u>眺めている幼児の表情などから、心の動きを丁寧に読み取り、タイミングを見ながら誘っていく。</u>

このように記録を取り、様々な視点から検討を積み重ねることで、その時期の幼児の遊びや生活によりふさわしいねらいや内容、環境の構成・指導上の留意点が見えてきます。それらを今の指導計画と照らし合わせ、幼児の実態を捉えたよりふさわしい指導計画へと改善することが必要です。

事例 1、2 から読み取れること

幼児一人一人が幼稚園での集団生活を通して、幼稚園教育の目標を達成していくためには、まず、教師が、それぞれの発達にどのような体験が必要なのかなどを長期的に見通して、指導の内容や方法を具体的に構想して指導計画を立てることが必要です。さらに、具体的な指導においては、あらかじめ立てた計画を念頭に置きながら、幼児の実態やそれぞれの園の実情に応じた柔軟な指導をすることが求められます。

指導計画は一つの仮説であり、実際に展開される遊びや生活を記録し、指導の過程を振り返り、評価することにより、常に改善されるものです。このような指導計画の評価や改善には、指導の過程で見られる一人一人の幼児の発達や学び、そして、それらを理解し、関わる教師の記録が必要です。

事例 1、2 のように記録を基に教師が個人や集団の育ちを振り返り、指導計画の評価や改善を行うことにより、翌日の指導の手立てがより具体的になり、今日から明日へ、今週から来週へ実践の質が高まっていくのです。

方向目標としての幼児の発達の姿をイメージしながら、一方で、目の前の幼児の遊びや生活によりふさわしく柔軟な指導を行っていく際に、指導計画は欠かせません。

記録を基に実践を振り返り、考察し、保育の評価をしていくことは、よりふさわしい教育のねらいの設定及び内容、環境の構成など指導上の新たな留意点を見出し、指導計画の改善や実践の質の向上につながっていきます。

(4) 記録を評価に生かす

幼稚園における指導は、幼児理解に基づく指導計画の作成、環境の構成と活動の展開、幼児の活動に沿った必要な援助、保育の評価に基づいた指導計画の改善という循環の中で行われます。

保育における評価は、その循環する指導の過程の全体に対して行われるものです。生活の実態や発達や学びの理解は適切であったかどうか、それに照らし合わせて、指導計画のねらいや内容、環境の構成、指導は適切であったかどうかを評価し、指導の改善につなげていくためのものです。

本項では、幼児の育ちをどのように理解し、環境の構成や指導につなげるか、そして、保育の過程で幼児の姿がどのように変化しているかを5歳児後半の記録から捉えようとした事例を取り上げます。この時期になると日常的な遊びや生活の中に小学校へとつながっていく発達や学びを記録から見ることができます。

また、5歳児後半の記録を生かして指導要録をまとめている事例や、記録を基に小学校教師と協議し、幼児期の幼児の姿の共通理解を深めている事例を紹介します。

事例1 考えを出し合って応援する仲間 (5歳児2月)

幼稚園教育においては、幼児一人一人の自発性や主体性を基に、協同する体験を大切にして教育を展開し、幼児期の教育から小学校教育への移行が円滑に図られるようにしたいと考えています。

2月2日

幼児12人が園庭に集まり、作戦会議で使うベンチを運んだり、コートの白線を引いたりなど自分たちで準備をする①。白線が曲がっているのを見て「へろへろドッジボールや」「こっちの方が広い」と言う。教師が「コートの広さを確かめてみようか」と提案すると皆で「1、2、3…10歩」と歩く。反対のコートも同じように歩くと「1、2、3…10歩」と同じだった②。幼児は「10と10で同じやな」と納得した。教師も「ほんと、10と10で同じ広さやね」と確認した。

コートが完成しグーとパーでチームを分ける。A児「パーチームこっち集まれ」と呼び掛けた。集まってみると人数が違うことに気づき「ずるい。そっちの方が多い」と言うとB児

は「2人でしょう」と提案する。2人チームになってジャンケンをやり直し③、「グーこっち」、「パーこっち。白帽子な」、「よーい、はじめ」と張り切ってA児はゲームを始めた。外野に出た友達に「なに当たってるのや」と言ったり、ボールを投げる友達に「○○ちゃん、行け！」と互いのチームを応援したり④、ボールがどちらのチームにあるのか確認しながら進めていた。

A児とC児が外野のボールの取り合いになった。前日にも2人でボールの取り合いからけんかをしたときは、一緒に投げようと仲間で相談して決めていたため、2人で一緒に投げることになった。うまく投げられない様子を見ていたD児からは「そんなんパワーが弱まるわ。C君たち弱かった？」と言ひ、2人は「一緒に投げるのはあかん。次はやめとこう」と互いに話し合っていた⑥。

E児が最後に1人コートに残り、味方の外野に「こっち」と指示しながら投げている。E児と同じチームの幼児は「当てられるな」、「しゃがんで」、「かわせ」など応援するが④、B児のボールがE児に当たる。教師は「最後までよく頑張ったね」と声を掛けた。「惜しかったな」と励ますようにF児が近くに寄ってきて声を掛けると④、E児は「僕よけるの得意やねん」と話す④。

2月3日

昨日と同じチームでドッジボールをした。試合を始める前に「作戦会議をしよう」と仲間が集まって円陣を組んだ。白チームでは、A児とC児がコートの絵を地面にかき、A児「僕がここにいるやろう。F君がここにいって投げるやろう」⑤。E児「僕ここにいとくな」、G児「皆、外野になったら、よけるときも投げるときも『わー』って言うことな」と相談していた。教師は「人が困ることをするということ？」と聞くとF児は「ちょっとやかましいな一。いやかも分からんな一」、H児「わーと言うのはやめよう」⑦。E児「そのかわり応援することにする」。教師は「その考えはいいと思うよ」と言った。皆でエイエイオーと掛け声を掛けてチーム意識を高めていた⑤。青チームでは、B児が「こっち行くふりして投げたら？」教師「それごまかすっていうこと。そんなんできるかな一？」と言うと「よけるのがうまくない人を守るとか…」⑦と相談する。

2回戦が始まり、A児がB児に「当たったで」と言うとE児が「ワンバウンドや。見てたで」と声を掛けたり⑧、D児は、外野から投げて当たったことに気付いていないE児に「Eちゃん戻れるで」と教えたり、E児も「戻れるの？」と聞きながら、自分たちでルールを守ったり確かめたりしながら⑧遊んでいた。

ここでは、幼稚園教育要領第2章に示すねらい及び内容を踏まえ、「協同する体験」、
「規範意識の芽生えを育てる」といった観点から評価するとともに、教師の指導の在
り方からも評価する。

＜幼児の発達を「協同する体験」から評価する＞（事例中の番号に沿って示した）

- ① 幼児同士が積極的に、コートをかいたりチームを分けたり、ベンチを運んで遊び
の準備を進めている。このことは、主体的に遊びに取り組もうとする気持ちの表れ
でもある。
- ② まずコートの白線を引いてから計測して真ん中のラインを決めるのではなく、目
分量で真ん中のラインを決めて線を引く。最近ではコートの広さに関心をもっている
ので広いとか狭いとかでもめることもしばしばある。広さがチームの勝敗に関わる
ことが分かってきたので、仲間で確かめたりするようになってきた。
- ③ チーム分けについても、人数がうまくいかなかったので、新しい方法を考えてい
る。うまくいかないときは考え直したり確かめたりしている。これは、行動しなが
ら考える、考えたことを行動に移し自分たちにとって納得する方法を導き出して
いる姿でもある。互いに意見を言いながら、友達の意見を受け入れようとする姿が見
られ、コミュニケーション力が育ってきている。
- ④ 個々の幼児の頑張る姿を応援したり、励ましたりしながら、友達のよさや得意な
ことを認めている。仲間の一人一人の存在を大切にしている。
- ⑤ 作戦会議をしたり円陣を組んだりしながら、チームとしての仲間意識が高まって
きている。

＜幼児の発達を「規範意識の芽生えを育てる」観点から評価する＞（事例中の番号に沿って示した）

- ⑥ 仲間で相談し考えたルールを実際やってみると、うまくいかなかったことから、
そのルールを取りやめるなど、ドッジボール遊びに必要なルールを遊びの中で試し
ながら創り出していく力が育ってきている。
- ⑦ 勝ちたいという気持ちが出てきたことから、どのようにしたら勝てるかを考える
ようになってきた。このことは望ましいことであるが、その作戦の内容が、社会規
範として望ましくない。相手にとって「だますようなこと・ずるいこと・困ること」
などの行為をすることは望ましくないことへの気付きが弱い。

- ⑧ 友達がまだ知らないルールを教えたり、自分が見て気付いたことを伝えたりしながら、遊びが楽しくなるために必要なルールを守って遊んでいる。ルールの必要性や楽しさが分かってきたようである。

<教師の指導の在り方から評価する>

- 環境については、幼児たちが準備しやすいように、決められた場所にライン引きやベンチ、ボールなどを置いている。このことは、自分たちで遊びの準備をするという意識付けや主体的に遊びに取り組む姿勢にもつながっている。また、ベンチがあることで、疲れたときに休憩したり気分を立て直したりして、休憩しながら友達の動きがよく見えるので公平な判断ができる場にもなっている。
- ドッジボールは、仲間としての意識を高めながら自己主張や自己調整を必要とする遊びであるため、幼児同士が試行錯誤しながら遊びを展開していく時間が必要である。この点からは、教師が幼児の意見を尊重しているので十分な話し合いの時間をもつことができた。
- 教師は、遊びに必要なルールやチーム分け、コートの準備など幼児の考えを取り上げながら、まず考えたことをやってみる、うまくいかないことは考え直し、また新しい考えを生み出すというような循環を大切にした援助をしている。ただし、個々の幼児の気付きを取り上げ、本当にそうなのか確かめられるものは幼児と一緒に確かめるようにしている。このことは個々の幼児を生かす集団形成という点からも大事である。
- 勝ちたいという気持ちから、望ましくない作戦を立てたことを教師は、人をだましたり迷惑をかけたりにすることは社会規範としていけないことであると伝えた。面白い作戦を立てて遊びを盛り上げるという幼児なりの考えでも「よいこと・よくないこと」をしっかりと伝えたいと考えての働き掛けであるが、幼児自身が気付けるように、もう少し時間を掛けて考える場を提供した方がよかったのではないかと反省する。

<事例から読み取れること>

◎協同する体験を重ねること

人間関係が広がり、学び合いが可能となる5歳児のこの時期に、仲間の一員として帰属意識をもち、遊びの目的や方法を共有し、必要なことを考えたり工夫したりしながらやり遂げていこうとしている姿がこの事例から読み取れます。協同する体験は、「学び合い・育ち合う」関係を育てることでもあると考えます。共に考えたり、共に感じたりすることが大切なことであるだけでなく、この事例からは個々の幼児が、その子らしく動いたり意見が言えたりすること、つまり自己主張ができることが必要であることが読み取れます。そして、自分と友達との意見の違いに気付いたり、受け入れられたりできるようになる過程を丁寧に見取ることが必要です。

◎規範意識の芽生えを培う

ボールの取り合いになったときに、一つのルールとして2人で投げることを考え、それを実践したがうまく投げられず、ボールの力が弱くなるなどよい方法でないことに気付きました。ルールが必要である→ルールを考える→ルールを守る→新しいルールが生まれるというように、幼児期は遊びのルールの必要性を感じ・考え・行動に移すという過程の中で自己や他者の様々な感情と出会い、調整する力を付けていきます。このような規範意識の芽生えを培うためには、教師が一方的に教えるのではなく自分や他者の思いを大切にしながら、考えたり感じたりする時間や場や状況が必要です。

また一方で、事例にもあるように、社会の一員として「してよいこと・してはいけないこと」などは、どのように伝えればよいのでしょうか。担任は「困ることやごまかすこと」はしてはいけないということに早く気付かせたいと思い、幼児の考えを待たず、すぐ指摘しました。幼児に行為の意味をどのように感じさせるのか、教師として伝えたいことはしっかりと伝えたいという思いの中で悩みました。体験を重ねながら規範意識の芽生えを培うことが重要ですが、様々な規範に出会いながら、規範の意味や指導の在り方を考えることが必要です。

◎小学校教育へとつながる学び

幼児は対象との関わりの中で、体験に基づきながら多くのことを学んでいます。この事例においても、遊びの準備、場の広さへのこだわり、チーム分けの方法など、遊

びに取り組む姿勢が、幼児の遊びへの意欲とともに主体的に展開されていることが理解できます。また、方法については、仲間の考えを取り入れながら、最初から見通しをもった動きではなく、やりながら考える・試しながら考える姿勢で遊びに取り組んでいます。納得して学んだことは、確認したり知らない友達に伝えたりしています。

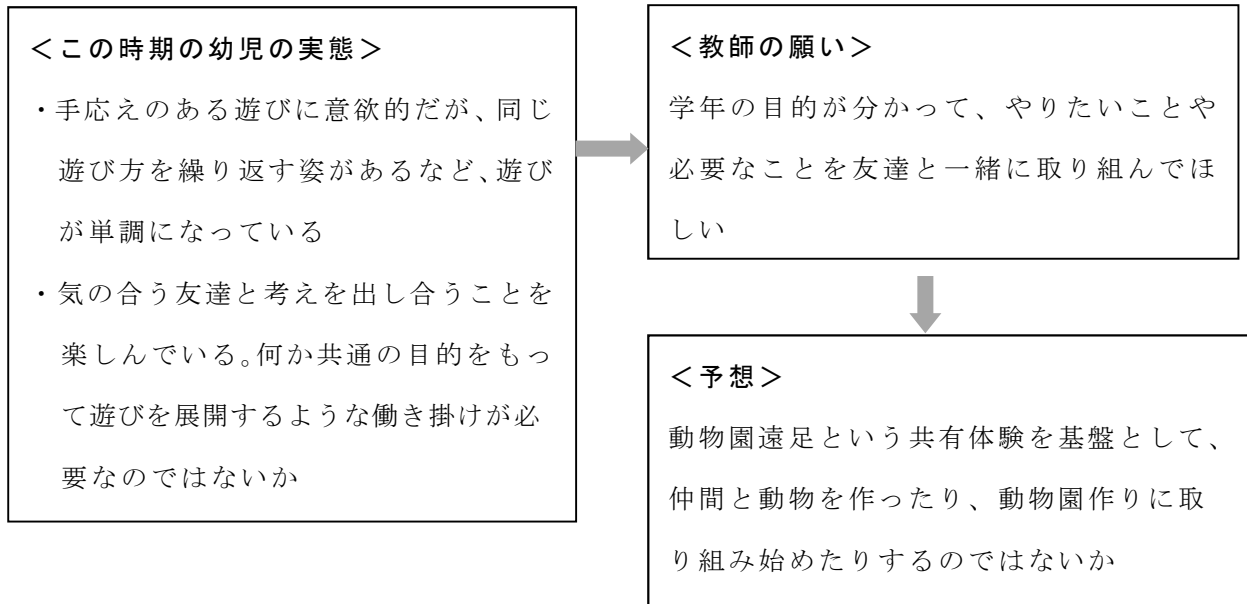
これらのことから、幼稚園教育における共通の目的や課題に向かって取り組むことは、小学校教育の教科を中心とした学習の目標に向かって取り組む姿勢や、自覚的な学びにつながっていくと考えられます。また、この事例のように、幼稚園での集団生活を通して、自分の意見を言葉で伝えることや、他者の意見を受け止め自己調整しながら、社会規範として必要なことを考え実行する力が育成されていきます。

事例2 グループの協同的活動を学級全体の活動につなげる（5歳児10月）

教師は幼児達が協同する体験を大切にして保育を展開していきます。特に、5歳児後半は、共通の目的が実現する喜びを味わえるような活動の展開が期待されます。具体的には行事などを通して学級全体で共通の目的に向かってグループごとに取り組むという活動が挙げられるでしょう。ある園の「動物園ごっこ」の実践記録を取り上げて、共通の目的に向かう個々の幼児やグループの取組を、どのように評価し、指導に生かせばよいかを考えてみます。

A園の5歳児は10月中旬に動物園に遠足に行ったことをきっかけにして、約2週間後に保護者や年少組を招待する動物園ごっこを行いました。

5歳児 10月下旬の姿



遠足の翌日、幼児の中から動物を作りたいと言ってきたり、動物の絵をかこうとしたりする動きが生まれました。そこで教師は、ここから始まる活動は、十分に「ねらい」に向けた活動となる可能性があると考え、協同的な活動としての「動物園ごっこ」へと発展するように指導の方向を定めました。翌日の記録を見てみましょう。

<記録1 活動のはじまり>

10月20日（遠足の翌日）

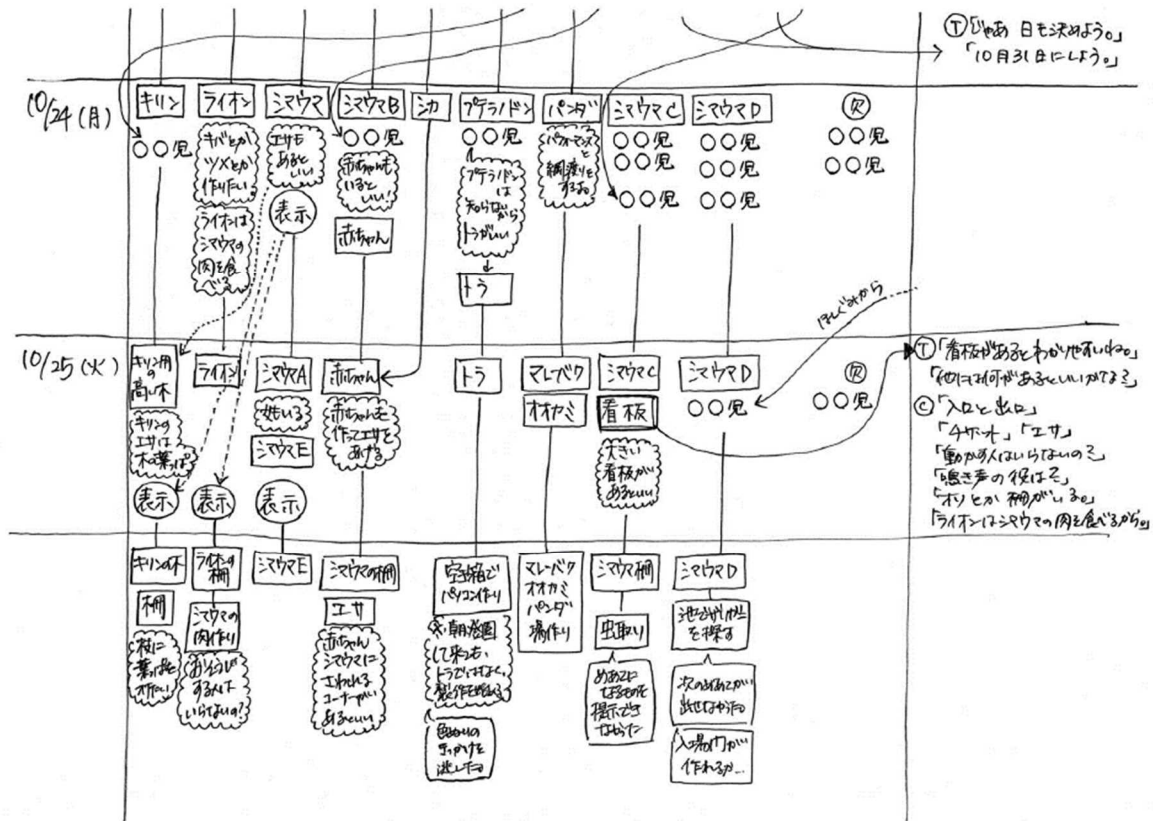
教師が牛乳パックをつなげながら「何か動物作れないかな」とつぶやいていると、N児とM児が「キリンを作りたい」と言ってきた。M児と仲間が牛乳パックをつなぎ合わせて大きなキリンを作り始める。降園時に学級の幼児の前で「明日は色を塗りたい」と言う。K児が「僕も絵の具やりたい」と言うので「自分で動物を作って、それに塗ったらどうか」と投げ掛けると、「じゃあライオンがいい」と答える。すると他の幼児からも「僕たちはシマウマがいい」などと次々に声があがる。「動物園にすればいいじゃない」という声もあがる。明日から大きな動物作りがあらこちらで始まりそうである。

そこで教師は「友達と共同で作る」という活動の展開に備えて材料を集めたり、幼児と必要なものを考えたりしました。記録2は活動の経過記録です。A欄は各グループの取組、B欄は教師による全体への投げ掛けです。

<記録2 動物(園)作りの取組>

A 欄

B 欄



<記録3 10月25日(活動開始5日目)の全体への投げ掛け>

10月25日

(シマウマができ上がり、その看板を作り始めた姿を取り上げて)「看板があると分かりやすいね。ほかには何があるといいかな」と問い掛けると、「入口と出口」、「チケット」、「エサ」という声があがる。各グループはそれまで動物作りを目的にしていたが、動物園ごっこ全体の中の自分たちというイメージが明確になったようである。「動かす人はいない?」、「鳴き声の役は?」、「おりとか柵がいる」、「ライオンはシマウマを襲うから気を付けよう」というようにイメージがどんどん広がる。

このようにして、動物ができ上がり始めるこの頃から、幼児は次の二つの目的をもって活動に取り組み始めました。一つは「グループの友達と自分たちの動物を作ろう」という目的、そしてもう一つはさらに大きな目的としての「皆で動物園を開こう。そのために動物園に必要なものを考えたり用意したりしよう」という目的です。ワニのグループを取り上げて、この二つの目的がどのように意識されているか、前者に下線、

後者に波線を引いて把握してみます。

<記録4 10月28日 あるグループの取組>

M児とS児が2人でワニのきばを作っている。昨日「エサが新聞紙なの」と言われ、悔しがっている様子だったため、セロファンを用意しておく、S児とN児は2人で丸めた新聞紙にセロファンを貼り始める。1人一つずつ作っているが、うまくセロファンが貼れないときは2人で協力して作業を行っている。N児はワニを動かしてエサをやるという遊びを始める。

S児は作業しながら「準備、今日までだよ。プレートもポスターもできてない」と言うと、N児が「じゃあ早く終わらせてまたワニで遊ぼう」と言う。S児がポスターをかき始めると、その姿を見てN児もかき始める。M児はしばらく2人の様子を眺めていたが「そろそろエサの時間かな」とワニのもとに行き、エサをやりに行く。2人がついてこずポスターをかき続けていたので、すぐ机に戻りポスターをかき始める。N児は「ワニを見てかく」といってワニのもとへ向かう。

記録4からは共同で作り上げた動物に幼児が愛着をもっていて、遊びの中で大切に扱おうとする姿が見られます。教師としては、行事などのある共通の目的をもたせた場合、幼児はそこに向かって真っ直ぐに活動を進めるというイメージをもつ傾向がありますが、そうではなく、目の前の環境からイメージした遊びを楽しみながら、全体の目的が次第に明確になっているようです。記録によって、幼児の協同する体験の過程の面白さを読み取ることができます。

《持続的な活動の記録の工夫》

記録5は動物園ごっこに向けての活動が始まってから10日目の記録です。最初の頃はメンバーの出入りもありましたが、この頃には八つのグループに安定しています。共通の目的が明確になっているとはいえ、各グループの取り組み方を見ると、友達とのやり取りや自己発揮などにおける課題はそれぞれ異なります。そこで記録5では、八つのグループそれぞれの課題を「動物園ごっこ全体に関わること」と、「グループ活動に関わること」の二つの視点で捉えることにしました。ライオングループとシマウマグループを例に挙げて見てみましょう。

5歳児後半になると、この実践のように、共通の目的に向かって友達と協同しながら活動を展開するようになり、グループ活動も活発になります。しかし、目的が「共通」だからといって、幼児の体験も「共通」であるとは限りません。ライオングループの幼児は、自分たちの作った動物に愛着をもち、動物園という全体イメージを意識しながらも、自分たちの作り上げた造形物を起点として次から次へと主体的に遊びを生み出しています。一方のシマウマグループは次に何をしたらよいか分からず、教師の具体的提案が必要でした。行事が幼児の主体的な活動であるためには、このように実態を的確に把握し、それぞれが持っている課題にできるだけ即した指導を考える必要があります。

そのためには、個別に持続的に記録する視点や、それを可能とする記録の様式が必要となります。記録2や5はその工夫例と言えるでしょう。

事例3 記録を指導要録に生かすために（5歳児6月と翌年の2月）

幼稚園幼児指導要録は幼児の発達と指導の関係を評価する大切な記録です。また、幼児の発達の連続性を踏まえ、小学校との連携を図るための重要な記録でもあります。日々の記録をどのように指導要録へとつなげればよいのでしょうか。

D幼稚園の園内研修では、各学級から対象児を抽出し、それぞれの記録を基に、幼稚園教育要領に定めるねらいの達成状況を捉えるという内容で行っています。そこで担任は、C児の記録から成長を捉え、指導要録の作成に生かそうと考えました。

C児：10月生まれの一人っ子で保護者との3人家族

保護者は、C児が入園前から人見知りの傾向が強いことを気にしていました。入園当初は、保護者と離れることを嫌がっていましたが、次第に幼稚園生活に慣れ、友達との関わりも見られるようになってきました。

C児の指導要録の個人の重点

3歳：「安心して自分を出し、自分なりの遊びができるようになる」

4歳：「いろいろな遊びに興味をもって取り組み、自分の思いを表現しながら遊ぶ」

5歳：「友達と思いを伝え合いながら遊ぶことを楽しみ、自信をもっていろいろな活動に取り組めるようになる」

< 5 歳児での日々の記録から >

6 月	2 月
<p><高鬼></p> <ul style="list-style-type: none"> ・高鬼の仲間に加わって遊ぶ。鬼になると、帽子を裏返して白帽子にして被る。鬼の動きをよく見て、捕まらない程度の距離を保ちながらも、鬼を誘うような動きを楽しんでいる。しばらく遊んでいると、鬼役だった幼児が「Cちゃんが、タッチしたのに鬼にならない」と怒った表情で教師に言いに来る。C児は、言い訳をするように、「水を飲もうと思ったの」と言う。教師が「そのことは言ったの？」と聞くと、「後で言おうと思った」と言う。「でも、先に言わないと、鬼はタッチしていいか悪いか、分からないよね」と教師が言うと、被っていた帽子を裏返して白にして、鬼役になり、友達の集まっている方を目指して走って行った。 <p><折り返しリレー></p> <ul style="list-style-type: none"> ・高鬼をしていたメンバー5名で折り返しリレーを始めようとする。「Cは審判やる！」と何度も主張する。他の幼児は何も言わないが、C児の顔を見ながら、それでいいと言うように2チームに分かれる。C児は、人数が同数にならないことを感じ取って、「3人、2人になっちゃうから」と言う。C児が、「ようい、どん！」と言うと、他の幼児が走る姿をよく見て、3回繰り返して走った後に、「終わり！白チームの勝ち！」と大きな声で勝敗を知 	<p><高鬼></p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に楽しんでいたC児が、教師に「一緒にやろう！」と言って誘う。教師も仲間に加わった。教師が少し高い場所にいると、「もっとしゃがまないと見えちゃうよ！」と注意し、見えないところに身を隠すようにして逃げると捕まりにくいことを知らせる。 <p><ドッジボール></p> <ul style="list-style-type: none"> ・C児はボールを持つ相手チームの幼児の動きをよく見て、できるだけその相手から遠い場所に逃げている。ボールが自分のチームのコートに入ると、素早く取りに行き、よくねらって片手で投げる。ボールを当てられてしまい残念そうな表情をするが、これまでのようには泣かずに、次のゲームに向かって気持ちを切り替えて取り組む。外野にいる友達にボールが渡ると、「パス！」と大きな声で言って両手を前に広げて受け止めようとする。 <p><巴鬼></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級の皆で集まる。教師が黒板に図をかいてルールを説明すると、C児もうなずきながら教師や友達の話を聞き、自分の考えを話す。 ・好きな遊びの中でも十分楽しんでいるC児はルールを理解しており、友達の動きをよく見ながら動く。他のチームが集ま

らせる。

<サクランボのかくれんぼ>

- ・指名されたグループの幼児が相談している間は、後ろを向いて、期待感をもって待っている姿が見られた。誰がサクランボ役になって隠れているか、グループで相談する場面では、C児は自分の意見をあまり積極的には主張しない。同じグループの友達の意見を聞いて、それが正解だと感じると、グループの幼児と一緒にその名前を答える。正解だと分かると、「やったー！」と喜ぶ。

って相談し始めたのを見て、C児も同じチームの幼児と集まって、勝つための方法を相談し始めた。友達の「捕まえる人と残る人を分けようよ」という作戦を聞いて、他児が「そうしよう」と賛成したが、C児は、「考えた！」と言って別の作戦を話し始める。しっかりとした言葉で説明するが、同じチームの友達はその作戦の意味が理解できない様子だった。自分の考えを友達に分かってもらえなかったC児は泣き出しそうな表情になる。しかし、走るのが速いと思う男児3名が捕まえに行く役になろうとすると、泣くのをこらえ「男の子だけでずるい！」と強い口調で言う。C児と同じ気持ちだった女児が「ずるい」、「待っているだけじゃ嫌だ」と言うと、捕まえに行く役になりたい幼児でジャンケンをした。C児はジャンケンで負けたが、鬼遊びが始まると気持ちを切り替え、見張り役として動く。また、「待っているだけじゃ嫌だから交代しよう」と同じチームの友達に言い、役割を交代して行った。

上記の記録を園内研修において、幼稚園教育要領のねらいから捉えるようにしました。ここでは、5領域の中でも、「C児の指導要録の個人の重点」に特に関連する領域「健康」と領域「言葉」の面から捉えたものを紹介します。

<園内研修でC児の姿から幼稚園教育要領のねらいの達成状況を捉える>

(例) 領域「健康」

ねらい 場面	(1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
遊びに取り組む中で	積極的に運動的な遊びに取り組み、その中で友達と関わっている。遊びを進めるために自分の気持ちを切り替えている。そのために、ねらいはほぼ達成されている。 <ul style="list-style-type: none"> ・嫌なことがあると気持ちを切り替えるのに時間がかかっていたが(6月)、遊びの楽しさやルールを守ることの大切さが分かり、すぐに切り替えられるようになる。 ・繰り返し運動遊びをすることで、充実感をもっている。 ・鬼遊びでチームの友達との関わりを楽しんでいる。
学級全体で行動する場面で	運動的な遊びに取り組む中で、チームの友達と共に積極的に遊びを進めようとしたり、難しい役にチャレンジしようとしたりする姿から、おおむね達成されている。 <ul style="list-style-type: none"> ・学級の友達と作戦を考えたり役割分担をしたりしながら遊ぶことを友達に提案し、運動遊びをすることを楽しんでいる。 ・鬼遊びの作戦を立てているときに、自分のなりたい役を主張する。
発達の読み取り	6月に比べて、嫌なことに対しても気持ちを切り替えて挑戦的に関わることで、充実感を得られるようになってきている。

(例) 領域「言葉」

ねらい 場面	(1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
遊びに取り組む中で	自分の気持ちを親しい友達に伝えて分かってもらったり、自分がしてほしいことを言葉にして伝えたりしようとする気持ちが、強くなっており、自信をもって自分の考えを言葉で表現している姿から、ねらいはおおむね達成されている。 <ul style="list-style-type: none"> ・高鬼で逃げるよい方法を教師に教える。 ・自分が見付けたことや自分のしたい遊びについて、大きな声で友達に伝えようとしている。
学級全体で行動する場面で	自分が考えたことを1人で自信をもって言うことができない姿も見られたが(6月)、学級全体の中で自分の考えたことを自分なりの言葉で表現することができるようになった。その姿から、十分に達成している。 <ul style="list-style-type: none"> ・鬼の役に慣れてきて、自分から大きな声を出す。 ・鬼遊びで自分のなりたい役を主張する。
発達の読み取り	6月に比べて、親しい仲間言葉で伝えようとする姿の変化が見られ、表現することへの自信が生まれてきている。

○担任は、教師間で共有し、保育の成果を確認し合ったこれらの記録を基に、幼児の1年間を振り返り、記録から読み取った内容をC児の指導要録<指導上参考となる事項>欄に記入するために、以下のようにまとめました。

1学期、年中時より仲の良い友達と一緒に園庭で鬼遊びやドッジボールを好んで行う。次第に体力がつき、運動的な遊びに自信をもつようになった。しかし、自分がやりたいことよりも仲の良い友達の意見に合わせて動くことも多かった。そこで、本児がやりたいことを伝えるきっかけを作ったり、本児の考えを取り上げ、認めたりするようにした。少しずつ、自分の意見を友達に受け止めてもらえる機会が増え、3学期には、自分からやりたいことを伝えたり、友達とやりたい遊びが違うときには、別の友達も誘って遊んだりする姿も見られるようになった。

5歳児の指導要録の記入に当たっては、小学校等における児童の指導に生かされるよう、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用して幼児に育まれている資質・能力を捉え、指導の過程と育ちつつある姿を分かりやすく記入する必要があります。そこで、小学校の教師に分かりやすく伝えるものとなっているか、確かめることにしました。

<確かめる視点>

- ①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や育まれている資質・能力を意識して捉えられているか
- ②指導の過程を記しているか
- ③小学校での指導に生かせるよう育ちつつある姿を記しているか

①の視点で記録を捉え直してみる

ある教師から、担任の記録には、気持ちを切り替えて友達と遊ぶ姿を多く読み取れるが、それがこのまとめには表せていないのではないかと意見が出ました。そこで、「自立心」「協同性」など、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から見直すことにしました。

自：自立心 協：協同性 道：道徳性・規範意識の芽生え
思：思考力の芽生え 言：言葉による伝え合い

<ドッジボール（2月）>

「【略】～ボールを当てられてしまい残念そうな表情をするが、これまでのようには泣かずに、次のゲームに向かって気持ちを切り替えて取り組む。自～【略】」

<巴鬼（2月）>

「【略】～他のチームが集まって相談し始めたのを見て、C児も同じチームの幼児と集まって、勝つための方法を相談し始めた。協 思 【中略】 自分の考えを友達に分かってもらえなかったC児は泣き出しそうな表情になる。協しかし、走るのが速いと思う男児3名が捕まえに行く役になろうとすると、泣くのをこらえ「男の子だけでずるい！」と強い口調で言う。言 道【中略】また、「待っているだけじゃ嫌だから交代しよう」と同じチームの友達に言い、役割を交代して行った。言 協」

このように幼児の姿を捉え直したことで、この1年で育っている姿を再認識できました。そこで、「嫌なことがあると気持ちを切り替えるのに時間がかかることもあったが、繰り返し運動的な遊びをすることで、友達との関わりを楽しみ充実感を味わうようになった」ことや「友達と作戦を考えたり役割分担をしたりしながら楽しんできたことで、自信をもって行動するようになった」ことを、指導要録に記載することになりました。

②指導の過程を記しているか

これについては、端的に示していると確認できました。6月の姿から「自分が考えたことを1人で自信をもって言うことができなかつた姿」も加えた方が、幼児の姿の変容がよく伝わるだろうと協議がなされ、追記することとしました。

③小学校での指導に生かせるよう育ちつつある姿を記しているか

今のまとめ方では、小学校で引き続きどのようなことに配慮して指導すべきか、伝わりにくいことに気が付きました。そこで、自分の気持ちや考えに自信をもって表現しようとしている姿について、「自分の考えたことを自分なりの言葉で表現」していることや、「表現することへの自信が育まれつつある」ことを丁寧に記すこととしました。

これらの確認をした後、以下のように、指導要録<指導上参考となる事項>に記述しました（下線が主な変更箇所）。

1 学期、年中時より仲の良い友達と一緒に、園庭で鬼遊びやドッジボールを好んで行う。進級当初は、嫌なことがあると気持ちを切り替えるのに時間がかかることもあったが、繰り返し運動的な遊びをすることで、友達との関わりを楽しみ充実感を味わうようになってきた。また、ルールのある遊びの中で、友達と作戦を考えたり役割分担をしたりしながら楽しんできたことで自信をもって行動するようになった。

自分が考えたことを1人で自信をもって言うことができない姿や、自分がやりたいことよりも仲の良い友達の意見に合わせて動くことも多かった。そこで、教師が本児のやりたいことを伝えるきっかけをつくったり、本児の考えを取り上げ、認めたりするようにした。少しずつ、自分の意見を友達に受け止めてもらえる機会が増え、3学期には、自分の考えたことを自分なりの言葉で表現したり、友達とやりたい遊びが違うときには、別の友達も誘って遊んだりする姿も見られ、表現することへの自信が生まれてきている。

このように、日々の記録を基に、幼稚園教育要領のねらいや「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにしながら発達の姿を全教師で考察したことで、総合的にC児の成長を小学校へ伝えるための、より確かな指導要録の作成につながりました。

事例4 記録を基に小学校教師と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について
理解を深める（5歳児6月）

幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図る上で、具体的な幼児の姿が示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして、幼稚園の教師から小学校の教師に幼児の育ちや教師の働き掛けの意図を伝えることが大切です。

そのためには、保育参観や幼稚園と小学校の教師が合同で協議する機会を設け、幼稚園の教師の記録を基に話し合ったり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有して意見交換を行ったりすることが有効です。

F幼稚園では、幼稚園教育と小学校教育の接続を推進するために合同研修会を行いました。小学校の教師に幼稚園の保育参観をしてもらい、後日、その日の幼稚園の教師の記録を基に、協議を行いました。

保育参観の視点は次のように設定しました。

<保育参観の視点>

- ・ 幼児の遊びの姿から、何に興味や関心をもって楽しんでいるのか
- ・ 楽しんでいる遊びの中で、どのような力が育とうとしているのか（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに）
- ・ 育ちを支える幼稚園の教師の関わり（環境の構成）について

協議を深めるために、担任はこの日の幼児の遊びの様子から、多くの幼児が関わり、大きな土山で水路や温泉を作っている遊びを取り上げて記録にまとめました。以下は、幼小での協議の場で共有した担任の記録です。

<土山での水路作り（5歳児6月）>

ねらい：土や水の感触を味わうとともに、友達とイメージを共有し、自分なりに試したり考えたりしながら、友達と力を合わせて作る楽しさを味わう。

内容：友達とイメージを共有しながら、力を合わせて大きな土山での水路作りをして遊ぶ。

幼児の姿	教師の読み取りと願い
<p>水路のある部分では、S児、R児、T児が土を深く掘って水を溜め、「温泉にしよう」と言っている。S児が「入れて～。どれくらい深くなったかな」と言いながら裸足で入っていく。それぞれ掘る手を止め、「Rも」「Tも入る!」と入っていく。「キヤー!」と叫びながら、笑顔で手を取り合って喜んでいる。</p> <p>R児が「わ。ここ、めっちゃ深い」と言うと、T児が「え?どこどこ?」とR児がいるところに近付いて深さを確かめている。その後、R児は水から出て、足の濡れている境目の部分を指差し、「ギヤー、ここ(ひざ)くらいまで!」と驚いていた。</p> <p>一方、M児が水の深いところ(温泉)と浅いところ(川)を行ったり来たりしている。教師と目が合ったM児が「こっちは冷たい～」と言ったので教師も川に入り、「本当だ!こっちは冷たいね」と驚いて伝えた。その声を聞いた周りの幼児たちが「なにになに?」と関心をもち始め、同じように行ったり来たりして自分たちで確かめ、水温の差に驚いている。教師が「何でだろうね」とつぶやくが、幼児たちはあちこちを歩き回り、「ここがめっちゃあったかい」などと知らせ合っている。</p>	<p>S児らは水が溜まってきている場所を掘り進めて深い温泉にしたいと考えた。</p> <p>S児は見た目ではよく分からない水の深さを確かめたいと思い、中に入ったことで、R児とT児も続いた。</p> <p>裸足で浸かる水の気持ちよさと、自分たちが掘った深さを感じ、喜び合っている。</p> <p>水の中では感覚的に深さを感じていたが、水から出てきて、足の濡れている境目を見て、改めてどれくらい深いかを実感している。</p> <p>また、M児が場所によって水温が違うことに気付き、繰り返し水温の違いを味わっていた。教師は、驚きを一緒に感じたいと思い、M児をまねてみた。M児と教師のやり取りに気付いた周りの幼児たちも入り、水温の差を感じ、驚き、面白がっていた。</p> <p>教師は、なぜ水温が違うのか一緒に考えたいと思い「何でだろうね」とつぶやいたが、幼児たちはどこが温かいのか冷たいのか探ることを楽しんでいた。今後、こうした体験を積み重ねていくことで、どうして水温が違うのか、なぜ温度が変わるのか、予想したり試したりして考えることを楽しみたいと思う。</p>

保育参観と担任の記録を基に行った幼小合同協議会は、以下の視点で行うこととしました。

<協議の視点>

- ①幼児の遊びを楽しんでいる姿から、どのような力が育とうとしているか、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに考え、出し合う。
- ②①で出された幼児の育ちつつある姿が、小学校の教育のどのような場面につながるかを考える。
- ③幼稚園の教師の関わり（環境の構成）について、小学校でも取り入れたいことや疑問点について出し合い、共有する。

この視点から、幼稚園の教師と小学校の教師で感想や疑問を出し合って進める中で、以下のような協議がなされました（一部抜粋）。

[幼：幼稚園教師、小：小学校教師]

- 小 実際に遊んでいる姿を見て、友達と一緒に楽しく遊ぶことや冷たい水で遊ぶことを楽しんでいると捉えていましたが、担任の先生の記録を読むと、3人で「深い温泉にする」という目的を共有して取り組んでいることにも気付かされました。
- 幼 幼稚園の教師は、幼児が自己を十分に発揮して遊びや生活を楽しむ様子から、その過程でどのような資質・能力が育まれているのかを捉えていきます。例えば、友達と目的を共有して取り組んでいる姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」でイメージしてみると、どの姿になると思いますか。
- 小 そうですね。友達と深い温泉を作ろうという共通の目的を見だし、工夫したり協力したりする姿は、「協同性」の「共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したり」する姿だと思います。
- 幼 ほかにも、互いに気付いたことを伝え合い刺激し合っている姿は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で言うと、「言葉による伝え合い」の「経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたり」する姿ではないでしょうか。
- 小 R児が水から出て、足の濡れている境目の部分を指差して、水溜まりの深さを確かめたり、水温の違いに気付いたりしている姿には感動しました。
- 幼 水溜まりの深さを確かめるための方法を、自分なりに考えてやってみる姿は「思考力の芽生え」の「物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考え

たり、予想したり、工夫したり」する姿、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の「遊びや生活の中で、自らの必要感に基づき、数量や図形」への「興味や関心、感覚をもつようになる」姿ではないでしょうか。

小 水溜りの深さを、足の濡れた部分で感じ、遊びながら体感している姿は、小学校〔算数科〕の、「長さ、広さ、かさなどの量を、具体的な操作によって直接比べたり、他のものを用いて比べたりする」学習につながるのではないかと思います。

小 「水溜まりの深さ」への興味や関心や、その確かめ方を試行錯誤する体験は、長さだけにとどまらず、「水のかさ」や「重さ」、「面積」、「体積」などについて調べる中で、実感を伴った理解につながるとともに、学んだことを日常生活の中で活用し、主体的に問題を解決する態度にもつながるように感じました。こうした遊びの中での体験を、小学校の教師が知り、教科等の学習に生かしていきたいと思いました。

小 場所によって違う水の温かさや冷たさといった感覚を味わっている姿にも驚きました。これは、小学校〔理科〕の、「金属、水、空気と温度」の学習につながると思います。

幼 私も水温の違いに気付いたことには驚きました。これは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で言うと、「自然との関わり・生命尊重」の「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現」する姿と捉えています。

小 担任の先生は、場所によって水温が違うことを発見し、不思議に思ったり、水の深さに着目したりする幼児の気付きを逃さず、一緒に感じて楽しんで見せておられました。自分が先生の立場ならば、太陽の熱によって浅いところは温かく深いところは冷たいといった答えとなるものを、つい教えてしまうのではないかと思います。記録から、意図的に教えなかったと読み取れ、驚いています。どうしてですか？

幼 面白いことに気付いたと思い、「なぜだろうね？」と温度の違いについてつぶやいてみましたが、幼児の様子は、「ここは冷たいか、あそこはどうか」といろいろな場所の温度を確かめたり、その温度の差を肌で感じることを楽しんだりしている段階だと思ったので、今日はその発見の驚きやあちこち移動しながら調べて回ること、肌で感じる温度差を存分に味わうことが大事だと判断しました。今後、遊びを繰り返していくうちに、理由を予想したり、仮定して試したりしていきたいと思っています。

小 幼稚園ではじっくり繰り返し取り組みながら、学んでいけるのですね。その体験が、小学校以降のあらゆる場面で、物事に関心をもち、その理解を確かなものにしていくことにつながると感じました。

幼 幼稚園教育では、すごい！ 面白い！ なぜ？ と感じた気付きをどう深めていくのか、その過程を大事にしています。

小 ところで、幼稚園では先ほどの「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に記されていることが、全員できるようになって小学校に入学してくるのですね。幼児期の終わりということ、主に5歳児の担任が意識して使われているのですか？

幼 誤解されやすいところですが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に、3歳児、4歳児の時期から、それぞれの時期にふさわしい体験が積み重ねていけるようにしています。幼稚園では幼児一人一人の発達に応じた教育を行っており、一律に何をどこまでできるようになるといった到達目標は設けていません。一人一人の発達の特性に応じて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を育てていきます。したがって、この遊びでこの項目の姿が育つというわけではなく、幼児の育っている姿をいろいろな観点から捉え、幼児理解を深めたり、教師の指導を見直したりするようにしています。

- 小 そうなんです。幼児が自発的に友達と「この場所は深く掘って温泉にしよう」、「そろそろ確かめてみようか」など、自分たちでしたいことを決めて遊びを進めている姿が印象的でした。この体験を生かし、入学直後の〔生活科〕の学校探検では、探検したい教室などについて自分の思いを出し合って考え、友達と一緒に助け合いながら学校探検に取り組むことができるのではないかと考えます。幼児が友達と様々な体験を重ねることで人間関係も深まっていくと思います。ところで、遊びの中で自己主張のぶつかり合いがあったとき、幼稚園の教師はどのような関わりをしているのですか。小学校でも、〔特別の教科 道徳〕では、「主として人との関わりに関すること」の「相互理解、寛容」の項目などでも学習しているので、そういったところもつなげていけたらと思うのですが。
- 幼 今回の遊びの場面のように、友達がしていることに「なにになに？」と興味や関心を示したり、「ここがめっちゃあったかい」などと気付いたことを知らせ合ったりして遊ぶことを積み重ねながら、友達と一緒に心地よく生活したり、より遊びを楽しくしようとするために、自分の気持ちを調整し、友達との折り合いを付けながらきまりをつくったり、守ったりするようになることを願っています。教師は、それまでの幼児の体験を念頭に置きながら、相手の気持ちを分かろうとしたり、遊びや生活をよりよくしていこうとしたりする姿を捉え、認め、励ましながら、共に考え支えていくようにしています。遊びや生活の中で、幼児同士の気持ちのぶつかり合いや楽しく遊びたいのにうまくいかないといったその過程も、「道徳性・規範意識の芽生え」を育む大切な体験であり、幼児を肯定的に捉えながら関わっていくことを大切にしています。
- 小 このことは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「道徳性・規範意識の芽生え」の「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動する」姿ですね。

幼 そうですね。しかし、幼稚園での「道徳性・規範意識の芽生え」については、今回の遊びのように、普段の生活の中に全てが溶け込んでいますので、小学校の特別の教科である「道徳」と、幼稚園教育でいうところの「道徳性・規範意識の芽生え」が直接的につながるものではありません。今回の合同研修会のように、幼小の教師が一緒になって幼児の遊びや生活の場面を見たり、育ちを確かめ合ったりして、互いの教育内容や指導方法の違い、共通点について理解を深めることが大切なのだと実感しています。

小 土山での水路作りという一つの遊びの中で、様々な育ちがあることがイメージできました。小学校入学時に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に記されたことが「できる」「できない」といった到達目標ではないことや、幼児が主体的に環境と関わり、自分の世界を広げていく過程そのものを大切にされていることが分かりました。

このように、保育参観後に合同協議をする際、担任の記録があることにより、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに幼児の育ちについて話し合い、幼稚園教師の関わり方や思い、幼稚園教育が大切にしていることにまで、協議を深めることができます。また、記録があることで、その瞬間の幼児の姿を見ていない教師も協議に参加することができ、幼稚園教育と小学校教育のつながりや教育方法等の違いについて互いの学び合いにつながる協議をすることができます。

事例 1、2、3、4 から読み取れること

幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図ることが求められています。

本項の事例1は、5歳児後半までの幼児の育ちや学びに重要な協同する体験とその積み重ねとしての発達や学びに着目して、幼稚園教育と小学校教育の接続期における学びの芽生えから自覚的な学びへの変化の兆しを、ドッジボールの遊びから捉えた記録です。この記録から、遊びへの主体的な取組や、コミュニケーション力、他者の尊重、チームとしての仲間意識、規範意識の芽生えなどが見られ、協同的な体験やその発達や学びが評価されました。また、教師の指導の在り方については、おおむね、協同性を育む関わりや環境の構成はできていましたが、もう少し時間をかけて考える場を提供した方がよかったという課題も見いだされました。

事例2では、グループで始まった活動を学級全体の協同的な活動につなげていけるように、長い見通しで保育を構想し、展開した過程を示しています。記録を取ってみると、次から次へと主体的に遊びを生み出していけるグループと、何をしたらよいか分からないグループなど、グループによって体験に差があることが分かります。そこから、複数の教師が話し合い、それぞれの幼児やグループがもっている課題にできるだけ即した指導を考える必要があることを確認できました。

事例3は、日々の記録を指導要録の記述へつなげた事例です。ある事例について、5歳児の6月と翌年の2月の記録を通し、その間の幼児一人一人の発達を考察し、幼稚園教育要領の5領域のねらいの達成状況を見ています。特に5歳児は、小学校で引き続き伸ばしてほしいことや今後の指導に活かしてほしいことを分かりやすく記入することが大切です。そのために「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして捉えることで、小学校教師にも伝わりやすいものとなるとともに、教師の視点の偏りを確認でき、総合的に幼児の成長を伝えられることにもつながります。このように、記録を通して、幼児の変化が見られた時期を捉え、幼児の姿の捉えと指導のポイントを整理し残しておくこと、それを基に、より確かな発達や学びについて、指導要録に簡潔に記入することができるでしょう。

事例4は、幼稚園と小学校の教師が、保育参観や5歳児担任の記録を基に、幼児の育ちや幼稚園教育と小学校教育の学びのつながり、教師の関わりについて合同協議を行った事例です。保育参観の際には参観と協議の視点を示して行うこと、また協議の際には幼児の具体的な姿や教師の関わりの意図を記録に記して行うことで、「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を踏まえた幼児理解」はもちろんのこと、「互いの教育の内容や方法の相違点について理解すること」、「幼稚園の教師が自分達の保育に

対する評価を行う場とするだけでなく、小学校の教師の幼稚園教育への理解を深める場とする」、「幼稚園の教師が小学校教育について学び、幼児の学びの見通しをもつ」などといったよさが見えてきました。このように、互惠性のある合同協議の場となるよう、協議の事前準備やその方法を工夫して進めることが大切であることが確認できました。

前述のように幼小の接続を図るためには、事例3にあるように、記録を基に、小学校の教師に幼児の育ちや幼稚園教育での指導についてより伝わる工夫をして指導要録を作成することが大事です。しかし、それだけでは十分ではありません。事例4にあるように、小学校との協議や研修を積み重ねることで、互いの教育における幼児・児童の育ちの捉え方に対する共通理解が進み、指導にもつながっていくのです。

(5) 記録を園内研修に生かす

幼稚園教師の専門性として、幼児を深く理解する力は、大切です。記録は、教師が自分自身の保育や幼児の姿を振り返る際に重要な役割を果たしています。さらに、記録は、他の教師や園全体で情報を共有し、語り合い、学び合うための基盤となるものです。担当学級や学年を超えて、園全体で実践の質の向上と改善に向けて取り組む際、複数の教師で記録を見たり書いたりすることが重要です。複数の教師が一人の幼児、あるいは一つの場面を見ることによって、担任一人だけでは分からなかった幼児の気持ちや行動の意味を理解することができます。

そこで本項では、園内研修会における様々な記録の活用法を取り上げます。園内研修を行う際、検討課題や問題意識は様々ですが、立場や保育経験を超え、率直で自由な語り合い・学び合いの場をどのように構成するかが鍵となります。そのため、何をどのように記録するのかなど、記録の方法と内容を吟味する必要があります。

事例1 担任の記録を基に～一つの場면을多くの目で理解する～（4歳児7月）

E教師は、4歳児担任となった新任教師です。自分の思いが言葉にならないN児が思いを友達に伝え、学級の中で友達に受け止められるようにするためにはどうしたらよいかを他の教師に相談したいと思い、園内研修会において記録を提案しました。

N児は、毎日プール遊びを楽しみにしている。しかし、今日は風邪のため入れず、プール側のビニールプールでの水遊びとなる。始めのうちはじょうろで遊んでいたが、他児がプールで歓声をあげるのを見聞きし、次第に表情がなくなり、ベンチに登ったりビニールプールの水をわざとこぼしたりする。教師が声を掛けると、「嫌いだ」と泣きそうな顔になる。教師が「N君は、プール入りたかったんだよね。今日は風邪だけど今度またいっぱい遊ぼう」と声を掛ける。N児は「嫌いだ。先生なんか、あっち行け」と声が荒くなる。近くにいた幼児がその様子を気にするので、教師は「プールに入りたかったのに入れなかったの。悲しくて嫌な気持ちなんだと思うよ」と言うと、他の幼児は「かわいそうにね」、「またプールあるよ」などと言う。

E教師の考察は次ページのとおりです。

○自己発揮の姿

- ・N児はプールに入れたい不満を言葉で表現できず、「嫌いだ」という言葉で表している。普段から、自分の思いが実現できないときや困ったことがあるとき、「嫌い」という言葉で教師に言ってくる。嬉しいときや楽しいときは「大好き」と言う。

○友達との関わり

- ・周りの幼児はN児のことを心配したり声を掛けたりしている。しかし、N児はその幼児たちの様子にほとんど気付いていない。

○教師の関わり

- ・N児のプールに入れたい気持ちを受け止めた。
- ・今後は、N児が「嫌い」と言っている理由を聞いたり、N児の言葉や表情・身振り、その前の行動などから気持ちを読み取ったりしていく。
- ・N児の表現を受け止めた上で、言葉を補いながら気持ちを代弁し、「嫌い」以外の言葉で気持ちを表現できるようにしていく。
- ・他児にN児の気持ちを伝え、N児の気持ちに気付けるようにする。

この事例の提案を基に、記録だけでなく、日頃見てきたN児の様子や自分たちのこれまでの経験等も合わせて、N児の気持ちや、その気持ちを受け止めた上で考えられる指導の在り方を出し合いました。

○N児の姿から

- ・「嫌い」という言葉は、自分を注意した教師に対して言っている。「先生、プールに入れたい僕の気持ち分かってよ」という意味の言葉ではないか。不快な気持ちを紛らわそうとして行動したことを注意され、どうしていいか分からなくなり、必死に自分を守ろうとして「先生なんか嫌い」などの言葉を使うこともあるのではないだろうか。
- ・N児はプールに入れなくて不満もあるだろうが、うらやましい、つまらない、悲しいなどの様々な感情があると思う。自分がいつもと違うことをしている、他児と違うことをしていることが急に不安になったのかもしれない。
- ・N児は、自分の気持ちを言葉で表現しないのではなく、その思いに適した言葉を知らない、表現できないのではないか。

○友達との関わり

- ・ N児は、自分を気遣う周囲の友達の気持ちに気付かないのではなく、今は自分のことで精一杯なのではないか。他児は、N児が不快な気持ちでいることは分かっている。しかし、他児に言動の裏の気持ちを理解させるのは難しいのではないだろうか。

○N児と学級の幼児への教師の関わり

教師は、N児の気持ちを本当に受け止められたのだろうか。何かトラブルが起きてからその気持ちを受け止めにいっていないだろうか。

- ・ N児に何故そのような行動を取ったかを尋ねても言葉にはならないと思う。言葉で言わせようと焦らずに、まだ言葉で表現できない気持ちに共感する。そしてN児の伝えきれない気持ちを教師が代弁するとともに、どういう言葉で伝えたいのかを具体的な場面で具体的に繰り返し知らせていくことも大切である。
- ・ 教師が温かくN児の気持ちを受け止める姿を見せることが他児に伝わり、学級の雰囲気となる。危ないこと、いけないことは注意しなければならないが、それも周囲にいる幼児を意識した教師の言動が大切である。
- ・ 普段、N児が楽しく遊んでいる姿や学級の中でよいことをしたとき、他児を意識して認めることが必要である。「嫌な気持ちをすぐ言うN児」という印象を他児が抱かないようにする。

■記録を通した話し合いの意義

新任教師はまだ発達の見通しがもてず、気になる言動への対応や指導計画に沿って活動を進めることに追われがちです。日々の記録の積み重ねは幼児理解につながりますが、担任一人の見取りには限界があります。E教師も「優しい子どもになってほしい」という思いはもっていますが、2年間・3年間の園生活での成長を考えたとき、この時期にそれは具体的にはどのような姿なのか、そのために必要なことは何か、ということを考えることは、新任教師には難しいことです。一つの場面を丁寧に記録し、自園の指導計画と照らし合わせたり先輩教師に尋ねたりしながら、自分の幼児理解や指導を振り返ることで、徐々に幼児の発達が捉えられるようになります。担任だから分かることもありますが、一歩引いた他の教師だから冷静に見られることもあります。

異なる年齢や様々な保育経験の教師の集まる幼稚園は、幼児も教師も共に生活する

中で、一人の教師では見えないことが見えてきます。そのいろいろな考えを出し合うことで、幼児を多面的に捉えることができるようになります。どれが正しいのか、という答えを探すのではなく、記録を通して、そういった気持ちもあるかもしれない、そのような関わり方も試してみようなど、自分の幼児理解や指導の幅を広げることが大切です。特に協働し合う教師集団として、多様な意見を出し合い、話し合うことが、保育経験の少ない教師にとっては、必要なことです。

事例2 話し合いの音声記録を通して～教師の自己理解が深まる～（3歳児9月）

F教師は数年の保育経験があり、3歳児担任をするのは2回目です。年齢に応じた成長を願って幼児と関わろうとしていますが、教師としての自分に自信がなく、悩みを同僚教師に相談することもできずに悩んでいました。これはA児の記録を園内研修に提案し、幼児理解を深めるとともに、教師としての自己理解を深めた事例です。

A児は、1番に登園するとすぐに「俺1番、これ全部使うから」と言って、木製レールの入ったかごをドンと床に置く。教師は「お友達が来たら、一緒に使ってね」と声を掛ける。P児が登園する。いつもはままごとコーナーで遊び始めるが、今日はA児が始めた線路遊びに「入れて」と言う。A児は「いいよ」と言い、いつもは一緒になることがない2人で遊び始めた。2人はコルク積み木も使い、トンネルにしたりして線路をつなげている。

すると、J児とA児が三角のコルク積み木を取り合ってつかみ合いになる。教師はとりあえず止めに入り、話を聞く。J児は廊下にロボットを作っていて、「これを使いたいの」と言う。A児は「トンネルにするからだめ」と言う。三角の積み木は三つあったので、教師は「分けて貸せない？」と聞くが、A児は「だめだ」と言う。教師は「小さい積み木ではどう？」と聞くが、A児は「すぐ崩れるから嫌だ」と言う。教師がしまってあった小さい積み木を出して「こうしたらどう？」と積み始めると、A児は自分で作り始める。「あの積み木はJ君が使ってもいい？」と再び教師が聞くと、強い語調で「だめ」と言う。教師が困っていると、J児は目に涙を浮かべて「もういい」とつぶやく。

今度は、P児が大声で泣き叫ぶ。教師が行って見ると、小さい積み木のトンネルが崩れている。P児は「だめ、走れないじゃないの」と言うが、A児は「だって地震なんだもん」ともめている。教師が「地震は怖くて嫌だから、工事で直しましょう」とブルドーザーで持ち上げるようにしてみる。それでもA児は、「だめ、大地震なんだから」と言う。

この記録を基にした園内研修で、他の教師から「A児が穏やかに過ごせるようにな

ってほしいという教師の思いが強いのではないか」「焦らない方がよい」という意見が出されました。F教師は園内研修後に「悩んでいる幼児の事例を話し合いの場に出せてよかった。園内研修で悩みを聞いてもらい、気持ちが楽になった。もっと話し合いたい」と述べています。しかし、夢中で話してしまったため、同僚からの助言を聞き逃していたように思いました。そこで、園内研修の録音を聞き直してみることにしました。

■話し合いの録音記録を聞き返してみる

◎ 振り返りから見えてきたこと

○ F教師のA児の理解

- ・ A児は体が大きく、いろいろなことを考えている。
- ・ 周りへの影響が大きい。
- ・ 行動や言葉が激しく、一緒にいる教師も穏やかでいられなくなる。
- ・ 相手の気持ちに気付いてほしいが、A児は変わらない。
- ・ 一つの物を他の幼児と一緒に使うことができない。

○ 他の教師のA児の理解

- ・ 違う場面での友達との関わりはどうか。
- ・ 他の幼児はA児のことをどう受け止めているのか。
- ・ 周りが見える幼児だから、自分なりの判断で動いてしまうのではないか。
- ・ 早く他の幼児に気持ちを向けてほしいというより、A児の気持ちに共感する必要があるのではないか。
- ・ 教師が自分のことを分かってくれていると繰り返し実感することで、A児は変わっていくのではないか。

F教師は話し合いでの同僚教師の発言を受け、再度、自分なりにここ1か月の記録を振り返り、A児に対する自分の関わりや思いをもう一度捉え直してみようと考えました。

<過去1か月の記録を振り返る>

○F教師が困ると感じている記録

- ・運動会予行。観客席で砂を蹴ったり、周りが困ることをしたりする。他の教師が指導してくれる。優しく言っても聞かない。
- ・朝から機嫌が悪い。教師が保育室へ戻ると、フェルトペンを振り上げている。すでにコルク積み木に大きく書いてしまっていたので、厳しく注意してしまう。
- ・A児は登園するとすぐに「これ全部取った」と線路を抱える。W児が来ると「これ全部俺が使う」と言いに行く。何とか2人で遊び始めるが、W児と考えが合わない。

○A児のよさを捉えている記録

- ・J児が廊下にお店を出し、靴を作りたいと言う。教師がどのように手助けしようか悩んでいると、そばにいたA児は「こういうのがいい」となかなかよいアイデアを出す。
- ・S児が箱で新幹線を作ると言うので手を貸そうとすると、「A君みたいに作ってね」と言う。周りの子にA児がこのように見られていてよかった。
- ・汽車ごっこで「汽車の号車を書いて」と言う。A児は次々アイデアが出てきてすごいと思う。

○A児が友達と心を重ねようとしている記録

- ・U児、V児らが園庭で遊んでいる。A児がV児を泣かせてしまう。入りたいのに乱暴になるのか。「ここで見張ってもらおう」と役を示すと、すんなり見張り役になる。
- ・砂場でW児が年長児から塩化ビニル管を借りてくる。A児はいきなり取ろうとしてけんかになる。A児に「どこから借りてきたのと聞いてみれば？」と言うと、ふくれっ面をしながらも教師の言ったまま言う。素直に言える面もある。
- ・砂場で遊び始めたA児が、「先生、お山作って」と言うので、一緒に作る。注意することが多いので、求めたことに応じて楽しく遊べる時間ももちたい。

■事例から読み取れること

この事例は、幼児との関わりに自信がもてない悩みを、同僚に相談できずにいたF教師が、園内研修で気になる幼児の記録を提出し、他の教師からの助言で自分の思い

込みや決め付けに気付き、改善しようとした過程を表しています。思い切って悩みを聞いてもらえたことで気持ちが楽になり、更に自分自身の保育を振り返るきっかけともなりました。

■ 話を録音し、活用する

幼児と教師の言動の記録を基に話し合いをするとき、幼児理解や指導の在り方について、記録係や各自がその内容を記録します。しかし、その記録は自分の関心事が中心であったり、自分なりのまとめ方をしたりするなど、主観的になりがちです。また、人の話を聞いて考えている間は手が止まることもあるでしょう。話し合いの最中に全ての内容を正確に記録できるとは限らないのです。

そこで、この事例のように録音をしておく、必要に応じて聞き直すことができます。自分なりにまとめてしまった他者の意見を正確に聞いたり、自分の意見も客観的に聞いたりすることができます。自分の幼児への関わりを振り返り、自分の指導の傾向に気付くことは、幼児のよさに気付くとともに、自分自身の省察を深めることになるのです。

■ 話し合いから多面的に捉える

この事例では、一人の幼児の姿とそれに対応する担任の指導を、多くの教師が見て、感じて、話し合うことで、担任が自らを振り返っています。

このように、園内研修では単に指摘するのではなく、話し合いを通して他の教師がF教師の思いや努力してきた点を受け止め、他の教師もF教師を理解することができたのです。その思いをF教師も受け止め、園内研修の記録を聞き返し、さらに、自分を振り返ろうとしたり、自ら思いついて過去の記録を振り返ったりするという行動につながっています。その結果、F教師は、自身の保育を振り返ることなく、A児に変わってほしいと強く思っていたことに気付き、「A児が穏やかでいられる時間が長くなってほしいという思いが強いのでは」と他の教師から指摘されたことに納得できました。

教師が単独で保育を振り返り、見直すことには限界があります。記録を通して話し合うことによって、教師は自分と向き合い幼児の姿を多面的に捉えることができます。自分の幼児観や保育観を捉え直し、幼児を理解する力を身に付けていくことができるのです。

事例3 他の教師の記録を通して（3歳12月）

ある園の園内研究会では、対象学年を決めて研究保育を行い、対象学年以外の教師が記録を取るという方法を取っています。あらかじめ担任が課題と感じている点に基づいて観察の視点を提示します。観察者はその視点を踏まえ、保育後に1時間程度の時間を取って記録をまとめ、それを基に検討会を行っています。観察者が提示された視点を踏まえ、どのような記録を取り、話し合いを進めているのか、ここでは3歳児の研究保育の事例を取り上げてみます。

■12月10日 園内研究会（3歳児）

この園では、「幼児が協同して遊ぶようになるプロセス」を捉えることを目的に研究を進めています。そのためには、3歳児では、「安心感をもって環境に関わり、自己を十分に発揮する」ことが重要だと考えています。担任のG教師は、それぞれの幼児が興味をもったことが楽しめるようにしたいと考えていました。G教師の園内研究会前日（12月9日）の記録では、幼児同士の関係を捉えようとする記述もあり、園内研究会では、B児を観察対象児にあげて他の教師が記録し、教師の関わりは適切であったかを検討することになりました。担任はB児の様子を、自分から遊びに必要なものを作ったり、他児と関わったりして楽しんでいると捉えています。以下は、H教師が観察したB児の記録と意見です。

12/10 3才児保育検討会

記録B

観察対象児—B児

(自分から遊びに必要なものを作ったり他児と
かかわりして、楽しむ姿が見られる幼児)

④ 離れた場所でも互いに意識していたB児とX児

9:25 B「きのうテレビ見たらうわー」とXに言いながら画用紙をまるめ、ボールを
作っている。Xは家で作ってきたものがすでにポケットに入っていたので先に
外に出ている。

9:40 X「何で作ったのか？」
制作コーナーをのそぎに乗たが、
また外へ、バラの下で遊びながら
何度もBの方を見ている。



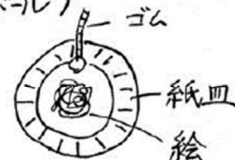
- ①「〇〇ちゃんがかわいそうなんだ。これをどうするの？手に持って、どうするの？」
「〇〇ちゃんかどうするか知りたいから、〇〇ちゃんに言ってごらん」
- ②制作コーナーからチラチラとXの方を見ている

◇ 前日の記録にもあるが、Bは作ることに熱中し、楽しんでいる。①か丁寧に2人を
つなごうとするが、2人の「今やりたいこと」が違うため、実際にかかり合っ
て遊ぶことは難しい。しかし、互いに関心をもち、自分の「今やりたいこと」を
しなから、互いを気にしている。

⑤ 同じものを持ち、同じ動き、言葉をくり返すB児とX児

9:53 ①「Bくん、〇〇ちゃんずーとまってるんだよ、いこう！」
② 空箱に①、②、③の中身を入れる。 → 家をテラス前に作る。
X「いくぞー！」 (ごごごダンボール)
2人は、敵を作る。(血紙・クレヨン)

- 10:03 ① 穴をあけ、ゴムでバラの下につるす。
 - ② 「いっけ！ドドドド——」
 - X 「危ない！エーエー！」
 - ③ 「バンバン！」 「このー！」
 - ④ 家で作った箱を取りに行き、また戻ってきた戦う。
- 2人同様に
つき山からかけおりて、
戦うまねをする。



◇ Bが時間をかけて作ったボールを、実際に使って戦うことはなかった。しかし、
戦いの途中でわざわざ家まで取りに行った。同じものを持っていることに意味があったようだ。
BとXは、同じような動きと言葉をくり返し、真似し合っていた。また、WやCも戦いに
来た。イメージは違うし、一度は戸惑ったが、最終的には、5、6人で場を共有していた。

※①は教師のこと

○記録1を書いたH先生の意見（前ページの手書きの記録に基づいて）

①離れた場所でも互いに意識していたB児とX児

B児は作ることに熱中し、楽しんでいる。教師が丁寧に2人をつなごうとするが、2人の「今やりたいこと」が違うため、実際に関わり合って遊ぶことは難しい。互に関心をもち、自分の「今やりたいこと」をしながらも互に関心をもち気にしている。

②同じものを持ち、同じ動き、言葉を繰り返すB児とX児

B児が時間をかけて作ったボール（キャラクターの持ち物）を、実際に使って戦うことはなかった。

しかし、戦いの途中でわざわざ家（保育室前のテラスにごぎと段ボールで作った場）まで取りに行った。同じものを持っていることに意味があったようだ。B児とX児は同じような動きと言言葉を繰り返し、まねし合っていた。

<保育検討会を通して担任が学んだこと>

担任は、他の教師が取った記録と、記録を基にした話し合いから、以下の点を学んだと、園内研究会の記録に記述しています。

- ・ B児は、親しみのある相手と同じものを持つことでイメージの世界に入り込んで遊んでいる。また、相手と同じような動きをしたり、言葉を言ったりすることを楽しんでいる。
- ・ 幼児は、互いを見合ったり、作りたいものに夢中になっていたり、気に入った相手と一緒にいたりして、自分のしたいことをそれぞれしていた。
- ・ 教師は、同じようなことをしている幼児同士をつなげようとしたり、幼児のしていることに筋道をつけようとしたりすることを意識しすぎないことが大切だと思った。まずは、幼児それぞれの楽しさに共感し、幼児のしている言葉や動きを繰り返し、認めることが必要である。そのような教師の関わりが、結果的に、幼児が他の幼児のしていることに気付き、幼児同士が互いに興味を向けることになるのだと思った。
- ・ 幼児同士の気持ちがつながるきっかけは様々である。大人から見れば単純なことでも、気持ちがつながる心地よさや楽しさを感じることもある。こうしたつながりがいくつも生まれることで、学級全体での活動の楽しさにもつながっていく。

このように、記録を基にして話し合い、異なった意見を聞くことにより、担任はB

児の理解を深め、自分の関わりを振り返るようになっていきます。教師の捉えと幼児の実態とのずれを捉え、自分の保育や幼児との関わりを振り返り、指導の改善に生かす姿勢が、教師には求められます。記録を基に話し合う体制を作ること、幼児の情報を共有し合い学び合う教師集団の関係を作ることにより、多様な幼児理解の可能性に気付くことができるのでしょう。

事例4 幼稚園教育において育みたい資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の理解を深める

5歳児担任のA教師（経験年数15年目）が研究保育を行い、C教師（経験年数2年目）とB教師（経験年数7年目）が観察をする。記録者はC教師で、その記録を基に、協議を行うこととしました。

幼稚園教育において育みたい資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、幼稚園教育要領の5領域から考えを記述するようにし、話し合いを進めていくこととしました。

■担任＜A教師と5歳児学級の実態＞

A教師は、4歳児からの持ち上がりの担任であり、5歳児2月の生活発表会に向けて、グループでの主体的な活動や友達との主体的な遊びの指導に重点を置いています。幼児の主体的な遊びを展開するための環境の構成について、幼児たちの「相談」という視点で記録も取り続けていました。その中で、一人一人の幼児がどのように遊び、言葉を表出し、友達と関わっていたのか、自分で考えて判断していったのか、などを記録しました。

A教師は、今年も生活発表会があることを意識していました。生活発表会は、2年間の教育課程の総まとめといえる活動であり、年長児らしい取組にしたい、幼児たちの主体性を尊重したいと願っていました。それぞれのグループでは、やりたいことを相談し、劇やペープサート、踊りなど、自分たちの取り組みたい課題を主体的に決めて、それに向けて活動を始めました。

次は、C教師が観察した一つのグループの記録です。

記録1 2月6日 5歳児園内研究会

○劇遊び「かいじゅうグループ」の記録

自分たちでストーリーを話し合う。それぞれがやりたい役になることで話を作っている。山に住むかいじゅうをやりたいE児と、空を飛ぶかいじゅうをやりたいD児で意見がぶつかった。やりたい役を実現するために、仲間が意見を出し合った。

D児：空を飛びたいんだ

E児：空を飛ぶのは無理だよ

F児：どうやって空を飛ぶようにするの？

E児：そうだよ、無理だよ！

D児：えー。何とかなんないかなあ・・・。

G児：巧技台を高くして、そこから飛べばいいんじゃない？

H児：怖くない？それに落ちたら危ないよ。高いところじゃ動けないよ。

F児：空を飛んでるところは、人形にすればいいんじゃない？

E児：人形ってなに？人形じゃ、おかしいよ。

G児：絵をかいて、動かしたらどう？

D児：そうだ！だったら、水色のカラービニールで空を作ればいいんじゃない？

H児：そこで、人形が動けばいいんじゃない？

それを実現するために、巧技台や積み木を使って場作りをしたり、教師に材料を要求したりした。

■ 5領域の視点から捉えると

具体的には、自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わっていたこと、人の言葉や話などを聞き、自分の体験したことや考えたことを話していた。【領域「言葉」】

▲ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から捉えると

経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりして、言葉による伝え合いを楽しむようになっている。【言葉による伝え合い】

● 幼稚園教育において育みたい資質・能力については

自分が考えたことを表現する力が培われていると感じ、「思考力、判断力、表現力等の基礎」の芽生えにつながっていると感じた。

< 2月6日 園内研究会 >

園内研究会では、B教師が、C教師の記録を読んで「言葉」に関する視点の読み取りから、さらに他の視点でも記録を振り返り、幼稚園教育において育みたい資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深めていくことにしました。

B教師 領域「言葉」以外の読み取りはどう？

C教師 一人一人が、自分の考えをもって発言していたと思います。でも、E児は、否定的な言葉ばかり発していたと感じました

B教師 でも、E児は、そのときどんな表情や態度で話していたの？

C教師 えっ、表情ですか？そこまで見ていなかったかもしれません

A教師 そのときE児は、一生懸命考えていたし、記録には態度や表情の記録はないけれど、このとき、友達に優しく話し掛けていたよね

B教師 記録は、言葉だけじゃなくて、そのときの幼児の動きや、表情、視線なども書いておくことが大事だよ

A教師 確かに、E児の発言がきっかけになって、他の幼児からいろいろな意見が出たよね。皆が空を飛ぶという目的を共有できましたよね。特に、G児が、巧技台を高くするって考えを出していましたね

B教師 このことを、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から見ると、「協同性」のところで、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりするところにつながっていますね

A教師 H児も、安全に気を付けることに気付いて、高いところではD児のしたい動きができないって伝えていていますよね。「落ちたら危ない」という発言も、H児がこれまでに獲得した知識からくるものですよね。このことも、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から見ると、「健康な心と体」の、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになることにつながっていますね

C教師 ここまでの7行ほどの記録から、表情や態度を記録することの大切さや、協同性の育ちを考えることができたり、安全への意識が育っていることが分かったりするのですね。自分では、表面的な言葉のやり取りの育ちの点しか読み取れませんでした

B教師 では、F児の「人形」のアイデアの提案について、C先生はどう感じましたか？

- C 教師 人形を使うのは、いい考えだなと思いました。それくらいです
- A 教師 危なくない形で実現するにはどうしたらよいかを考えたのよね。自分を人形に置き換えるという発想は、これまでの園生活の中で遊んできたことの積み重ねから、遊び方を工夫しているよね
- B 教師 危険を回避するために人形を代用しているとも考えられますね
- A 教師 そうですね。でもそれだけでなく、想像して、自分たちを人形に置き換えて演じることを楽しめるということを見通す力が育っているということだよ
- B 教師 友達の様々な考えに触れる中で、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになるという姿にもつながっていますよね。これは「思考力の芽生え」ではないですか？
- C 教師 幼児の言葉の裏に隠された成長の姿が、こんなにもたくさんあるのですね。自分を人形に代用することとか、見通しをもって考えることとか……。人形という一つのアイデアから、いろいろなことが読み取れますね
- B 教師 C 先生、いいところに気が付いたね。遊び方の工夫や危険回避のための人形の代用、人形が代用に使えることは、資質・能力の中の「知識及び技能の基礎」が育まれていることにつながるし、人形に置き換えて演じるのを楽しんだり、想像したりする力は、「思考力、判断力、表現力等の基礎」が育まれているということだよ
- A 教師 言葉の奥にある幼児の思いを理解しようとするのが大切ですよね。ここまで読み取って初めて、C 先生の記録にあるように、資質・能力の「思考力、判断力、表現力等の基礎」につながっていると言えるのではないかな。それに、F 児の意見に、E 児が「人形じゃおかしいよ」って投げ掛けて、また、周りの友達から新しいアイデアを引き出している。これは、自分たちの遊びのよりよい展開を考えているということですよ。これは「学びに向かう力、人間性等」が育ってきているということですよ
- B 教師 そうですよ。そうすると、5 領域の視点からも、C 先生は「言葉」について書いているけれど、それだけではなくて、領域「健康」「人間関係」「環境」「表現」の全てが総合的に、幼児の姿として現れているよね
- C 教師 そうか。「健康」では、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通し

をもって行動する姿だったり、「人間関係」では、身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、表現したりして、一緒に活動する楽しさを味わって、愛情や信頼感をもっていきますよね。「環境」だったら、身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとしていたりしていますよね。そして「表現」では、感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しんでいますよね

A教師 そうそう、C先生が言っている通り、遊びを通して総合的に見るのが大切なのです

B教師 なるほど。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に、5領域の視点から幼児の発達を理解し、幼児の遊びや活動を省察し、幼児の具体的な姿を通して、幼稚園教育において育みたい資質・能力を読み取っていくということは、こういうことなのですね。

<園内研究会におけるC教師の感想>

- ・記録を取る際は言葉だけでなく、幼児の動きや表情、教師が感じたこと、意識したことも書くこと。ちょっとした小さな発言や、行動も見逃さず、記録しておくことで、幼児の一つの言動に対して一つの読み取りではなく、いろいろな読み取りを考えることができ、幼児の心の育ちを捉えて幼児理解を深めていくことが大切である。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼稚園教育要領に書かれている姿がそのまま幼児に現れるのではない。目の前の幼児の姿が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のうちのどのような姿につながっているのかを考えることが必要である。その際、一つだけではなく、複数の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながっている可能性を常に意識する必要がある。さらに、それらの姿から幼児にどのような資質・能力が育まれているのかを捉えることも重要である。
- ・幼児は、遊びを通して総合的に発達しているので、それぞれの領域のねらいを窓口で幼児の発達を捉える必要もある。
- ・自ら取った記録を基に先輩教師と話し合うことで、先輩教師が幼児の言動や表情のどこに着目して、幼児の内面をどのように捉えているのかを知ることができた。自分一人で記録を作成していたのでは気付くことができなかつただろう。このような研修を通して経験を重ね、教師として成長していきたい。

この事例では、若手教師が取った記録を基に、経験の異なる他の教師との話し合いを通して、幼稚園教育において育みたい資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に、幼児の遊びや成長の姿を読み取ることはどのようなことなのかについて理解を深めています。さらに、記録の取り方についても、幼児の姿を現象だけを捉えるのではないことも、話し合いによって気付くことができました。

幼稚園教育において育みたい資質・能力や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には、決められた指標などはありません。こうした具体的な幼児の姿や記録を基に、教師同士が学び合いを通して、理解を深めていくことが大切です。

事例5 教育目標に向かう幼児の姿について記録の具体的な幼児の姿から考える（4歳児5月）

園の教育目標は、各園の育てたい幼児の姿を表したものであり、教育課程や長期の指導計画・週日案等の短期の指導計画のよりどころとなります。しかし、教育目標は、園の教育の大きな方向性を示しているため、表現が抽象的であることも少なくありません。そのため、担任として日々の保育では意識することがあまりないのではないのでしょうか。しかし、日々の保育の積み重ねが園の教育目標につながります。つまり、園内の教師同士が教育目標について漠然とした思いをもつのではなく、各教師が日々の保育の中で教育目標について考え、園全体で教育目標に掲げる幼児の具体的な姿を共有することが大切です。

そこで、この事例では、ある日の記録にある具体的な幼児の姿と園の教育目標である育てたい幼児の姿を結び付けて考察したことを取り上げます。

○園の教育目標と日の記録

<園の教育目標>

園の教育目標を「感動する子ども、考える子ども、行動する子ども」とします。例えば次のような姿です。

感動する子ども：喜怒哀楽様々な気持ちを感じたり、身の回りの人や物事などに関心を向けたりする姿

考える子ども：疑問を感じたり、こうしてみようと工夫したり、あきらめずに手ごたえを得ようとしたりする姿

行動する子ども：自分で取り組んでみたり、表現したり、苦手なことや初めてのことに挑戦したりする姿

このような教育目標を手掛かりに記録を読んでみましょう。

< 4歳児 5月10日の記録より抜粋 > ダンゴムシの遊び

2週間ほど前から砂場横でダンゴムシと関わっている。自分たちの場所となりつつあるようで、A児とH児も支度が終わるとすぐにその場所へ行く。H児が「ダンゴムシの家を作ろう！」と言い、2人は土にくぼみを掘って、前日自分たちで用意しておいた石を縁に並べる。池にしたかったようで、石が1周置けたところで水を入れるが、石の隙間から水が漏れる。2人とも、水でやわらかくなった泥を石の間に埋めるようにする。H児は「固い土を入れたらいいんじゃない？」と離れたところの乾いた土を持ってくる。A児が「土に水をつけるとやわらかくなるよねー」「オープンレンジだよー（意味不明）」というH児も笑い合って何度も「オープンレンジ」を繰り返しながら泥を固める。A児はその最中に泥水でドロドロになった手を、何度も洗いに行っては戻ってくることを繰り返す。2人は「水に入るとドロドロになるね」「ドロドロになるね」と言い合いながら泥で石と石の間を固めていく。だんだん石を並べるのはH児のみになる。A児が石を持って置こうとすると「貸して」と言って取り上げ、手出しさせない。

水が溜められるようになると、(砂場で使える道具として置いてあった)木材を橋になるように渡す。あるものを使ってダンゴムシの動きを試して面白がっていると感じた。ところが、橋を渡らせようとダンゴムシに触れると、途端に丸まってしまう。広がるのを待って橋に置くが、ダンゴムシが歩くとすぐに横から池に落ちてしまう。この繰り返しがなかなかうまくいかない。何度も橋から落ちるダンゴムシが弱ってくると、H児は「塩をかけたら元気になるんだよ」と言い、担任に塩をもらいにくる。担任は、塩をかけて元気になるのは金魚のことだと思ったが、H児なりのつじつまを受け入れ塩を用意する。H児が塩をダンゴムシにかけるのをA児は神妙に見ている。その後もダンゴムシに橋を渡らせようとするが丸まって落ちる、という繰り返しが続く。A児は、「(橋を渡らせるだけではなくて)滑り台とかブランコとか、ダンゴムシの遊べるものを作ったらいいんじゃない？」といろいろつぶやく。しかし、H児は、“池の橋を渡らせる”という思いが強いようで聞こえないふりをする。担任は「A児の考え面白そう。ダンゴムシの幼稚園みたいだね」とA児の考えに共感し、H児が取り入れるきっかけになったらいいと考えた。それでもH児は「橋がぐらぐらするから押さえて」「(池の)水が少なくなってきたから持ってきて」などとA児に言う。A児は悲しそうな顔をしながらも、言い返さずH児に言われたことをしていた。

○ダンゴムシの遊びの記録から園の教育目標の具体的な姿を捉える

教育目標は園の大きな方向性を示したもののなので、幼児の姿と一対一対応させることは難しいものですが、ここではあえて、具体的な姿と結びつけてみることにします。

◇感動する子ども

- ・「ダンゴムシとの関わりが2週間続いている」姿は、ダンゴムシへの興味が続いている姿
- ・「A児が『土に水をつけるとやわらかくなるよねー』『オープンレンジだよねー（意味不明）』と言うとH児も笑い合って何度も『オープンレンジ』を繰り返しながら泥を固める。」という姿は、土の変化への気付き、オープンレンジというイメージ、友達と一緒に同じ言葉で笑い合う気持ちの通じ合いを楽しむ姿
- ・「A児が泥水でドロドロになった手を、何度も洗いに行っては戻ってくることを繰り返す姿」は、汚れるのが少し嫌な気持ちがありながらも、していることの楽しさが大きい姿
- ・H児の「教師の共感の言葉があってもA児のアイデアを聞くことが難しい姿」「A児が石を持っておこうとすると『貸して』と言って取り上げ、手出しさせない姿」「H児だけが石を並べる姿」「橋がぐらぐらするから押さえて」「(池の)水が少なくなってきたから持ってきて」などとA児に言う姿」は、H児なりのダンゴムシへの思いが強く現れている姿（H児のこのような姿は、自己中心的な頑なさとも捉えられるが、自分が心動かした物事への思いの強さの現れとして、育ちの大事なプロセスである。）
- ・「A児は悲しそうな顔をしながらも、言い返さずH児に言われたことをしていた。」という姿からは、思いが伝わらないもどかしさを感じながらもH児と遊びたい気持ちが強い姿

◇考える子ども

- ・ダンゴムシに橋を渡らせたくて持つー丸くなるー落ちるー持つー丸くなる…を繰り返しかきめられない姿は、どうにかして渡らせたいと考える姿であり、他の方法を思い付くことなく、失敗を繰り返し続けていたが、「どうしてうまくいかないのだろう？」とあきらめられない姿

- ・「石が一周置けたところで水を入れるが、石の隙間から水が漏れる。2人とも、水で柔らかくなった泥を石の間に埋めるようにする。H児は『固い土を入れたらいいんじゃない?』と離れたところの乾いた土を持ってくる」姿は、水が漏れたところを埋める方法を考える姿、考えてみたことがうまくいかない（泥が緩すぎて隙間が埋まらない）ときに更に考える姿
- ・「離れたところの乾いた土を持ってくる」姿は、今までの経験から適したもの（土）を選ぶ姿
- ・「水がたまるようになると、（砂場で使える道具として置いてあった）木材を橋になるように渡す姿」は、したいことに活用できそうなものを選ぶ姿
- ・「橋を渡らせようとダンゴムシに触れると、途端に丸まってしまう。広がるのを待って橋に置くが、ダンゴムシが歩くとすぐに横から池に落ちてしまう。この繰り返しでなかなかうまくいかない」姿は、失敗を続けながらもあきらめずにどうにかしようとする姿
- ・「H児が、何度も橋から落ちるダンゴムシが弱ってくると『塩をかけたら元気になるんだよ』と言い、担任に塩をもらいにくる」姿は、“塩”が“元気になる薬”になるというのはH児の思い違いであるが、H児なりに経験からダンゴムシの元気を回復させる方法を考えた姿

◇行動する子ども

- ・登園後すぐにダンゴムシの場所に向かい前日の続きを始める姿や、石や木材など特別に用意したものではなくとも身近にあるものを使う姿、自らの思いを行動にしている姿
- ・「H児が『ダンゴムシの家を作ろう!』と言い、2人は土にくぼみを掘って、前日自分たちで用意しておいた石を縁に並べる姿」「2人が『水に入るとドロドロになるね』『ドロドロになるね』と言い合いながら泥で石と石の間を固めていく姿」は、H児とA児が互いのしようとしていることが分かって行動する姿
- ・「その後もダンゴムシに橋を渡らせようとするが丸まって落ちる、という繰り返し続く姿」「A児が『(橋を渡らせるだけではなくて) 滑り台とかブランコとか、ダンゴムシの遊べるものを作ったらいいんじゃない?』といろいろつぶやく姿」は、なかなかうまくいかない状況でもあきらめなかったり、変化させようとしたりする姿

○分析に必要な記録の内容

記録から幼児の発達を捉えるためには、分析に必要な情報が記載されている必要があります。このダンゴムシの遊びの記録は、日の記録の一部ですが、主に次の3点が書かれています。1点目は、幼児とダンゴムシとの関わり、2点目は、教師の思考、3点目は、幼児の個別の課題です。1点目の「(幼児が) こうしていた、ああしていた」という言動だけではなく、2点目、3点目のように、指導のよりどころとなる教師の思考や個々の幼児の育ちや課題についての記録が重要です。

繰り返しになりますが、教育目標は抽象的な言葉であることが多く、どのような姿も含まれると言えれば含まれ、結局漠然としてしまいかねません。そのため、教育目標の文言に幼児の姿を当てはめるのではなく、指導の意図や一見マイナスにも捉えられる姿の育ちの過程としての意味等を捉えることが重要となります。また、教師間で互いの記録を読み合う際にも、幼児の姿の意味を深めながら、教育目標の具体的な姿として共通理解することにつなげていきます。

○まとめ

日々保育を行う際には、園の教育目標—教育課程—長期の指導計画—短期の指導計画等、様々なよりどころがあり、日々の積み重ねから計画を立てます。そのため、教育目標について、ある1日やある遊び、といった単発の場面だけで捉えられるものではありません。しかし、教師間で共通理解を図りながら日々の保育を行うためには、教育目標と日常の保育がかけ離れていることはふさわしくありません。

一方、担任として1日を振り返る記録を、毎日、時間をかけて詳細を網羅することは難しく、特に印象に残っていることを端的に書くことが多くなります。記録は、詳細に書けばよいというものではありません。端的に書くことで1日の保育を整理できたり翌日の保育につなげたりすることができます。また、日の記録の一部を活用することで、物理的な分量が少なくなり、複数の教師の記録や考察を見合うことも可能となります。

このような、どの担任も行っている日々の記録の一部を使って、教育目標と照らし合わせてみることで、教師間で教育目標を共通理解していくことができます。

事例6 ビデオ等映像記録を通して

通常用いられる記述による記録だけでなく、研修の目的によって、ビデオ等の視聴覚機材を用いた映像による記録を利用することも効果的です。

保育中、幼児も教師も、“そのとき、その場”といつも動き続けています。多様な状況の中で教師には瞬時の判断や即応性が求められます。また、変化する状況は言葉にすることが難しく、言語化する行為自体が保育の専門性を要するものです。したがって、ビデオ等による映像記録は、映像を繰り返し再生し確認をすることで気が付かなかった点を意識化し、その場にいなかった教師と場面を共有し、多様な観点を引き出す契機となります。しかし同時にビデオカメラが入ることで撮る・撮られるという意識が保育に影響を及ぼす可能性もあります。あるいは、自分の実践をビデオで記録し、他者と共に振り返ることについて、抵抗感を感じる教師、見せる側、見る側双方に遠慮や批判など、様々な感情をもたらす可能性もあります。大切なことは、ビデオカンファレンスを行うことによって次の保育につながっていくということです。そのためには、保育を開示することが自然にできる雰囲気が園にあり、率直かつ建設的に語り合う場をいかにつくるかを検討しておくことも必要です。

■ビデオカンファレンス—学級活動を通して—

A幼稚園では新任の教師が増え、教師の構成に変化がありました。そこで、学級運営について互いにどのように行っているのか、3学期に行っている朝の会や帰りの会などの毎日の学級活動や当番活動の様子をビデオ撮影し、教師同士で見合い、記録を取り合う機会を設けることになりました。

<ビデオ> ー学級活動を通してー

A教師は保育室や園庭で遊んでいる幼児の遊びを見ながら順に片付け、手洗いやうがいを促し、支度の終わった幼児は席に着いて待っている。A教師「皆そろったようなので、今日のお当番さんお願いします」と声を掛けると、当番の幼児たちが前に出てきて、挨拶をする。A教師は出席を確認し「お休み何人ですか？」と声を掛けると、幼児は、「1人」「いち」「イチゴ」と答える。A教師はイチゴの絵を黒板にかき、皆で食べるふりをして楽しむ。

次に朝の挨拶をし、昼食のときに飲む牛乳の券を全員が出しているか、一緒に数を確認する。A教師「14、15、15枚だね。○組さんは全部で17人だったよね」幼児「17人」「あれ、少ない」「2人足りない」

A教師「今日は○○ちゃんは風邪でお休みだったよね、あともう1枚、誰か出してないんじゃないかしら」

<ビデオを見て語り合う>

この場面を見た他の年長組B教師は「自分の学級でも当番をやっているの、比べて見ると、当番の幼児たちがすうっと出てきて中心になっていました。先生の立ち位置も私と違って、先生は当番じゃない幼児たちの横で一緒に見ている。私は無意識に当番の幼児たちと並んで前に立っていたことに気が付きました。何気ない声掛けのタイミングや間の取り方、早さも違うなと思いました」という感想を述べた。また、年少組のC教師は、幼児が数の意識や数え方が生活の中で行われていることに着目し、「私は皆が牛乳券を出した後、自分で確認していました。こういう数のやり取りって面白いですね」と述べると、A教師は「幼児たちから始めたものなんですけれど、言葉遊びが楽しくて。お休みが“ナシ”が続き、そのときは梨を食べる動作を楽しみました」と幼児たちの姿を楽しそうに語っていた。

この事例では、ある特定の共通場面をビデオ撮影した記録を取り合い、幼児や教師の姿を見ながら具体的に話し合うことにより、生活の中で言葉や数のやり取りが行われていることに着目し、互いの学級や学年の様子、時期によって変化する幼児の姿や成長を園全体で共通理解することができました。また、教師の立ち位置の違いから、無意識の身体の振る舞いによって幼児との距離が違うことや、話し方のテンポやリズム、活動の流れや展開、時間に意識を向け、教師の個性や実践の違いを感じるきっかけとなっていました。

■多様な方法で幼児を見つめる

記録の取り方には、様々な方法があります。記憶を頼りに保育中の出来事を文章にする、観察者が保育中の幼児や教師の言動を文章で記録する、などが一般的かもしれませんが。文章は特に準備もいらず、紙とペンがあればいつでも記録に残すことができる利点があります。しかし、幼児の表情や目線など細部にまで観察の目がいかなかったり、幼児や教師の言動に記録の手が追いつかなかったりすることもあります。また、記録者の思いが強くなり、客観性に欠けることもあります。

ビデオによる記録は、撮影の場面が撮影者の視点に左右されることがありますが、視点を事前に話し合っておくことで、必要な場面の幼児の細かな様子や周囲の環境を記録することができます。映像記録は、教師自身が自分の言動を振り返ることができます。そして、何度も見直すことで、最初は気付かなかった幼児の姿が見えたり、同じ場面を見た他の教師の考えを聞いたり、幼児理解を深めることができます。

表 1 ビデオによる記録の特徴

長所	短所
<ul style="list-style-type: none">・繰り返し再生でき、確認ができる・その場にいるような臨場感が味わえる・情報量の多さ（身体、動き、表情、空間配置、活動の流れや展開などの時間）・第三者と共有しやすい	<ul style="list-style-type: none">・ビデオカメラのアングルから外れた事象に関する情報が欠如（撮影者の意図や編集が関与する）・個々の細かな音声が入りにくい・ビデオカメラがあることによる影響・撮影者、機材が必要

事例 1、2、3、4、5、6 から読み取れること

園内研修会の内容や方法は、園の保育の課題や教師の構成によって異なります。教師なら誰でも、「よりよい保育」を展開したいと願い、自分の資質能力を高めたいと思います。しかしながら「よりよい保育」というものは、どこかに理想の形があるわけではありません。日々の保育の中で、幼児にとって適切な環境とは何かを模索し、目の前の幼児と向き合いながら、保育を振り返ることで、自らの資質能力を高めていくことができます。自らの保育を振り返るきっかけの一つが、園内研修です。園内研

修によって、自分一人では見えないことも、多くの目を見て話し合えば、互いに理解が深まります。これが園内研修会を行う意義です。

事例1では新任教師の課題に寄り添った園内研究会を取り上げました。新任教師には、幼児のある言動が気になり始めると、違った側面からその幼児を理解し直すことができにくい傾向があります。事例1の新任教師はそれを自覚していて、自分のN児への見方はこれでよいのだろうかという疑問をもち、記録を取って他の教師に相談に乗ってもらいました。実はこの事例のように、記録という形で自己の保育を開示した時点で、幼児の見方への変化の第一歩といえるでしょう。事例2の教師も自分に自信がもてず率直に悩みを相談することができませんでしたが、記録を園内研修に提示したことによって、悩んでいた幼児理解を深めることができ、「気持ちが楽になった。もっと話し合いたい」と述べています。

新任教師や経験があっても自信がもてないでいる教師は、自分の指導の有り様や問題を直接厳しく指摘されると、ますます自分に自信がもてなくなりがちです。「記録」を媒介にして話し合うという方法は、課題を開示する側も自分の保育を客観視することになりますし、他の教師も様々な意見を出しやすくなります。そして何より、何でも話し合えるという教師間の風土を作り出します。

このような話合いの雰囲気が園の中に生まれたならば、事例3のように互いの保育を見合うという機会を通して、実践そのものを記録して話し合うことも可能になります。

そうした教師集団は幼児の情報を共有し、学び合う関係性が構築され、話合いを深めていくことができるようになります。事例4では、そうした教師集団において、記録から、各教師が自身のキャリア経験を生かして、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や資質・能力、5領域の視点から読み取ったことを率直に話し合うことで、幼児理解が深まっています。

事例5では、記録を基に教育目標とする幼児像と目の前の幼児の姿との関連を話し合うことで、教育目標の共通理解を深めています。教育目標は園の教育の大きな方向性であることから抽象的で、具体的な幼児の姿を共通理解し、日々の保育の中で意識することが難しいこともあります。日々の記録を基に話し合うことで、教育目標につながる具体的な幼児の姿について、各教師がイメージをもつことができます。このことは、各教師が協力して園の教育を実施する基盤となります。

記録の方法や園内研修の進め方にはいろいろな手段があり、教師のキャリアや人数、園内研修の時間がどの程度確保できるかなども影響してきます。そうしたときには、事例6のように、ビデオや写真といった映像記録を通してのカンファレンスも有効です。現在では多様な撮影機器があり、簡単に情報共有できる媒体もあります。「記録」として上手に活用をすれば、話し合いを有意義に進めることができるでしょう。

いずれにしても「記録」を取り、話し合いを進め、それを生かしていくことや自分の保育を開示して、多面的に保育を見つめ直すこと、「記録」を基に幼稚園教育要領に沿って、話し合いを深め、教師間での情報を共有していくことは、教師の資質能力の向上や保育の質の向上において重要な取組です。

(6) 保護者との連携に生かす

幼児の生活は、家庭・地域から幼稚園へ、そして幼稚園から家庭・地域へと連続しています。したがって幼児が幼児期にふさわしい生活を送るためには、幼稚園、家庭・地域が互いに連携を図ることが大切です。幼児の家庭での生活は一人一人異なります。園は教育方針を一方向的に伝えるだけではなく、幼稚園での実際の様子を具体的に伝えるとともに、家庭での様子を丁寧に聞き取り、保護者との双方向的な関係を結ぶようにします。保護者は、自分の子供が幼稚園でどのような生活をしているのかを気に掛けています。教師は、保護者の気持ちを受け止めながら、子育てを共に支える存在として、幼児期の教育で大事なことを分かりやすく伝える必要があります。

幼稚園では、幼児の世界や発達及び園の教育方針を理解してもらうために、保育参観や保育参加などを通して実際に「見る」機会を設けています。それと同時に、日常の園生活を細やかに伝える工夫も大切です。幼児の生活の様子について、時機を捉えて具体的に伝えることによって、保護者は園への信頼を高め、教育方針を深く理解するようになるでしょう。例えば、行事などにおいて、保護者は活動の一部始終を「見る」わけですが、そこに至るまでの試行錯誤の様子や様々な感情体験などを含めた過程を伝えることで、幼児の遊びや生活の意味が理解され、成長を深く理解し、共に喜び合うことができます。

そのような連携を図るために、教師には、日々の記録から保護者に伝えたい内容を精査し、分かりやすく伝える工夫が求められます。言葉を通してだけでなく、ときには写真やビデオなどの映像を交えて伝えることで、保護者は園生活に対する実感がわき、親子での話題も活発になり、関心も深まります。伝えたい内容により園便りや学級通信、タイムリーなその日のうちの掲示など、どの方法が適切なのか教師間で話し合うことも必要でしょう。

ここでは、保護者との連携を深めるための記録の活用について、二つの事例を挙げます。事例1では、教師の記録を通して、家庭とどのように幼児の理解を深めるかを考えます。事例2では、園の行事当日までの過程における経験や育ちについて、お便りを通して視覚的に分かりやすく伝えた実践を挙げます。

事例1 記録を介して保護者と教師とで幼児理解を深める（4歳児7月）

入園当初、保護者は、A児が言いたいことがうまく言葉で伝えられずに手が出ることや、集団になじめないことを心配していました。当初は無理に集団生活に入れようとせず、好きな本を読んだり、カード合わせをしたりなど、安定を図るために個別の関わりをすることもありました。

しかし保護者は、早く学級の友達に関心をもち、学級の友達と同じことをしてほしいと願っていました。これは、A児の記録を通して教師と保護者が話し合い、互いに理解を図りながら、A児の育ちにとって必要なことを考えられるようになった事例です。

《Aちゃん ここに座っていいよ》

今まで、プール遊びの苦手なA児には、自分のペースでじっくりと水に関わっていけるように配慮してきたが、水に少し慣れてきたこの時期、皆と一緒に楽しめる機会をつくることにした。すると、友達に水をかけて喜び、水をかけられても怒らずにかけ返している。

学級全員で発泡球やフィルムケースをプールに浮かべて拾う遊びをした。A児は皆の勢いと水しぶきに圧倒されて出遅れるが、どうにかフィルムケースを1個拾うことができた。また、ワニ歩きをするときも、友達の少ない場所を見付けて、プールの底に手を付け徐々に水の中で体を浮かせ、足を伸ばして歩き出した。「Aちゃん すごい！ワニ歩きできたね」教師が声を掛けると、それを見ていたB児が「Aちゃんここに座っていいよ。少し狭いけど」と言って自分の隣にA児が座れるだけのスペースを空けてくれた。教師が「Bくんが隣に座っていいって」と声を掛けると、A児は駆け足でB児の隣に座った。そして、両隣のB児とC児に「ありがとう、ありがとう」とニコニコしながら言っていた。B児とC児もニコニコ顔で「うん」と言っていた。

今まで「今日はプールに入らない」、「シャワーしない」と言うことが多かったA児だったが、翌日登園するなり「今日プール？」と教師に尋ね、プール遊びをしないことを聞くと「えー、ないの？」とがっかりする姿も見られた。

<記録からA児の成長を読み取る>

○プールでの遊びが始まった6月後半から7月初めは、顔に水がかかるのを嫌がり、大勢の友達がいる場所を避けたりするような場面があった。プールでの遊びに性急に誘わず、園庭での水遊びに十分慣れてきた頃を見計らい、学級の友達とのプ

ール遊びに誘いかけた。きっかけとしてよかったのではないが。

○プールの中では人の少ない所を選んで行動していた。少しでも安心できる場所を探すなど自分で判断して動いている。「水遊びがやりたい」という気持ちが強いいため、嫌なことも乗り越えようとしている。

○A児に対して「すごい」という教師の言葉は心からの喜びの声だった。その声がB児にも届き、A児の様子を見ていたのかどうかは分からないが、「隣に座っていいよ」と呼んだ。A児を呼んだことは、A児を学級の一員として見ているからだろう。

○B児の隣に座りに行くA児の様子から、友達がそばにいることの心地よさを、少しずつではあるが感じていることが理解できる。また、B児を中心とした周りの幼児たちも、学級の一員としてのA児に関心をもち始めているのであろう。今後もこのような関係が続くように、A児の心の動きや発達に応じながら、焦ることなく付き合いたい。保護者が心配しているので、この姿をすぐに伝え、共に喜び合いたい。

<保護者との連携に生かして>

記録から、水遊びのA児の様子を具体的に伝えたと、「本当ですか、嬉しいです」と言われました。入園より4か月近く、A児が皆と一緒に行動しない様子に心配されていたことがひしひしと感じられました。B児やC児との関わりのことも話すと、周りの友達が学級の仲間として受け入れていることに「仲間外れでなく嬉しい」と涙ぐまれ、安心した様子でした。今まで、保護者の焦りを感じながら、教師の自分も焦っていたのですが、保護者の気持ちを素直に受け入れられたことで、保護者との間に温かい関係のようなものが結ばれつつあるように思われました。今後も記録を取り続け保護者と共に幼児の成長を支えていけるようにしたいと思いました。

<その後の保護者との話合いの記録>

保護者 シャワーを浴びることができて、A児はとても喜んでいました。園で水遊びをするようになってから、プール教室でも少し潜れるようになりました。最近では学級の友達が家に遊びに来てくれるようになりました。

教師 今まではAちゃんの一方的な関わりでしたが、水鉄砲遊びで応答関係がもてるようになってきました。お母さんがいつもAちゃんの話をして、ゆったり聞いて関わっておられるので、安定してきましたね。まだ、思い込んでい

ることと違う行動や環境になると、そのことが受け入れにくくなる場所もありますが、この方法だけではなく、このようなこともあるというように少しずつ広げていけるといいですね。

保護者 そうなんです。家でも自分のやり方から外れるようなことがあると、断固として主張するのです。

教師 環境の変化に対して時間はかかりますが、次第に変化を自分の中に取り入れています。Aちゃんの気持ちの揺れを感じながら、〇〇だけど〇〇しようね、というように働き掛けてみてはどうでしょうか。

保護者 分かりました。気長に繰り返し納得できるようにしていきます。また、先生話を聞いてくださいね。

その後の話合いの記録からは、保護者と教師が共にA児の育ちを共有していると同時に、立場の違いによって保護者と教師では見方も違うことが分かります。互いの立場を尊重し、話し合ったことを整理しながら、今後の方針や保護者と教師の変容につながるようにしていきたいものです。

<保護者・教師の変容につながる連携>

ここでは前述の話合いの記録から、保護者・教師の気持ちの変化を捉えることで、保護者理解を深め、今後の指導の手立てを考えたいと思います。

【保護者の変容】

- ・水遊びやプールでの様子を具体的に知り、A児の成長が見られたことを嬉しく思う。
- ・家でA児が断固として自分の思いを主張したときの対応の仕方を悩んでいたが、園でどのようにしているかという話を聞いて、「家でもそのようにやってみようか」と前向きな気持ちになる。
- ・父親もA児の成長を感じ、よく遊ぶようになる。

【教師の変容】

- ・保護者のA児への愛情と、皆と同じことをしてほしいと焦る気持ちが、少しでも理解できたように思う。今は心を開いて園に信頼を寄せてくれていると感じる。
- ・最初はA児の行動が理解できず、保護者と同じように焦ることが多かったが、記録を通してA児の立場に立って行動を理解したことで、A児が愛おしくなってきた。
- ・自分自身がA児を理解できておらず、指導にも自信がなかったが、事例を通して保護者に話げできたことで気持ちも楽になり、保護者をサポートしながら、共にA児の成長を支えていきたいと感じた。

【指導の手立て】

- ・見立て遊びなどを取り入れながら、「〇〇にも見えるね」と、いろいろな見方ができるように働き掛ける
- ・友達との関わりの中で、「〇〇くんと一緒にいると楽しいなー」と互いの存在を感じるように言葉を掛ける
- ・保護者に課題を直接伝えるより、具体的な手立てを知らせたり、共に考えたりしながら、保護者が安定するように接したい

事例2 写真を用いたお便りを通して幼児の育ちや学びの軌跡を伝える

園の行事の意義やねらいは、園便りやそれまでに説明する場や機会を設けるなどして、その過程での幼児の姿、取組の様子、当日までの取組を通して幼児にどのような力が育まれているのかを発信する園も多いことでしょう。保護者に幼稚園教育への理解を深めてもらうためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に、幼児の育ちの様子が目で見えて分かる形で表れている写真を用いて、学級便りや掲示パネル等で伝えることが有効です。さらに、伝えたい内容によって、どのような発信が適切なかを話し合うことにより、伝えたい内容が一層明確になっていきます。

A園では、12月の生活発表会に向けて、改めて発信の仕方を教師間で話し合い、次のように実施することにしました。

○行事の意味や、園や教師のねらいなど…園便り、学級便り

○日常の遊びや生活経験が行事につながっていく様子…写真を用いた掲示パネル

○幼児の遊びや生活の姿から、今どのような力が育とうとしているのか、遊びや生活の意味や教師の意図など…ポートフォリオ（写真を用いたお便り）

その中から、これまでの遊びや生活の中で今どのような力が育っていて、それがどのように行事につながっていくのかを伝えるために写真を用いて作成したお便りを紹介します。11月の幼児の姿としてお便りを作成するにあたり、年中組（3年保育4歳児）の各担任が、それぞれ選んだ写真を提示し、伝えたいことを話し合いました。その中で、以下の3点をポイントにして対話を重ねることで、書きたいことの整理ができ、幼児の捉え方や次へつながる指導の仕方を考える機会にもなりました。

1. 内容（一番伝えたいことは何か）
2. 写真の選び方（伝えたいことは、この写真から分かるだろうか）
3. 幼児の育ちと教師の願いはどこなのか（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から考える）

次のページは、1学期から友達と一緒に、ヒーローになりきってごっこ遊びを楽しんできたり、絵本の世界や運動遊びを友達と一緒に楽しんだりするなど様々な経験からお話作りや表現遊びへ、そして発表会へとつながる過程での具体的な製作遊びを示した学級便りです。

こうじゃない?... え? こう?!



1学期から続くヒーローごっこ。園内パトロールをしたり、困ったことを解決したり、だんだん本格的にヒーローになりきって遊ぶようになってくると、マンや剣などのアイテムもこたあて作るようになってきました! 年長組が作るような芯を2つ繋げた(突き通した)かっこいい剣を作りたい!! 突き通すためには、短い芯にどうやって穴を開ければいいのか...? ハサミを挿して穴を開けて ちぎちぎ切った穴が大きすぎたり、切れてしまったり...

「あ〜もう、うまくいかな〜」
の繰り返し...



「ここ切ったらいいんじゃない?」もっとうしろにいかも!
「え?ここ」とアイデアを出し合い、友達と一緒に試行錯誤の連続。「いかも!」「ほんとだ!」「おお〜!」「できた!」
ひらめいた! 気がついた! 見つけた!

こうして工夫を重ねながら作り上げた自慢のアイテム。
見てくださいこのポーズ!! この過程がらまっているからこそこの最高の表情となりにきり感々

試行錯誤の時は沢山悩んで考えたけれど、だからこそ良い方法を自分たちで見つけた時の喜び、嬉しさ、達成感は大さかったと思います。子どもの力を信じて見守る、そんな援助を心掛けていきたいです!!



担任が、学年の話合いの場で「今の育ちの姿」として最初に提示したのは「こうやって潰したら切りやすいよ」とタイトルを付けた右の写真1枚だけでした。



確かに、力の入れ具合からも自分の作りたいイメージに向かって思いを込められている様子は感じますが、「何を一番伝えたいのだろう」という問いに担任は「難しいことにも、上手くいかないことにもあきらめずに工夫しながら製作に向き合う様子」

「年長組からヒントを得たり、上手くいった友達の作り方を観察したりして、気付いたことを教え合い、協力し合って作っていること」「試行錯誤しながら自分で作り上げたからこそ達成感を味わうことができたこと」と溢れる思いを話しながら「この写真は、試行錯誤の途中ではない」ことに気付いたようでした。そして「友達と一緒にだからあきらめずにアイデアを出し合って教え合って、粘り強く作り上げることができたことが伝わるのは、こっちの写真かもしれない」と前ページ左上の写真に差し替えました。さらに、「今度こそ上手くいかな」とそっと突き通す様子や、やり遂げた達成感が伝わるように、なりきって遊ぶ写真も添えました。そして、幼児の試行錯誤の様子が分かりやすいように、つぶやきや思いを幼児の言葉にして表しました。

発表会前にお便りを配布し、寄せられた感想を一部紹介します。

「時々、使い込まれた剣を園から持ち帰って来ては黙々と修理をしている様子に、上手くいかないと^{かんしゃく}癇癪を起していた子が、自分の納得いくまで頑張るようになってきたなと思っていたところです。園でお友達の力を借りて、できるまで頑張る経験をさせてもらっているからなのですね」

「家に持ち帰って来ても弟にも触らせず、また大事に園に持って行く理由がお便りを読んで分かりました。自分で工夫して作った宝物なのですね。発表会で、そんな自慢の剣を持って出てくるだけで感動しそうです」

お便りで、幼児が試行錯誤しながら取り組む姿を家庭に発信し、理解を図ることで、協力を得られるなど、幼児の主体的な取組を家庭と共に育む体制は、幼児の園生活がより豊かなものとなると思われます。

あらかじめ当日までの幼児の葛藤やプロセスについて写真を添えて具体的に保護者に伝えることで、保護者は我が子だけでなく、学級全体の育ちを共に喜び合える行事の見方、子どもへのまなざしも変化してきます。

写真を添えてお便りを発信することは、当日までの取組の過程を知らせるだけでなく、その過程で豊かな経験を積み重ねる延長上に行事があること、その日のでき栄えだけが評価すべきものではなく、その過程での経験こそが育ちにつながる意味あるものであるということを保護者に伝えるツールでもあると言えるでしょう。

事例1、2から読み取れること

事例1では幼稚園と個々の家庭との連携に記録を活用した例を、事例2では園での活動の意義や目的、幼児の育ちを家庭に伝えるために記録を活用している例を挙げました。記録を保護者との連携に生かすことによって、保護者の園への理解が深まるだけでなく、教師にとって幼児とその家族への理解も深まっていったことが分かります。記録は双方の理解を深める「根拠」としての役割を果たします。

近年では情報機器環境の充実に伴って、多くの園で、写真や動画を用いて、日頃の様子を発信するようになりました。日常の幼児の遊びや生活を通しての育ちや学びは、画像で記録し示すことにより、より情報が増え、分かりやすく伝えやすいエピソードとなります。幼児の育ちや学びは見えにくいからこそ、教師間においても保護者に対しても、可視化して伝えることが重要です。

一方で、記録された画像を選ぶことは、その画像に記録されている幼児の育ちを教師が読み取ることそのものです。どのように読み取ったかという、それぞれの読み取りや気づきを教師間で共有することによって、幼児理解の視点を多様な捉え方から得ることができるので、保育における選択肢を広げることにもつながります。したがって、画像をそのままに使用するのではなく、事例2のように伝えたい内容を十分に教師間で理解し合って発信することが必要です。

また、画像記録を積み重ねることで、時系列で育ちを把握できるようにもなります。継続的に育ちを追うことで、3歳児の姿がどのように成長しながら「幼児期の終わり

までに育ててほしい姿」へとつながっていくのかが把握しやすくなるのです。「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を念頭に、幼児の育ちを捉え、保護者に分かりやすく伝えることが教師自身の幼児理解を深めることになるでしょう。

さらには、保護者に単に画像で発信することにとどまらず、幼稚園教育に込められたねらいや育ちを含めた発信となり、教師と保護者が同じ目線で幼児を理解し、見守り、幼児自らの育ちを支えることにつながっていくのです。

第3章に掲載している事例一覧

(1) 記録から指導の過程を評価する

事例タイトル	事例の内容
事例1 「鬼の面作り」A児の姿から（5歳児2月）	指導の過程における幼児の体験の多様性や関連性を読み取り、その関連性を5つの領域の視点を基に捉えた事例
事例2 水族館遠足から水族館ごっこへ（4歳児11月）	指導の過程を振り返ることにより、幼児一人一人の課題を捉え直し、遊びを支える手立てを工夫し、指導の観点を見いだした事例
事例3 “わくわく造形展”に向けての活動（5歳児11月～12月）	記録から幼児を捉える際に、過去の記録を振り返り、幼児が体験してきたことを捉えた事例

(2) 教材研究に生かす

事例タイトル	事例の内容
事例1 幼児の発達に応じた教材を準備する（3歳児・5歳児 5月下旬～6月）	記録を見直す中で、「色水遊び」の3歳児と5歳児の遊びの様子から、発達に応じた教材の価値を捉えた事例
事例2 遊びのイメージを実現するために（4歳児12月）	幼児の遊びのイメージの実現に向けた指導の大切なポイントを見いだした事例
事例3 コマ回しの取組から（5歳児1月中旬から2月中旬）	例としてコマという教材に対する幼児一人一人の取り組み方の違いを捉え、それを図示することで、幼児一人一人の多様な体験を理解した事例

(3) 記録を指導計画の改善に生かす

事例タイトル	事例の内容
事例1 保育の過程の評価が次の指導計画へとつながる（5歳児4月下旬）	ウサギに関わる幼児の姿の記録から、行動の意味を理解し、幼児の育ちを評価しながら、指導計画の改善へとつなげた事例
事例2 教師からの刺激を受けて（3歳児5月中旬～6月初旬）	運動的な遊びの場面の記録を持ち寄り、幼児が体験していることや環境の構成の在り方を探り、指導計画の改善へとつなげた事例

(4) 記録を評価に生かす

事例タイトル	事例の内容
事例1 考えを出し合って応援する仲間（5歳児2月）	「協同する体験」、「規範意識の芽生えを育てる」といった観点から評価するとともに、教師の指導の在り方からも評価し、小学校教育へとつながる学びについて捉えた事例
事例2 グループの協同的活動を学級全体の活動につなげる（5歳児10月）	共通の目的に向かって友達と協同した活動の展開について、持続的な記録を通して、幼児の実態を把握し、各幼児がもっている課題にできるだけ即した指導を行った事例
事例3 記録を指導要録に生かすために（5歳児6月と翌年の2月）	日々の記録を基に、幼稚園教育要領に定めるねらいから幼児の成長を捉え、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに小学校の教師にも分かりやすく指導要録を作成した事例
事例4 記録を基に小学校教師と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について理解を深める（5歳児6月）	保育参観終了後に、担任の記録を見ながら幼稚園と小学校の教師が協議を行い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」への理解を深めた事例

(5) 記録を園内研修に生かす

事例タイトル	事例の内容
事例1 担任の記録を基に～一つの場面を多くの目で理解する～（4歳児7月）	一つの場面を丁寧に記録し、自園の指導計画と照らし合わせたり先輩教師に尋ねたりしながら、自分の幼児理解や指導を振り返った事例
事例2 話合いの音声記録を通して～教師の自己理解が深まる～（3歳児9月）	A児の記録を園内研修に提案し、幼児理解を深めるとともに、教師としての自己理解を深めた事例
事例3 他の教師の記録を通して（3歳児12月）	研究保育の対象学年の記録を対象学年以外の教師が取り、その記録を基に協議を行い、対象学年の担任が幼児の理解を深め、自分の関わりを振り返った事例
事例4 幼稚園教育において育みたい資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の理解を深める	経験豊富な教師、中堅の教師、経験の浅い教師が、経験の浅い教師の記録を基に、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や資質・能力、幼稚園教育要領の5つの領域の視点から協議を行い、これらについて理解を深めた事例
事例5 教育目標に向かう幼児の姿について記録の具体的な幼児の姿から考える（4歳児5月）	日の記録にある具体的な幼児の姿と園の教育目標である育てたい幼児の姿を結び付けて考察した事例
事例6 ビデオ等映像記録を通して	毎日の学級活動や当番活動の様子をビデオ撮影し、教師同士で見合い、記録を取り合い、幼児理解を深めた事例

(6) 保護者との連携に生かす

事例タイトル	事例の内容
事例1 記録を介して保護者と教師とで幼児理解を深める(4歳児7月)	A児の記録を通して教師と保護者が話し合い、互いに理解を図りながら、A児の育ちにとって必要なことを考えられるようになった事例
事例2 写真を用いたお便りを通して幼児の育ちや学びの軌跡を伝える	園の行事当日までの過程における経験や育ちについて、写真や教師のコメントを掲載したお便りを通して、保護者に分かりやすく伝えた事例

參考資料

- 1 教育基本法（抄）
- 2 学校教育法（抄）
- 3 学校教育法施行規則（抄）
- 4 幼稚園教育要領

1 教育基本法（抄）

平成十八年十二月二十二日法律第二十号

第十一条 幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。

2 学校教育法（抄）

昭和二十二年三月三十一日法律第二十六号
一部改正：令和元年六月二十六日法律第四十四号

第三章 幼稚園

第二十二条 幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。

第二十三条 幼稚園における教育は、前条に規定する目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

- 一 健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。
- 二 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。
- 三 身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと。
- 四 日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと。
- 五 音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと。

第二十四条 幼稚園においては、第二十二条に規定する目的を実現するための教育を行うほか、幼児期の教育に関する各般の問題につき、保護者及び地域住民その他の関係者からの相談に応じ、必要な情報の提供及び助言を行うなど、家庭及び地域における幼児期の教育の支援に努めるものとする。

第二十五条 幼稚園の教育課程その他の保育内容に関する事項は、第二十二条及び第二十三条の規定に従い、文部科学大臣が定める。

第二十六条 幼稚園に入園することのできる者は、満三歳から、小学校就学の始期に達するまでの幼児とする。

第八章 特別支援教育

第八十一条 幼稚園、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校及び中等教育学校においては、次項各号のいずれかに該当する幼児、児童及び生徒その他教育上特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対し、文部科学大臣の定めるところにより、障害による学習上又は生活上の困難を克服するための教育を行うものとする。

（第二項及び第三項 略）

3 学校教育法施行規則（抄）

昭和二十二年五月二十三日文部省令第十一号
一部改正：令和三年八月二十三日文部科学省令第三十七号

第三章 幼稚園

第三十七条 幼稚園の毎学年の教育週数は、特別の事情のある場合を除き、三十九週を下つてはならない。

第三十八条 幼稚園の教育課程その他の保育内容については、この章に定めるもののほか、教育課程その他の保育内容の基準として文部科学大臣が別に公示する幼稚園教育要領によるものとする。

4 幼稚園教育要領

○文部科学省告示第六十二号

学校教育法施行規則（昭和二十二年文部省令第十一号）第三十八条の規定に基づき、幼稚園教育要領（平成二十年文部科学省告示第二十六号）の全部を次のように改正し、平成三十年四月一日から施行する。

平成二十九年三月三十一日

文部科学大臣 松野 博一

幼稚園教育要領

目次

前文

第1章 総則

第1 幼稚園教育の基本

第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

第3 教育課程の役割と編成等

第4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価

第5 特別な配慮を必要とする幼児への指導

第6 幼稚園運営上の留意事項

第7 教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動など

第2章 ねらい及び内容

健康

人間関係

環境

言葉

表現

第3章 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項

教育は、教育基本法第1条に定めるとおり、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期すという目的のもと、同法第2条に掲げる次の目標を達成するよう行われなければならない。

- 1 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
- 2 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。
- 3 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
- 4 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。
- 5 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

また、幼児期の教育については、同法第11条に掲げるとおり、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならないこととされている。

これからの幼稚園には、学校教育の始まりとして、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが、各幼稚園において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの幼稚園において、幼児期にふさわしい生活をどのように展開し、どのような資質・能力を育むようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。

幼稚園教育要領とは、こうした理念の実現に向けて必要となる教育課程の基準を大綱的に定めるものである。幼稚園教育要領が果たす役割の一つは、公の性質を有する幼稚園における教育水準を全国的に確保することである。また、各幼稚園がその特色を生かして創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねられてきた教育実践や学術研究の蓄積を生かしながら、幼児や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、幼稚園教育要領を踏まえた教育活動の更なる充実を図っていくことも重要である。

幼児の自発的な活動としての遊びを生み出すために必要な環境を整え、一人一人の資質・能力を育てていくことは、教職員をはじめとする幼稚園関係者はもとより、家庭や地域の人々も含め、様々な立場から幼児や幼稚園に関わる全ての大人に期待される役割である。家庭との緊密な連携

の下、小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら、幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導をする際に広く活用されるものとなることを期待して、ここに幼稚園教育要領を定める。

第1章 総則

第1 幼稚園教育の基本

幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。

このため教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。これらを踏まえ、次に示す事項を重視して教育を行わなければならない。

- 1 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- 2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- 3 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

その際、教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。

第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- 1 幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、この章の第1に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。

(1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする
「知識及び技能の基礎」

- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」
- 2 1に示す資質・能力は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである。
- 3 次に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである。
- (1) 健康な心と体
- 幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
- (2) 自立心
- 身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。
- (3) 協同性
- 友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
- (4) 道徳性・規範意識の芽生え
- 友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
- (5) 社会生活との関わり
- 家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。
- (6) 思考力の芽生え
- 身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断し

たり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることをもちかえりながら関わるようになる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

第3 教育課程の役割と編成等

1 教育課程の役割

各幼稚園においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの幼稚園教育要領の示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとする。

また、各幼稚園においては、6に示す全体的な計画にも留意しながら、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ教育課程を編成すること、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。

2 各幼稚園の教育目標と教育課程の編成

教育課程の編成に当たっては、幼稚園教育において育みたい資質・能力を踏まえつつ、各幼稚園の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や

地域とも共有されるよう努めるものとする。

3 教育課程の編成上の基本的事項

- (1) 幼稚園生活の全体を通して第2章に示すねらいが総合的に達成されるよう、教育課程に係る教育期間や幼児の生活経験や発達の過程などを考慮して具体的なねらいと内容を組織するものとする。この場合においては、特に、自我が芽生え、他者の存在を意識し、自己を抑制しようとする気持ちが生まれる幼児期の発達の特性を踏まえ、入園から修了に至るまでの長期的な視野をもって充実した生活が展開できるように配慮するものとする。
- (2) 幼稚園の毎学年の教育課程に係る教育週数は、特別の事情のある場合を除き、39週を下ってはならない。
- (3) 幼稚園の1日の教育課程に係る教育時間は、4時間を標準とする。ただし、幼児の心身の発達の程度や季節などに適切に配慮するものとする。

4 教育課程の編成上の留意事項

教育課程の編成に当たっては、次の事項に留意するものとする。

- (1) 幼児の生活は、入園当初の一人一人の遊びや教師との触れ合いを通して幼稚園生活に親しみ、安定していく時期から、他の幼児との関わりの中で幼児の主体的な活動が深まり、幼児が互いに必要な存在であることを認識するようになり、やがて幼児同士や学級全体で目的をもって協同して幼稚園生活を展開し、深めていく時期などに至るまでの過程を様々な経ながら広げられていくものであることを考慮し、活動がそれぞれの時期にふさわしく展開されるようにすること。
- (2) 入園当初、特に、3歳児の入園については、家庭との連携を緊密にし、生活のリズムや安全面に十分配慮すること。また、満3歳児については、学年の途中から入園することを考慮し、幼児が安心して幼稚園生活を過ごすことができるよう配慮すること。
- (3) 幼稚園生活が幼児にとって安全なものとなるよう、教職員による協力体制の下、幼児の主体的な活動を大切にしつつ、園庭や園舎などの環境の配慮や指導の工夫を行うこと。

5 小学校教育との接続に当たっての留意事項

- (1) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。
- (2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

6 全体的な計画の作成

各幼稚園においては、教育課程を中心に、第3章に示す教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の計画、学校保健計画、学校安全計画などとを関連させ、一体的に教育活

動が展開されるよう全体的な計画を作成するものとする。

第4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価

1 指導計画の考え方

幼稚園教育は、幼児が自ら意欲をもって環境と関わることによりつくり出される具体的な活動を通して、その目標の達成を図るものである。

幼稚園においてはこのことを踏まえ、幼児期にふさわしい生活が展開され、適切な指導が行われるよう、それぞれの幼稚園の教育課程に基づき、調和のとれた組織的、発展的な指導計画を作成し、幼児の活動に沿った柔軟な指導を行わなければならない。

2 指導計画の作成上の基本的事項

(1) 指導計画は、幼児の発達に即して一人一人の幼児が幼児期にふさわしい生活を展開し、必要な体験を得られるようにするために、具体的に作成するものとする。

(2) 指導計画の作成に当たっては、次に示すところにより、具体的なねらい及び内容を明確に設定し、適切な環境を構成することなどにより活動が選択・展開されるようにするものとする。

ア 具体的なねらい及び内容は、幼稚園生活における幼児の発達の過程を見通し、幼児の生活の連続性、季節の変化などを考慮して、幼児の興味や関心、発達の実情などに応じて設定すること。

イ 環境は、具体的なねらいを達成するために適切なものとなるように構成し、幼児が自らその環境に関わることにより様々な活動を展開しつつ必要な体験を得られるようにすること。その際、幼児の生活する姿や発想を大切にし、常にその環境が適切なものとなるようにすること。

ウ 幼児の行う具体的な活動は、生活の流れの中で様々に変化するものであることに留意し、幼児が望ましい方向に向かって自ら活動を展開していくことができるよう必要な援助をすること。

その際、幼児の実態及び幼児を取り巻く状況の変化などに即して指導の過程についての評価を適切に行い、常に指導計画の改善を図るものとする。

3 指導計画の作成上の留意事項

指導計画の作成に当たっては、次の事項に留意するものとする。

(1) 長期的に発達を見通した年、学期、月などにわたる長期の指導計画やこれとの関連を保ちながらより具体的な幼児の生活に即した週、日などの短期の指導計画を作成し、適切な指導が行われるようにすること。特に、週、日などの短期の指導計画については、幼児の生活のリズムに配慮し、幼児の意識や興味の連続性のある活動が相互に関連して幼稚園生活の自然な流れの中に組み込まれるようにすること。

- (2) 幼児が様々な人やものとの関わりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するようにするとともに、心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすること。
- (3) 言語に関する能力の発達と思考力等の発達が関連していることを踏まえ、幼稚園生活全体を通して、幼児の発達を踏まえた言語環境を整え、言語活動の充実を図ること。
- (4) 幼児が次の活動への期待や意欲をもつことができるよう、幼児の実態を踏まえながら、教師や他の幼児と共に遊びや生活の中で見通しをもったり、振り返ったりするよう工夫すること。
- (5) 行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。
- (6) 幼児期は直接的な体験が重要であることを踏まえ、視聴覚教材やコンピュータなど情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮すること。
- (7) 幼児の主体的な活動を促すためには、教師が多様な関わりをもつことが重要であることを踏まえ、教師は、理解者、共同作業者など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう、活動の場面に応じて、適切な指導を行うようにすること。
- (8) 幼児の行う活動は、個人、グループ、学級全体などで多様に展開されるものであることを踏まえ、幼稚園全体の教師による協力体制を作りながら、一人一人の幼児が興味や欲求を十分に満足させるよう適切な援助を行うようにすること。

4 幼児理解に基づいた評価の実施

幼児一人一人の発達の理解に基づいた評価の実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。
- (2) 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること。

第5 特別な配慮を必要とする幼児への指導

1 障害のある幼児などへの指導

障害のある幼児などへの指導に当たっては、集団の中で生活することを通して全体的な発達を促していくことに配慮し、特別支援学校などの助言又は援助を活用しつつ、個々の幼児の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。

また、家庭、地域及び医療や福祉、保健等の業務を行う関係機関との連携を図り、長期的な視点で幼児への教育的支援を行うために、個別の教育支援計画を作成し活用することに努めるとともに、個々の幼児の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成し活用することに努めるものとする。

2 海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児の幼稚園生活への適応

海外から帰国した幼児や生活に必要な日本語の習得に困難のある幼児については、安心して自己を発揮できるよう配慮するなど個々の幼児の実態に応じ、指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。

第6 幼稚園運営上の留意事項

- 1 各幼稚園においては、園長の方針の下に、園務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、教育課程や指導の改善を図るものとする。また、各幼稚園が行う学校評価については、教育課程の編成、実施、改善が教育活動や幼稚園運営の中核となることを踏まえ、カリキュラム・マネジメントと関連付けながら実施するよう留意するものとする。
- 2 幼児の生活は、家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりをもつものであることに留意し、家庭との連携を十分に図るなど、幼稚園における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにするものとする。その際、地域の自然、高齢者や異年齢の子供などを含む人材、行事や公共施設などの地域の資源を積極的に活用し、幼児が豊かな生活体験を得られるように工夫するものとする。また、家庭との連携に当たっては、保護者との情報交換の機会を設けたり、保護者と幼児との活動の機会を設けたりなどすることを通じて、保護者の幼児期の教育に関する理解が深まるよう配慮するものとする。
- 3 地域や幼稚園の実態等により、幼稚園間に加え、保育所、幼保連携型認定こども園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るものとする。特に、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続のため、幼稚園の幼児と小学校の児童との交流の機会を積極的に設けるようにするものとする。また、障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むよう努めるものとする。

第7 教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動など

幼稚園は、第3章に示す教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動について、学校教育法に規定する目的及び目標並びにこの章の第1に示す幼稚園教育の基本を踏まえ実施するものとする。また、幼稚園の目的の達成に資するため、幼児の生活全体が豊かなものとなるよう家庭や地域における幼児期の教育の支援に努めるものとする。

第2章 ねらい及び内容

この章に示すねらいは、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものであり、内容は、ねらいを達成するために指導する事項である。各領域は、これらを幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域「健康」、人との関わりに関する領域「人間関係」、身近な環境との関わりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ、示したものである。内容の取扱いは、幼児の発達を踏まえた指導を行うに当たって留意すべき事項である。

各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。

また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であることを踏まえ、指導を行う際に考慮するものとする。

なお、特に必要な場合には、各領域に示すねらいの趣旨に基づいて適切な、具体的な内容を工夫し、それを加えても差し支えないが、その場合には、それが第1章の第1に示す幼稚園教育の基本を逸脱しないよう慎重に配慮する必要がある。

健康

〔健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。〕

1 ねらい

- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。

2 内容

- (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- (3) 進んで戸外で遊ぶ。
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- (5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。
- (6) 健康な生活のリズムを身に付ける。
- (7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄^{せつ}などの生活に必要な活動を自分でする。
- (8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。

- (9) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。
- (10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。
- (2) 様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。その際、多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること。
- (3) 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。
- (4) 健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。
- (5) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、幼児の自立心を育て、幼児が他の幼児と関わりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付け、次第に見通しをもって行動できるようにすること。
- (6) 安全に関する指導に当たっては、情緒の安定を図り、遊びを通して安全についての構えを身に付け、危険な場所や事物などが分かり、安全についての理解を深めるようにすること。また、交通安全の習慣を身に付けるようにするとともに、避難訓練などを通して、災害などの緊急時に適切な行動がとれるようにすること。

人間関係

[他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。]

1 ねらい

- (1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- (2) 身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。
- (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

2 内容

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2) 自分で考え、自分で行動する。
- (3) 自分でできることは自分でする。
- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達によさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。
- (2) 一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気付き、自信をもって行動できるようにすること。
- (3) 幼児が互いに関わりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること。
- (4) 道徳性の芽生えを培うに当たっては、基本的な生活習慣の形成を図るとともに、幼児が他の幼児との関わりの中で他人の存在に気付き、相手を尊重する気持ちをもって行動できるようにし、また、自然や身近な動植物に親しむことなどを通して豊かな心情が育つようにすること。特に、人に対する信頼感や思いやりの気持ちは、葛藤やつまずきをも体験し、それらを乗り越えることにより次第に芽生えてくることに配慮すること。
- (5) 集団の生活を通して、幼児が人との関わりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つ

ようにすること。

- (6) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみを持ち、人と関わることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること。また、生活を通して親や祖父母などの家族の愛情に気づき、家族を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。

環境

〔周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。〕

1 ねらい

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

2 内容

- (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。
- (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする。
- (6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。
- (7) 身近な物を大切にすること。
- (8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- (9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- (10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- (11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
- (12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心を持ち、物事の法則性に気づき、自分なりに考えることができるようにな

- る過程を大切にすること。また、他の幼児の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること。
- (2) 幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。
- (3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分から関わろうとする意欲を育てるとともに、様々な関わり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にすること、公共心、探究心などが養われるようにすること。
- (4) 文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。
- (5) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

言葉

〔経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。〕

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。

2 内容

- (1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常の挨拶をする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。

(10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
- (2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。
- (3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- (4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。
- (5) 幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。

表現

〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。〕

1 ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2 内容

- (1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

3 内容の取扱い

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- (1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。
- (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
- (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること。

第3章 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項

- 1 地域の実態や保護者の要請により、教育課程に係る教育時間の終了後等に希望する者を対象に行う教育活動については、幼児の心身の負担に配慮するものとする。また、次の点にも留意するものとする。
 - (1) 教育課程に基づく活動を考慮し、幼児期にふさわしい無理のないものとなるようにすること。その際、教育課程に基づく活動を担当する教師と緊密な連携を図るようにすること。
 - (2) 家庭や地域での幼児の生活も考慮し、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の計画を作成するようにすること。その際、地域の人々と連携するなど、地域の様々な資源を活用しつつ、多様な体験ができるようにすること。
 - (3) 家庭との緊密な連携を図るようにすること。その際、情報交換の機会を設けたりするなど、保護者が、幼稚園と共に幼児を育てるという意識が高まるようにすること。
 - (4) 地域の実態や保護者の事情とともに幼児の生活のリズムを踏まえつつ、例えば実施日数や時間などについて、弾力的な運用に配慮すること。
 - (5) 適切な責任体制と指導體制を整備した上で行うようにすること。
- 2 幼稚園の運営に当たっては、子育ての支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の

機会を提供したりするなど、幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進め、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めるものとする。その際、心理や保健の専門家、地域の子育て経験者等と連携・協働しながら取り組むよう配慮するものとする。

「指導と評価に生かす記録」作成協力者（敬称略・五十音順）

浅原麻美	神戸大学附属幼稚園教諭
岡林律子	高知県教育委員会事務局幼保支援課専門企画員
大野歩	山梨大学教育学部准教授
桶田ゆかり	十文字学園女子大学教育人文学部幼児教育学科教授
駒久美子	千葉大学教育学部准教授
高梨智子	浦安市健康こども部保育幼稚園課副主幹
高橋慶子	目黒区立みどりがおかこども園長
田代恵美子	明治学院大学心理学部教育発達学科特命教授
波岡千穂	学校法人伸和学園堀川幼稚園副園長
町山太郎	学校法人町山学園幼保連携型認定こども園まどか幼稚園長
千川奈津美	滋賀大学教育学部附属幼稚園教諭
望月文代	育英大学教育学部教育学科准教授
安田徳章	江東区立ひばり幼稚園長
山田有希子	東京学芸大学附属幼稚園（小金井園舎）副園長

（職名は令和3年10月現在）

なお、文部科学省においては、次の者が本資料の編集に当たった。

大杉住子	文部科学省初等中等教育局幼児教育課長
小久保篤子	文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官
井上睦子	文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長 （元 文部科学省初等中等教育局幼児教育課長）
湯川秀樹	青山学院大学コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科教授 （元 文部科学省初等中等教育局視学官）